

第40回 神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表要旨



2016年11月13日(日)

於：横浜市歴史博物館

主催

神奈川県考古学会

共催

横浜市歴史博物館

後援

神奈川県教育委員会

川崎市教育委員会

公益財団法人かながわ考古学財団

横浜市教育委員会

相模原市教育委員会

表 紙：過去の発表要旨

裏表紙：瓦塔 東京都東村山市教育委員会

『瓦塔調査報告書』より転載

開催要項

開催日：2016年11月13日（日）会場：横浜市歴史博物館 講堂

40回記念

10:00～10:10 開会挨拶 神奈川県考古学会 会長 岡本孝之

調査・研究発表

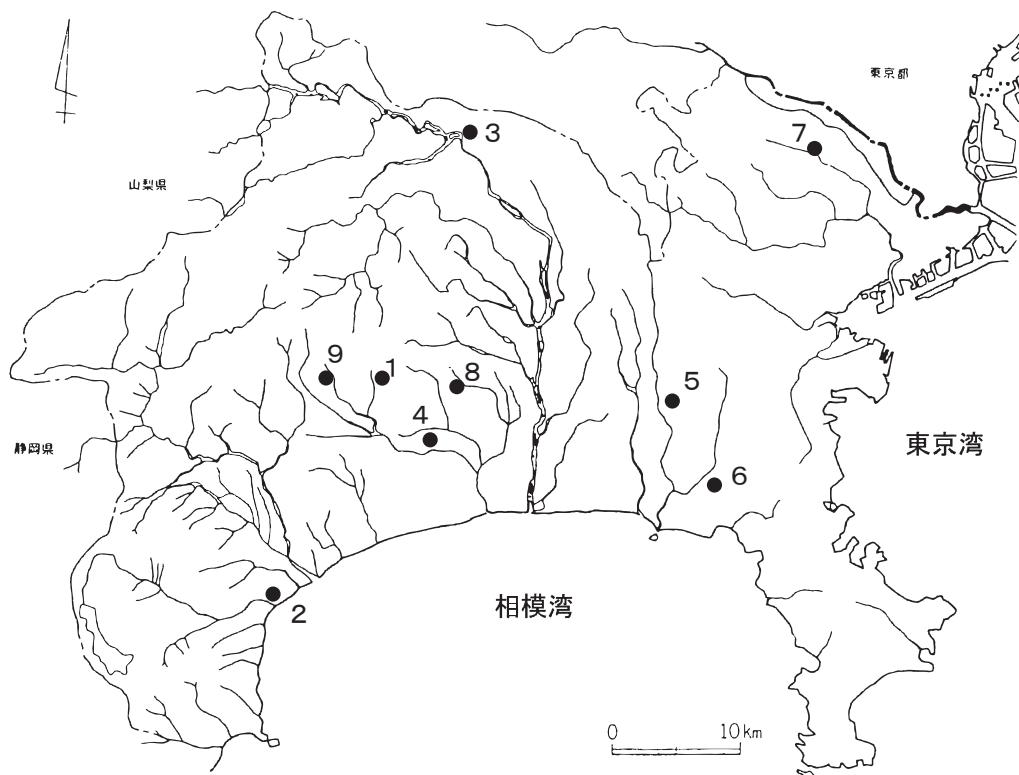
10:10～10:40 秦野市	蓑毛小林遺跡 (公財)かながわ考古学財団 吉澤 健氏
10:40～11:20 小田原市	天神山遺跡 第Ⅲ地点 玉川文化財研究所 戸田哲也氏
11:20～11:50 相模原市	国指定史跡川尻石器時代遺跡 相模原市教育委員会 中川真人氏
11:50～13:10 昼休み	
13:10～13:40 平塚市	竹之内遺跡 第5地点 北金目塚越遺跡 第18地点 大成エンジニアリング(株) 山内淳司氏・市川康弘氏
13:40～14:10 横浜市	下飯田林遺跡 第2地点 玉川文化財研究所 西野吉論氏
14:10～14:50 鎌倉市	宝積寺跡・天神山下城遺跡 武相考古学研究所 金森弘晃氏
14:50～15:00 休憩	
15:00～15:30 川崎市	橘樹郡衙跡 [千年伊勢山台遺跡] 川崎市教育委員会 栗田一生氏
15:30～16:00 伊勢原市	上粕屋・秋山上遺跡 第2次調査 上粕屋・秋山遺跡 (公財)かながわ考古学財団 村松 篤氏
16:00～16:30 秦野市	横野山王原遺跡 (公財)かながわ考古学財団 天野賢一氏
16:30～16:40 閉会挨拶	神奈川県考古学会 副会長 中村若枝

<図書交換会> 時間：10:15～15:15 会場：横浜市歴史博物館 研修室

目 次

<調査・研究発表>

1. 秦野市	蓑毛小林遺跡	—秦野市の槍先形尖頭器製作址—	3	
2. 小田原市	天神山遺跡第Ⅲ地点	—縄文時代中期から後期の集落と墓域の調査—	9	
3. 相模原市	国指定史跡 川尻石器時代遺跡	—縄文時代後・晩期集落の調査—	15	
4. 平塚市	竹之内遺跡第5地点	北金目塚越遺跡第18地点	—初の勾玉出土—	21
5. 横浜市	下飯田林遺跡第2地点	—弥生時代後期後半の集落跡—	27	
6. 鎌倉市	宝積寺跡・天神山下城遺跡	—山頂から一括廃棄状況を示す瓦塔の出土—	33	
7. 川崎市	橘樹郡衙跡〔千年伊勢山台遺跡〕	第16～20次調査 —平成27年度橘樹官衙関連遺跡群確認事業の成果—	37	
8. 伊勢原市	上粕屋・秋山上遺跡第2次調査	上粕屋・秋山遺跡 —縄文時代後期前半の集落と中世～近世の遺構群—	43	
9. 秦野市	横野山王原遺跡	—秦野地方の富士山宝永大噴火の被害と復興—	47	
附.	神奈川県遺跡調査・研究発表会	発表遺跡一覧（第1～40回）	53	



図中番号は上記 調査・研究発表 の目次頭の番号と一致

秦野市 蓑毛小林遺跡

— 秦野市の槍先形尖頭器製作址 —

よしざわ つよし
吉澤 健

所在地 秦野市蓑毛 39 番地ほか

調査機関 公益財団法人 かながわ考古学財団

調査担当 加藤久美・吉澤 健

調査原因 新東名高速道路建設事業

調査期間 2013年12月1日～継続中

調査面積 8,477 m²

1. 遺跡の立地

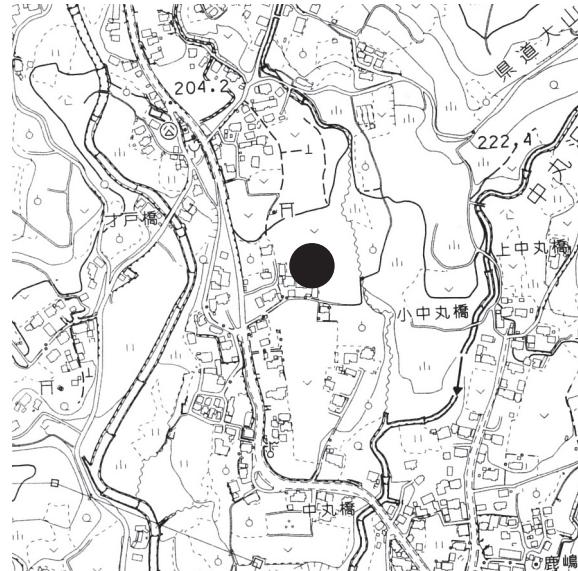
蓑毛小林遺跡（秦野市No.157）は小田急小田原線秦野駅から北方3.6km、丹沢山地のふもとの秦野盆地北東部に位置する。本遺跡は北側丘陵部から続く南向きの緩斜面に立地しており、西側100mにはヤビツ峠付近を源流とする金目川が、東側数mには小蓑毛沢が南流する。

本遺跡から金目川をはさんで西側約250mには東田原中丸遺跡が、小蓑毛沢をはさんで東側約100mには寺山中丸遺跡が位置しており、かながわ考古学財団により調査が実施された。また、寺山中丸遺跡の東側、本遺跡から約200mには現在発掘調査中である寺山角ヶ谷戸遺跡が近接している。

今回報告する旧石器時代の遺物は、本遺跡と寺山中丸遺跡とで確認された。秦野市内ではローム層の堆積が厚く、これまで旧石器時代の遺物がまとまって発見された遺跡は秦野盆地南東部の太岳院遺跡のみであった。現時点では、本遺跡のB2U層から出土した遺物群が秦野市内最古の事例である。

2. 調査に至る経緯と調査経過

本調査は中日本高速道路株式会社による新東名高速道路建設事業（秦野市蓑毛地区）に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査である。このため中日本高速道路株式会社から委託を受け、公益財団法



第1図 遺跡位置図 (S=1/10,000)

人かながわ考古学財団が2013年12月より発掘調査を開始し、現在も継続中である。調査は工事用道路部分から開始され、現在は本体工事範囲の調査を実施している。

3. 調査の概要

平成27年度末までに調査が実施された面積は8,477 m²であり、古墳時代を除く近世から旧石器時代までの遺物や遺構を検出した。しかし、縄文時代から近世の時期に該当する遺物、遺構の数はともに少量である。また、本遺跡に隣接する寺山中丸遺跡、寺山角ヶ谷戸遺跡では奈良・平安時代、縄文時代の住居址が検出されているが、現在のところ本遺跡では1軒も検出されていない。後述するが、この点については土砂災害による影響の可能性があり、土石流とみられる痕跡が遺跡中央部と西端部で複数確認されている。これらの明確な時期は不明であるが、層位や遺構の前後関係、わずかに出土した遺物内容から、旧石器時代、奈良・

平安時代から近世にかけて、そして近世以降のものと推測される。仮に住居址のような遺構が存在したとしても、遺構や遺物は押し流されてしまったか、あるいはこうした被害を受けやすいという状況を忌避して住居を構築しなかった可能性が考えられる。

近世～奈良・平安時代

近世の遺構としては畝状遺構 13 箇所、溝状遺構 15 条、土坑 92 基（うち土坑墓 48 基）を検出した。奈良・平安時代遺構としては円形土坑 89 基、畝状遺構（畠）やピットを検出した。これらの時代に帰属する出土遺物はわずかであり、現在のところ住居址は検出されていない。奈良・平安時代のピットには掘立柱建物とみられる配置も見られるが、明確ではない。こうしたことから奈良・平安時代～近世にかけては、本遺跡は耕作地として利用されていたと考えられる。

弥生時代、縄文時代

弥生時代の遺構としては土坑 19 基（うち陥し穴 12 基）、ピットを検出したが、遺物は出土していない。縄文時代の遺構としては土坑 66 基（うち陥し穴 51 基）、埋甕 1 基、ピットを検出した。住居址は検出されず、出土遺物量も多くはないが、後期の土器片集中箇所や、早期～前期と考えられる黒曜石の石器製作址が確認された。

現在の地形は比較的平坦な緩斜面であるが、ローム層上面では起伏のある地形であったことが確認された。遺跡東端部に南北方向の痩せ尾根状地形があり、その東側は小蓑毛沢に向かって傾斜している。西側は南西方向に緩やかに傾斜し、遺跡西端部で再び高くなったのち、金目川に向かって傾斜する地形になっている。この地形は弥生時代まで存在し、この時代には地形を利用して陥し穴猟を行う狩場であったと考えられる。

旧石器時代

43 か所の調査坑とトレンチを 1 箇所調査した。大半の調査坑では B0 層相当層で土石流によって堆積したとみられる、拳大から人頭大の亜角礫が

大量に検出された。これらの調査坑は先述の谷状地形に位置し、一部では L2 層・B2L 層相当層でも同様の痕跡が確認された。このことから旧石器時代には谷状地形に向かって複数回の土砂災害があったことが推測される。一方、尾根上に位置する 2 箇所の調査坑で L1H 層から礫と剥片が出土した。このためこれらの調査坑を拡張して本格調査を実施したところ、南側の調査坑（調査坑 37）で「L1H 層下層～B1 層上層」と「L2 層下層～B2U 層」との 2 面で膨大な量の石器が出土した。以下、この両者の概要を報告する。

L1H 層下層～B1 層上層

この遺物群を調査した結果、調査坑 37 を 395 m²まで拡張することとなり、石器出土点数は 29,912 点に及んだ。大半は碎片であり、東部分のブロックでは厚さ約 1 m にわたって濃密な分布を見せた。製品は槍先形尖頭器のみで、未製品、欠損品を含め 250 点である。その大半はガラス質黒色安山岩製であるが、黒曜石、凝灰岩製も多数含まれている。調査中のため分析はこれからになるが、使用された黒曜石はほとんどが信州産のものであると思われる。長さ 3 ～ 5 cm の小型のものが比較的多く、両面加工、片面加工の両方が存在する。調査範囲の南部には尖頭器の素材剥片と考えられる、長さ 10cm 程の大型剥片がまとまって出土し、碎片と大型剥片で集中箇所を異にしている状況が確認された。一方で、槍先形尖頭器の出土状況は全体的に散漫で、碎片集中箇所からも剥片集中箇所からも出土している。現在のところ、この遺物群には石核は認められず、黒曜石製の大型剥片も認められなかった。これらの石器には多量の炭化物が伴っており、5 ～ 6 箇所のブロックを形成する。加えて礫群 3 基と炉址 1 基を検出した。

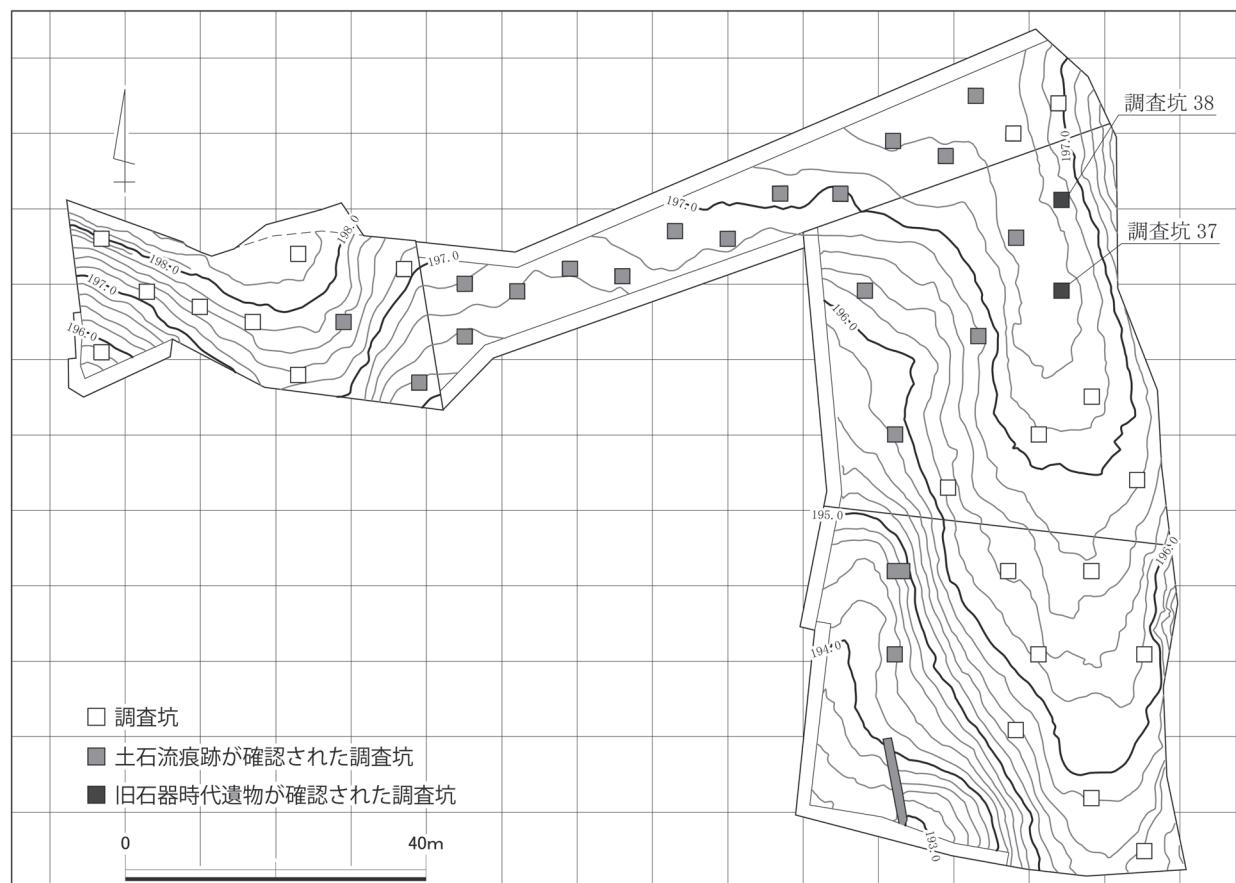
L2 層下層～B2U 層

土層確認のため、拡張した調査坑 37 の中央部に調査坑を設定して掘削したところ、約 1 m 下方の B2U 層上層で黒曜石の剥片と多数の礫が出

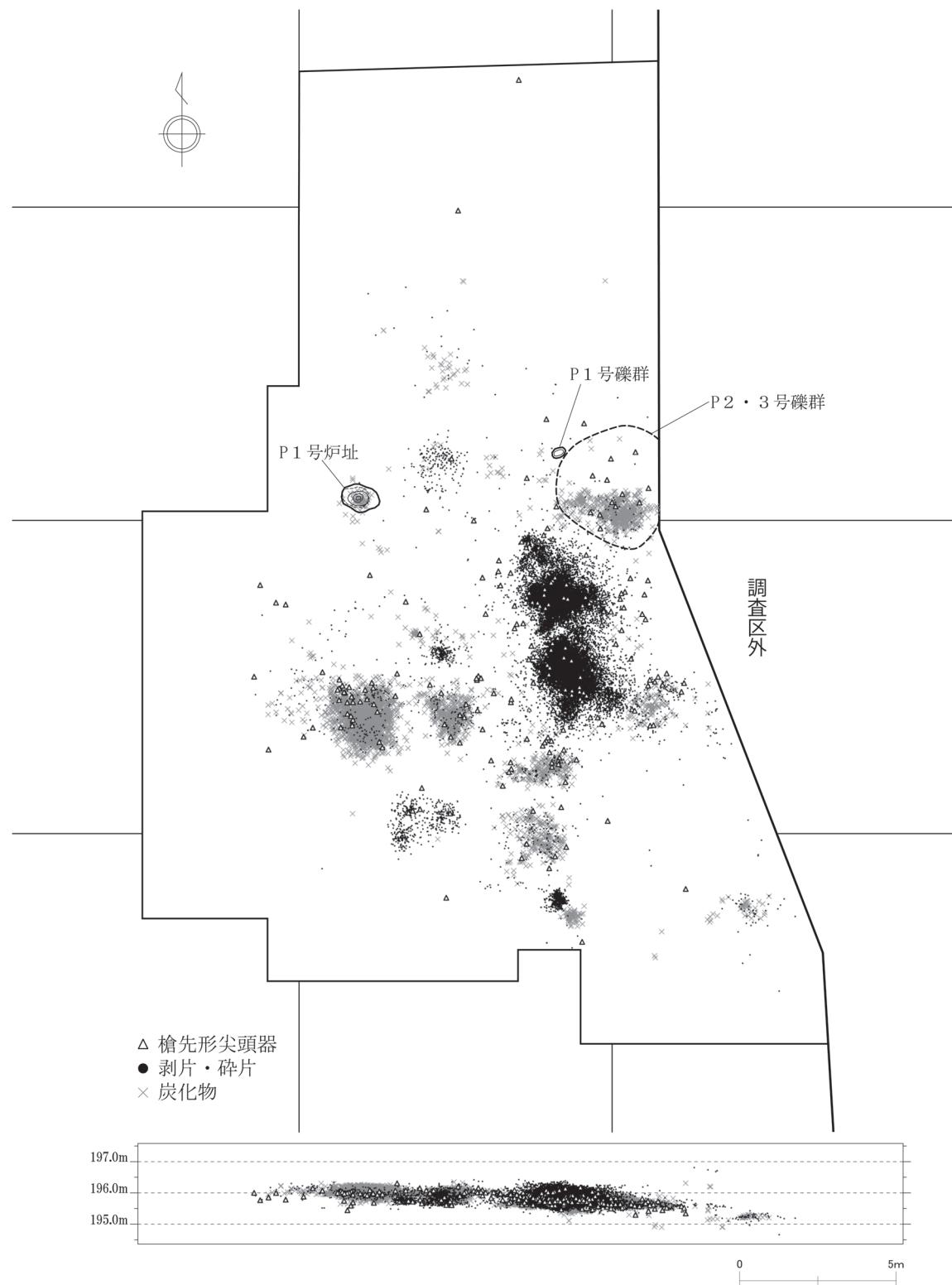
土した。このため調査坑37全体を調査対象とし、遺物の広がりを確認することとなった。その結果、調査範囲を437m²にまで拡張し、出土した石器は約18,200点に及んでいる。平成28年度現在も調査は継続中で、調査範囲はさらに拡張しており、今後遺物点数は増加することが推定される。これらの石器の大半は西側中央部にブロックを形成しており、碎片、剥片を中心として、石核、製品が含まれている。製品はナイフ形石器、搔器、角錐状石器が確認されている。石材にはガラス質黒色安山岩、硬質細粒凝灰岩、チャート、黒曜石が見られる。分析はこれからになるが、黒曜石は箱根産のものと見られる。遺物ブロックから南側は傾斜が強くなっているが、北側は比較的平坦であり、礫群を検出した。礫は3000点を数え、5～7基の礫群を形成している。

4. まとめ

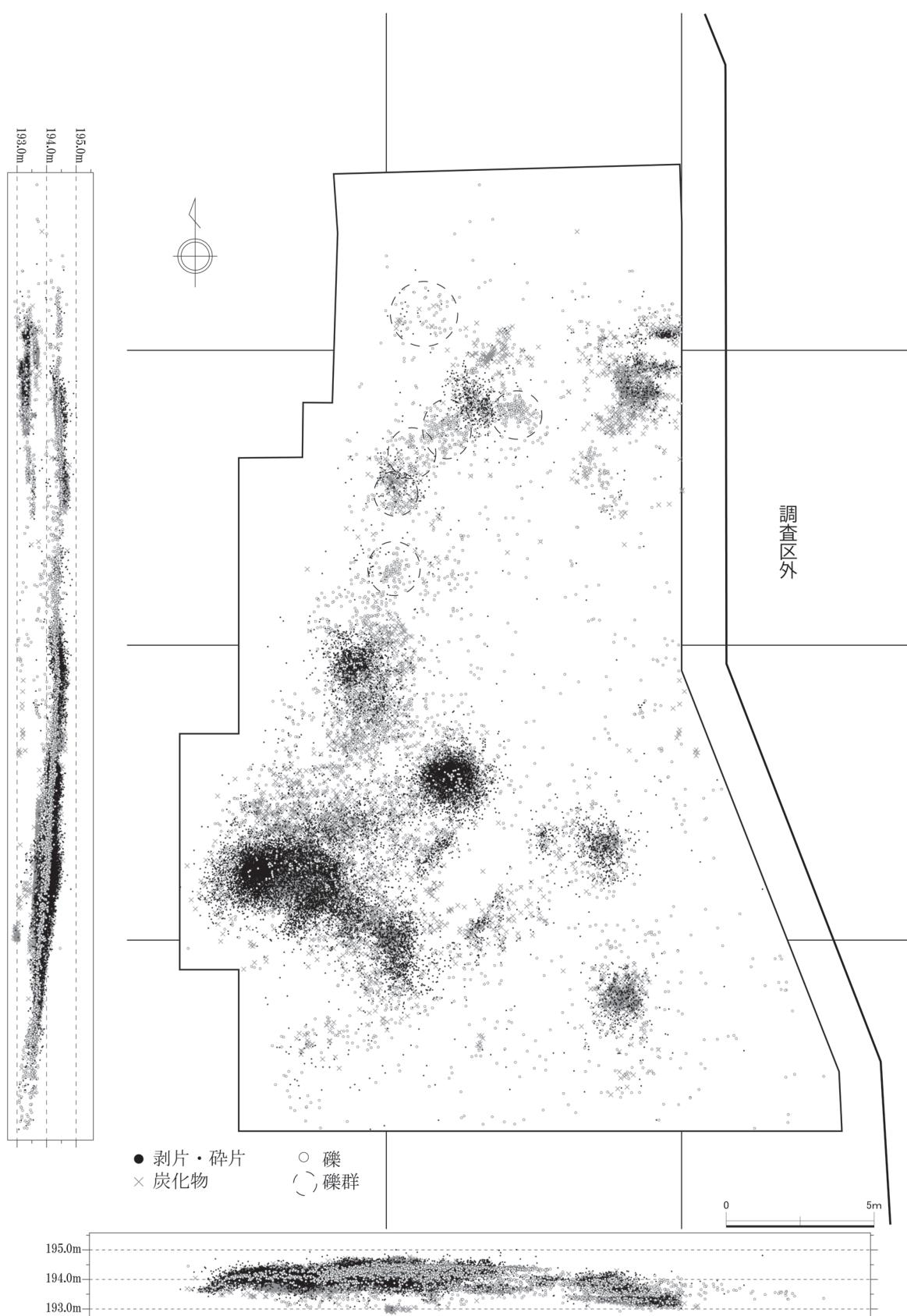
今回の調査ではL1H層下層～B1層上層とL2層下層～B2U層とで遺物群を確認した。L1H層下層～B1層上層の遺物群は槍先形尖頭器とその製作に伴う石器群であり、遺物点数は3万点に及ぶものとなった。槍先形尖頭器だけでも250点を数え、調査期間、面積を考慮すると南関東でも稀有な調査事例と言えよう。L2層下層～B2U層でもナイフ形石器や搔器、碎片や剥片が多量に出土した。これらの中にはB2L層上層からの出土と考えられるものも存在し、今後の精査が必要である。また、2つの遺物群の西側にはB0層、L2層、B2L層下層相当層で土石流痕跡が見られ、土砂災害被害などを受けにくい尾根上で石器を製作していたと考えられる。出土遺物量が膨大で、一部は調査中であることもあり、今後の精査が必要である。



第2図 蓑毛小林遺跡 旧石器時代調査坑配置状況



第3図 蓑毛小林遺跡III区東 調査坑37 L1H層下層～B1層上層出土遺物分布図（1/200）



第4図 蓑毛小林遺跡III区東 調査坑37 L2層下層～B2層出土遺物分布図 (1/200)



写真1 L1H層下層～B1層上層 遺物出土状況1



写真2 L1H層下層～B1層上層 遺物出土状況2



写真3 L1H層下層～B1層上層 剥片出土状況



写真4 L1H層下層～B1層上層 槍先形尖頭器出土状況1



写真5 L1H層下層～B1層上層 槍先形尖頭器出土状況2

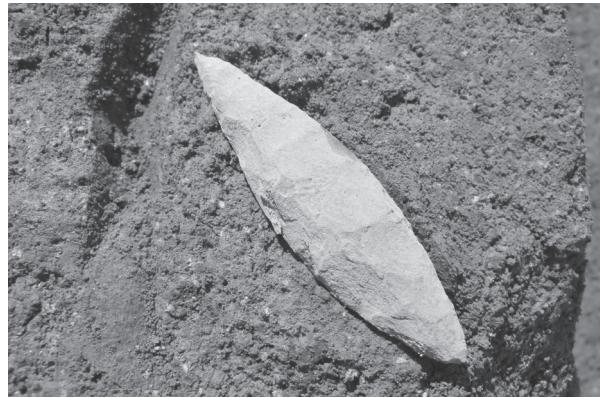


写真6 L1H層下層～B1層上層 槍先形尖頭器出土状況3



写真7 L2層下層～B2U層 遺物出土状況



写真8 L2層下層～B2U層 ナイフ形石器出土状況

小田原市 天神山遺跡第Ⅲ地点

— 繩文時代中期～後期の集落と墓域の調査 —

戸田 哲也

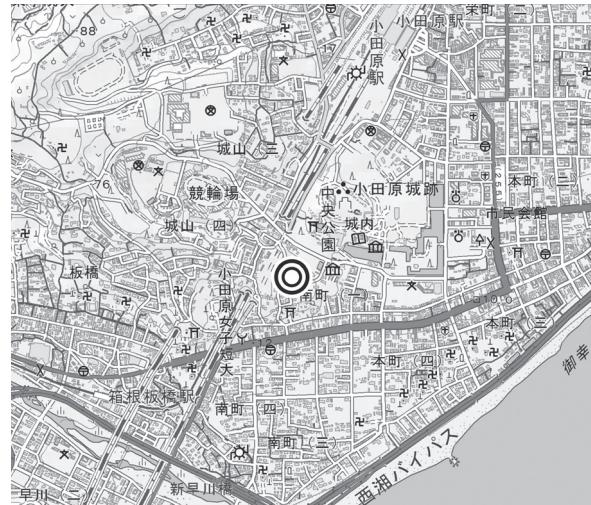
所在地 小田原市南町一丁目 861 番地 39 他
 調査機関 株式会社玉川文化財研究所
 調査担当 佐々木竜郎
 調査原因 学校法人国際医療福祉大学城内校舎建設工事に伴う事前調査
 調査期間 2014年10月14日～2015年3月31日
 調査面積 約 1,261 m²

1. 遺跡の立地

天神山遺跡は、JR小田原駅から南西約1kmに位置する。遺跡の範囲は小田原市No.26遺跡、同No.62遺跡、同No.101遺跡にまたがり、今回調査した第Ⅲ地点はNo.26遺跡に含まれる。第Ⅲ地点は旧小田原城内高校の敷地内に位置し、地形としては箱根外輪山から派生した丘陵の末端部である天神山丘陵の緩やかな南東側斜面地に該当するが、現状は旧城内高校建設時の造成工事により平坦地となっていた。現地表面の標高は30m前後を測る。

天神山遺跡では、今回の調査も含め過去に4回の調査が行われている。主な遺構として、旧城内高校の擁壁補強部分を調査した第Ⅰ地点で縄文時代中期の石臼炉、天神山丘陵の南側斜面を調査した第Ⅳ地点で縄文時代後期の敷石住居址2軒を含む住居址3軒が検出されている。

本遺跡周辺では、天神山丘陵頂部に位置する天神山台遺跡において、縄文時代中期の住居址が検出されている。また、天神山丘陵の南斜面から低地部に立地する御組長屋遺跡において、後期中葉の竪穴住居址、柄鏡形（敷石）住居址、石垣状積石などが検出されている。



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、学校法人国際医療福祉大学城内校舎建設工事に伴い、平成21年に神奈川県教育委員会により行われた試掘調査の成果を受けて実施したものである。

平成26年9月16日から調査にかかる準備を開始した。発掘調査は同10月14日に着手し、山留めのH鋼を打設し矢板を設置しながら掘り下げを行った。調査区の北西側では旧耕作土以下の土層が良好に残存していたことから、調査は中・近世の遺構から開始した。遺構の精査と包含層掘削を行って、ローム層上面まで調査を実施し、平成27年3月31日に全ての調査を終了した。

出土遺物は遺物収納箱で約450箱に及んだ。調査面積は約1,261 m²である。

3. 調査の概要

今回の調査では、中・近世から縄文時代にわたる各時代の遺構・遺物が発見された。以下、主体となる縄文時代を中心に概要を述べたい。

(1) 中・近世以降

土坑14基、溝状遺構3条、段切り状遺構1カ所、ピット16基を検出した。土坑・溝状遺構は近世、段切り状遺構は中世に遡る可能性が考えられる。

(2) 奈良・平安時代

竪穴住居址4軒、竪穴状遺構1基、掘立柱建物址5棟、土坑4基、溝状遺構1条、ピット70基を検出し、竪穴住居址2軒はカマドのみであった。概ね奈良時代後半から平安時代の範疇に属する。

(3) 古墳時代

円形周溝状の遺構を3基検出し、円墳の周溝と判断した。1・2号墳が古墳時代後期、3号墳が同中期後半もしくは後期初頭頃と考えられる。

(4) 弥生時代

竪穴住居址7軒、土坑2基を検出した。弥生時代後期に属すると考えられる。

(5) 繩文時代

遺構と遺物の時期は中期と後期が主体となり、合わせて土器約260箱、石器約180箱が出土した。

中期は竪穴住居址1軒、土坑墓41基、埋設土器4基、集石址3基、ピット（後期を含め162基）を検出した。

竪穴住居址は周溝やピットが重複していること、また炉址を3基、埋甕を4基伴うことから、拡張あるいは建て替えが行われたと推測される。時期は中期後半の曾利Ⅱ式期と考えられる。

土坑墓は41基を確認した。このうち16基の土坑中から、副葬品と言える完形土器あるいは打ち欠いて整形した小形土器、石匙、石製装身具が出土した。うち1基（J9号土坑墓）からは2点の石匙と共に人骨頭部が出土しており、中期の明確な土坑墓域から副葬品と人骨が同時に出土した調査例として、極めて貴重な例となるものである。また、土坑墓は形態、規模、覆土の特徴が類似しており、これと共に通する特徴をもつ副葬品のない土坑25基も土坑墓と推定した。これらは調査区の西側にまとまって分布している。時期はいずれ

も中期中葉勝坂式期と考えられる。

埋設土器は土器が正位のもの2基、逆位のもの2基が検出された。時期は曾利Ⅰ～Ⅱ式期である。

後期は竪穴住居址1軒、敷石住居址2軒、配石遺構3基、礫石器集合遺構6基、焼土址81基、埋設土器3基、土坑13基、ピット（中期を含め162基）を検出した。また、遺物量が抜きん出ており、堀之内1式から加曾利B式にかけての大量の大形土器破片や礫石器のほか、獸骨の加工品を含む焼骨片が約3箱出土した。特に加曾利B2式土器は西湘地域でも質・量ともに特筆され、神奈川県下でも本時期における主要な遺跡の一つとなる。

竪穴住居址は約半分が調査区外となるが、壁柱穴をもち、後期前葉堀之内1式期に比定される。

敷石住居址は敷石の遺存状況が部分的であるため、J1号は抜き取られた可能性があり、J2号は地割れで搅乱されたと考えられる。時期はJ1号が堀之内1式期、J2号が後期前半である。

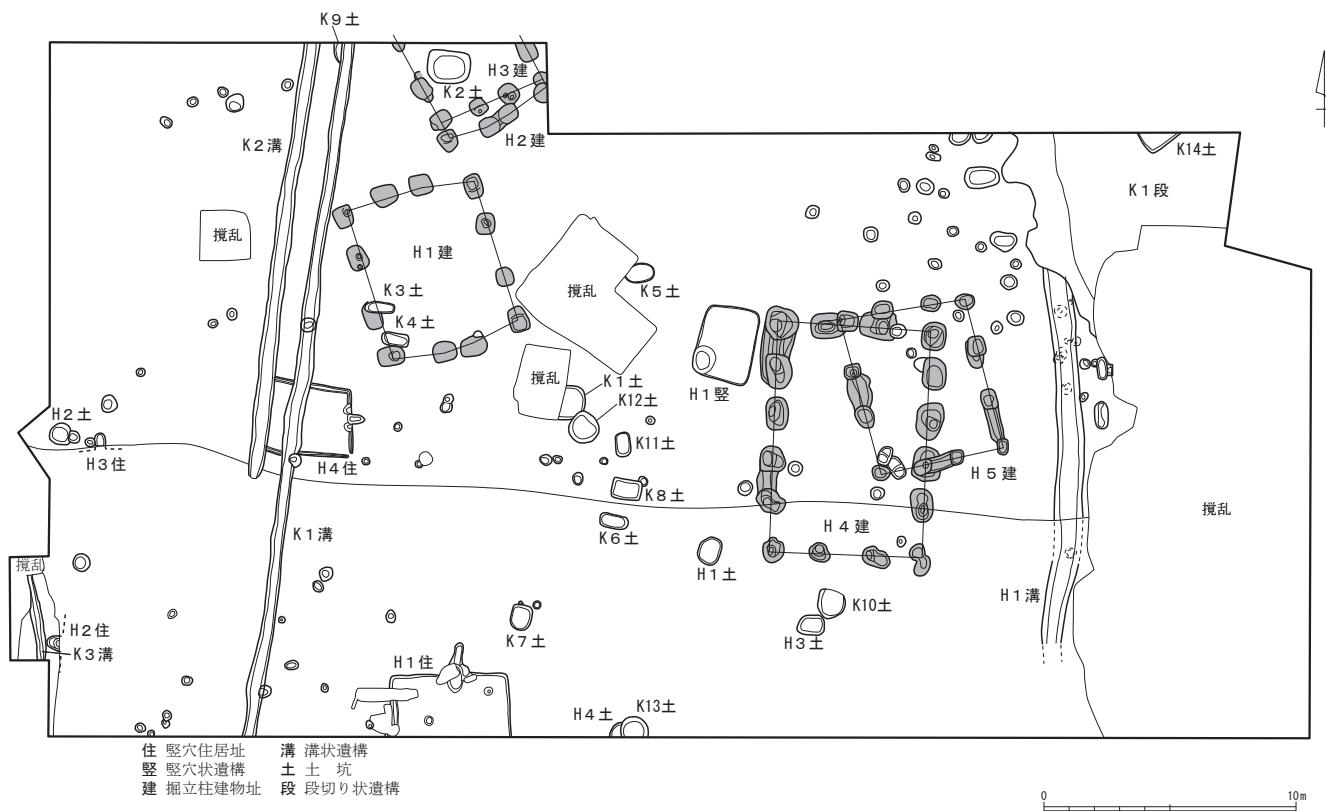
礫石器集合遺構は、礫石器を中心とした石器群がまとまって検出された遺構をこのように呼んだもので、直線状に並ぶもの、大きく広がりをもつもの、左右対称のものなどバラエティがあった。時期は堀之内式から加曾利B式期である。

埋設土器は、正位のもの、逆位のもの、横位のものが1基ずつ検出され、時期は称名寺式から堀之内1式にかけてのものである。

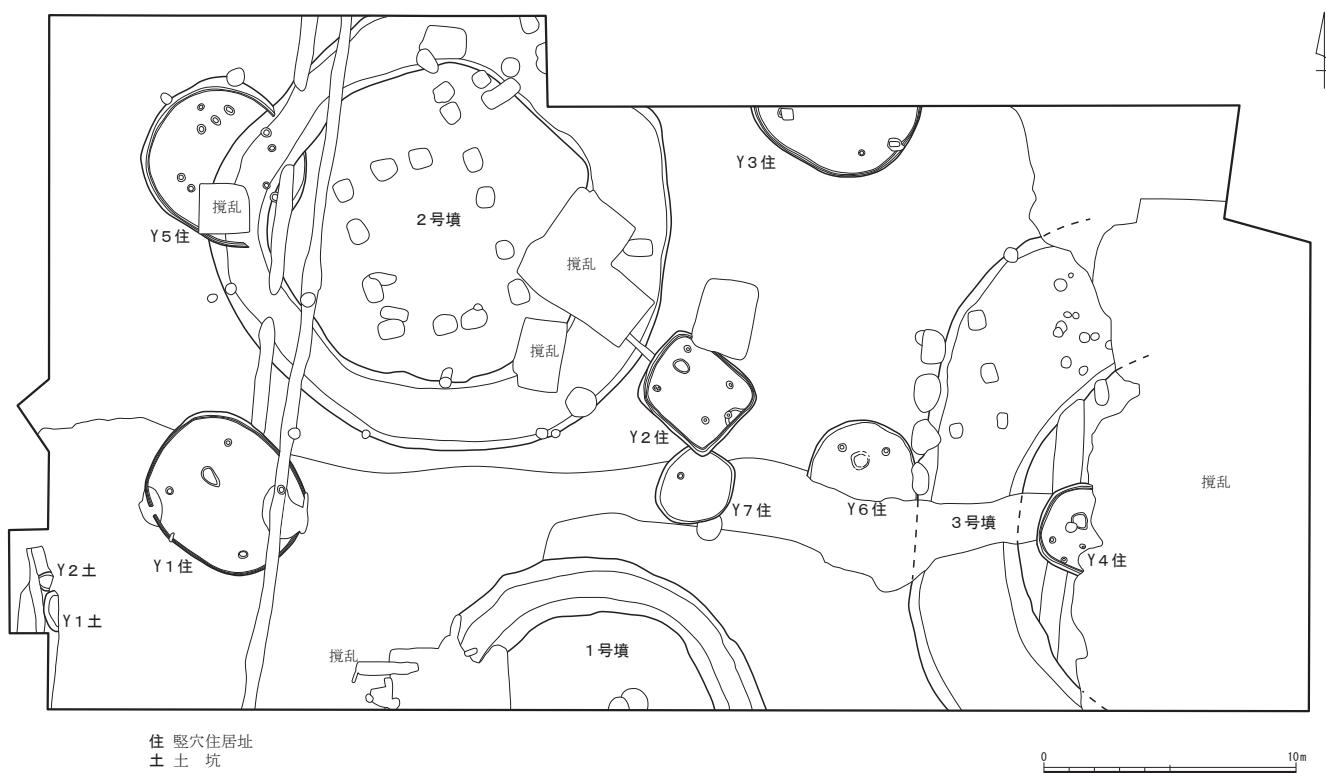
4.まとめ

今回調査した天神山遺跡第Ⅲ地点は、時代の幅が広く内容が多岐にわたるが、特に縄文時代において、特筆すべき成果が多数あった。

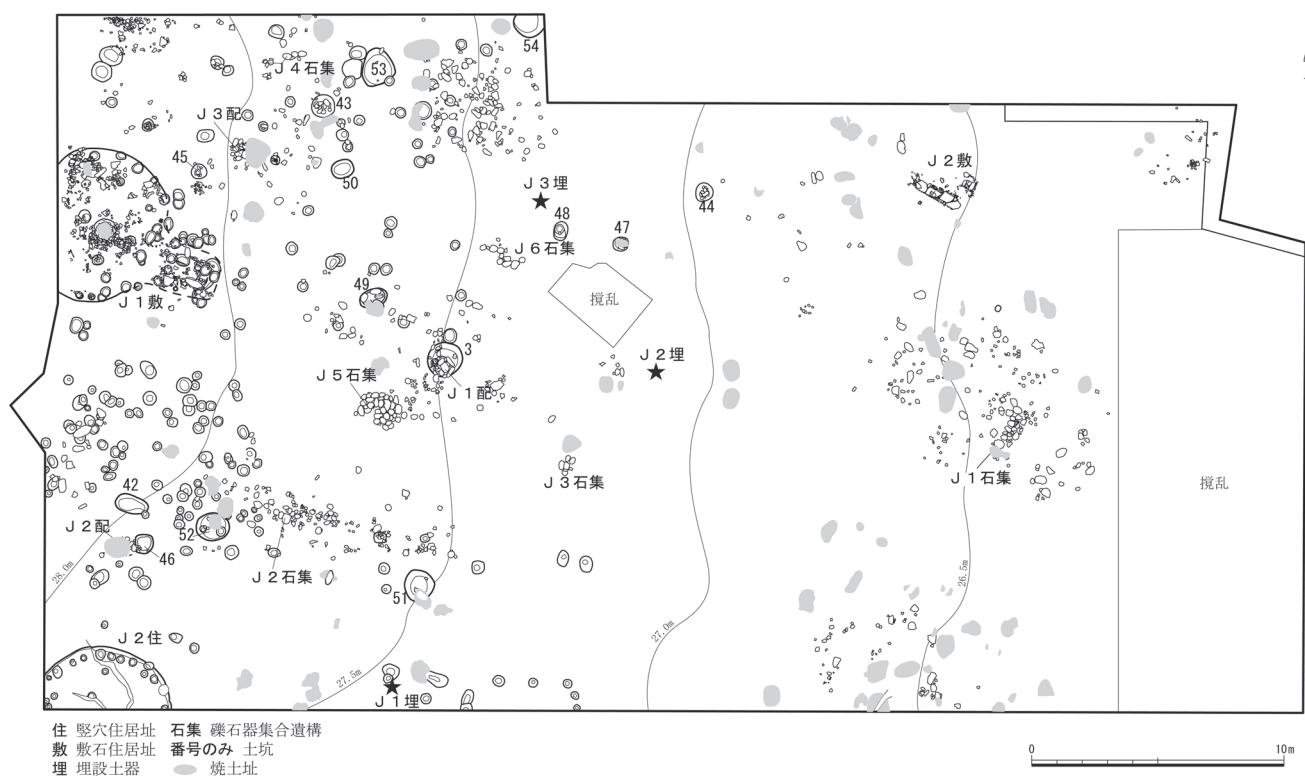
また、丘陵頂部の天神山台遺跡（中期）および南側斜面に位置する天神山遺跡第Ⅳ地点、御組長屋遺跡（いずれも後期）との同時性、関連性が認められ、天神山丘陵全体に集落が展開していた可能性が考えられよう。



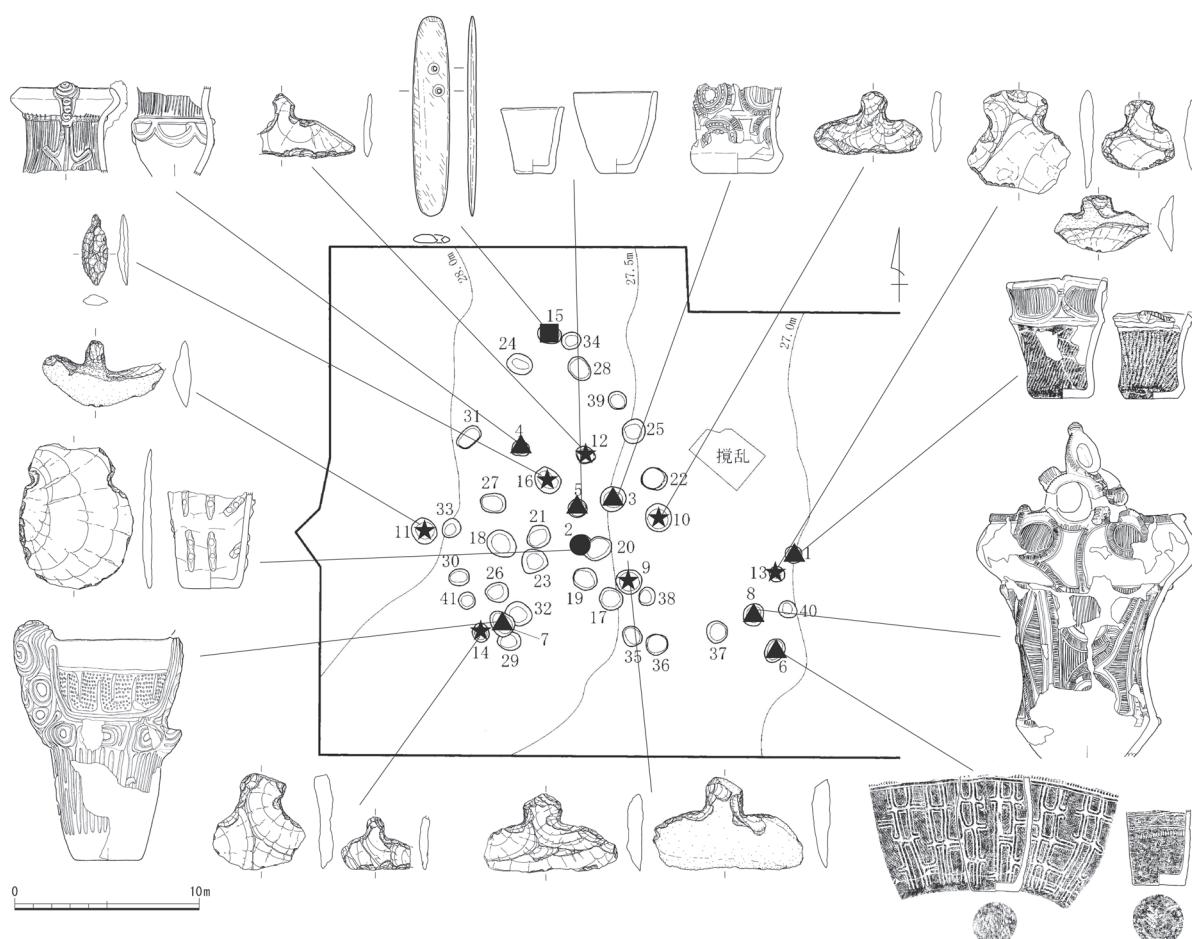
第2図 奈良・平安時代～中・近世遺構全体図 (S=1/300)



第3図 弥生時代～古墳時代遺構全体図 (S=1/300)



第4図 縄文時代後期遺構全体図 (S=1/300)



第5図 縄文時代中期遺物出土土坑墓位置図 (S=1/400)



写真1 調査区全景（背後に相模湾および真鶴半島をのぞむ）

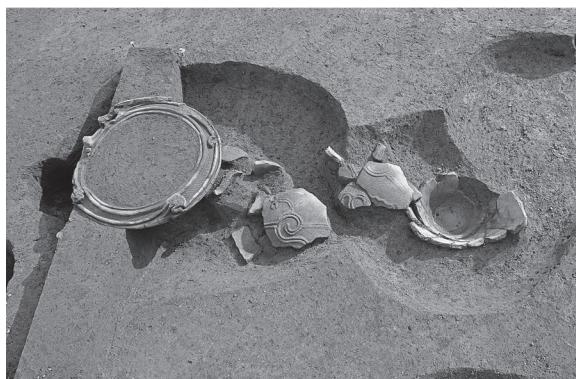


写真2 J5号埋設土器（北から）



写真3 J6号土坑墓（北から）

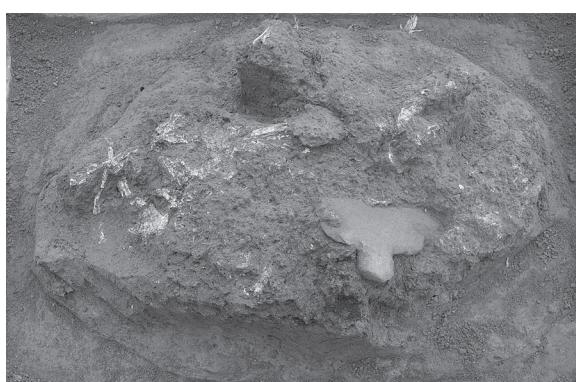


写真4 J9号土坑墓人骨出土状況（北東から）



写真5 繩文時代土坑墓出土遺物



写真6 J1号敷石住居址遺物出土状況（南東から）

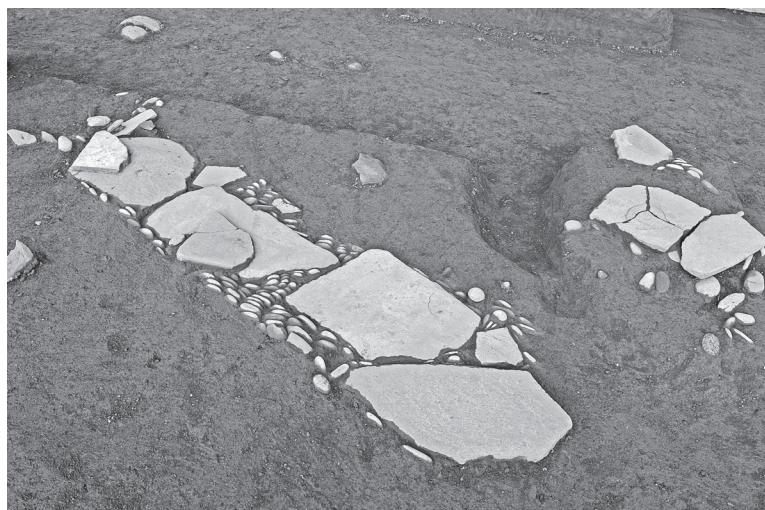


写真7 J2号敷石住居址敷石部分（南から）



写真8 J1号礫石器集合遺構（北から）

相模原市 国指定史跡 川尻石器時代遺跡

—縄文時代後・晩期集落の調査—

なかがわ まさと
中川 真人

所在地 相模原市緑区谷ヶ原二丁目 779 番他

調査機関 相模原市教育委員会

調査担当 中川真人・高野 舞

調査原因 保存目的の確認調査

調査期間 2015年6月1日～7月31日

調査面積 70 m²(調査区 No.39 : 20 m²、No.40 : 50 m²)

1. 遺跡の立地

川尻石器時代遺跡は石野瑛氏らによる昭和初期の調査によって縄文時代の敷石住居址が多数分布することが確認され、採集資料も含めて遺物も豊富なことから昭和6年に国史跡に指定された縄文集落址です。指定当時の川尻村から城山町を経て、現在の相模原市緑区谷ヶ原に所在しています。

本遺跡は相模川が関東山地の山間を東流して相模野台地の北縁に至り、流路を南へと変える地形的変換点に位置します（第1図）。北側丘陵部から流れる谷津川がV字谷を形成して相模川へと合流しており、本遺跡は谷津川右岸の河成段丘面に立地します。標高は142～145m前後を測り、谷津川とは比高15～20m、相模川からは70m以上を測ります。本遺跡直下には段丘礫層の露頭があり、硬い基盤の小仏層が不透水層となって谷部には湧泉が発達し、地元で「清水」と呼ばれる水場が今も残されています（第2図）。

遺跡が立地する段丘面は、北側丘陵部の裾から南へと傾斜していきます。史跡指定地内でも北東側が最も高く、調査区No.28とNo.30・31との間には1m程の小段丘崖状の段差が東西に走っています。史跡中央部では、調査区No.30付近



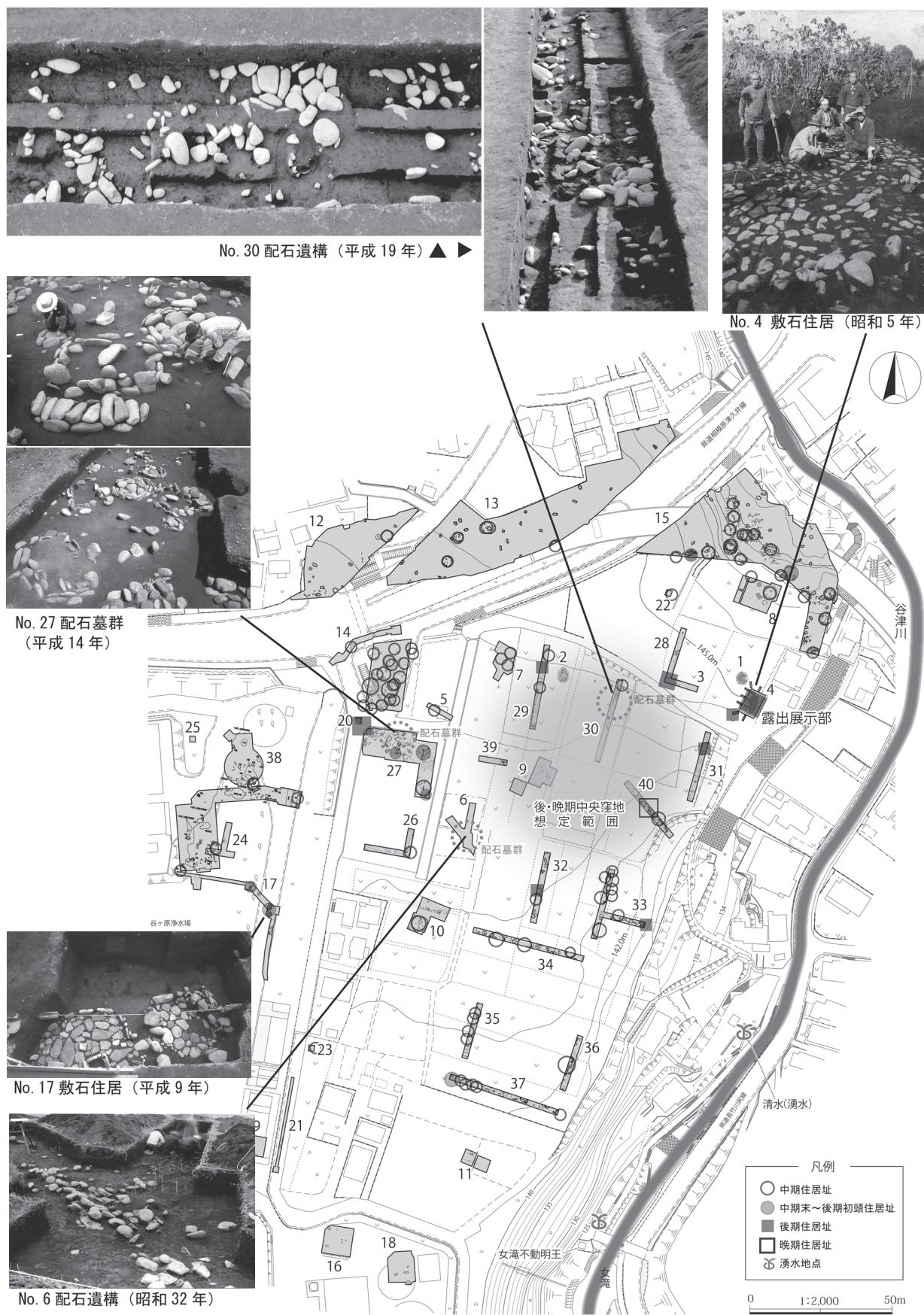
第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

から南東方向に開口するやや窪んだ微地形をなしています。

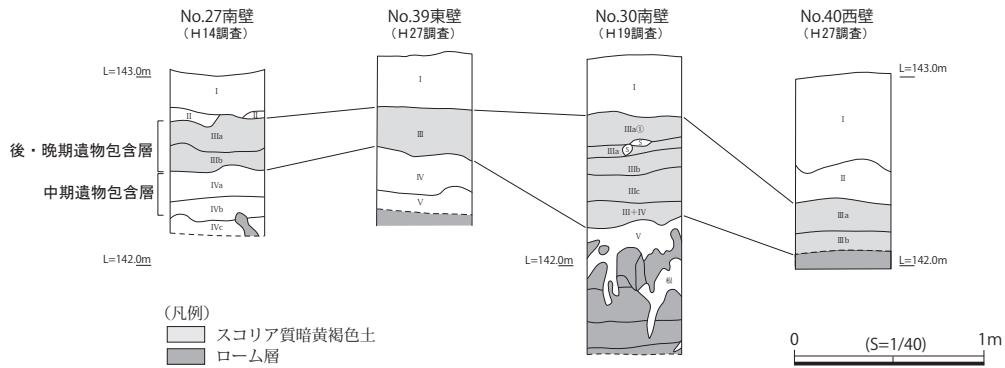
2. 調査に至る経緯と調査経過

川尻石器時代遺跡は約2.3haが史跡に指定されていますが、指定地内の調査は昭和期の部分的な調査しかなく、その実態は不明と言わざるを得ませんでした。そのため、史跡の内容を確認するためのトレンチ調査（調査区No.28～37の10本）を平成18～21年度に実施した結果、縄文時代中期～晩期における遺構・遺物の分布状況が確認され、平成26年度に報告書を刊行しています（中川ほか2015）。

この確認調査で特に注目されたのが、後・晩期の中央窪地の存在です。史跡中央部において後期から晩期にかけて連綿とつながる土器型式の遺物包含層の広がりが認められ、包含層中には焼獸骨の碎片が多く含まれていました。その下層にはあるべき中期の遺物包含層及び富士黒土層（IV層）の堆積が



第2図 川尻石器時代遺跡の発掘調査区配置図及び縄文時代遺構分布図



第3図 縄文時代後・晚期遺物包含層の土層対比図

認められずにローム層に達するとともに、調査区No.30を中心とした後・晚期遺物包含層であるスコリア質暗黄褐色土層（Ⅲ層）が厚く堆積する状況が確認されました（第3図）。このことから、大宮台地から下総台地の後・晚期集落に多く見られる中央窪地の形成が考えられたわけです。逆に課題として、後期後葉～晚期の居住施設が未検出であることや、中央窪地の形成要因やその範囲などが挙げられたため、平成27年度に追加の確認調査を実施することとしました。

昭和47年に青山学院大学が発掘調査した調査区No.9では、焼獸骨を多量に伴う後・晚期の遺物包含層が既に確認されていたため（三上ほか1988）、その西縁を探るために西側に調査区No.39を設定しました。また、石野瑛氏は「谷ヶ原石器時代住居跡群」として敷石住居址の発掘調査や採集遺物の資料調査を昭和6年に報告しています（石野1931）、その中で地番毎にボーリング探査で確認された「敷石」の箇所数を報告しています。史跡東側の779番の土地では2か所の「敷石」のほか、「土偶及び異形土器等多数出土」とわざわざ注記されているとともに、採集品（小池家所蔵資料）で掲載された晚期の土製耳飾などは、779番から採集されていたものです。そのため、東側段丘崖への中央窪地の広がりを確認するため、南東方向に窪地状の微地形をなす779番の土地に調査区No.40を設定し、縄文時代後・晚期を対象とした保存目的の確認調査を開始しました。

3. 調査の概要

調査区No.39

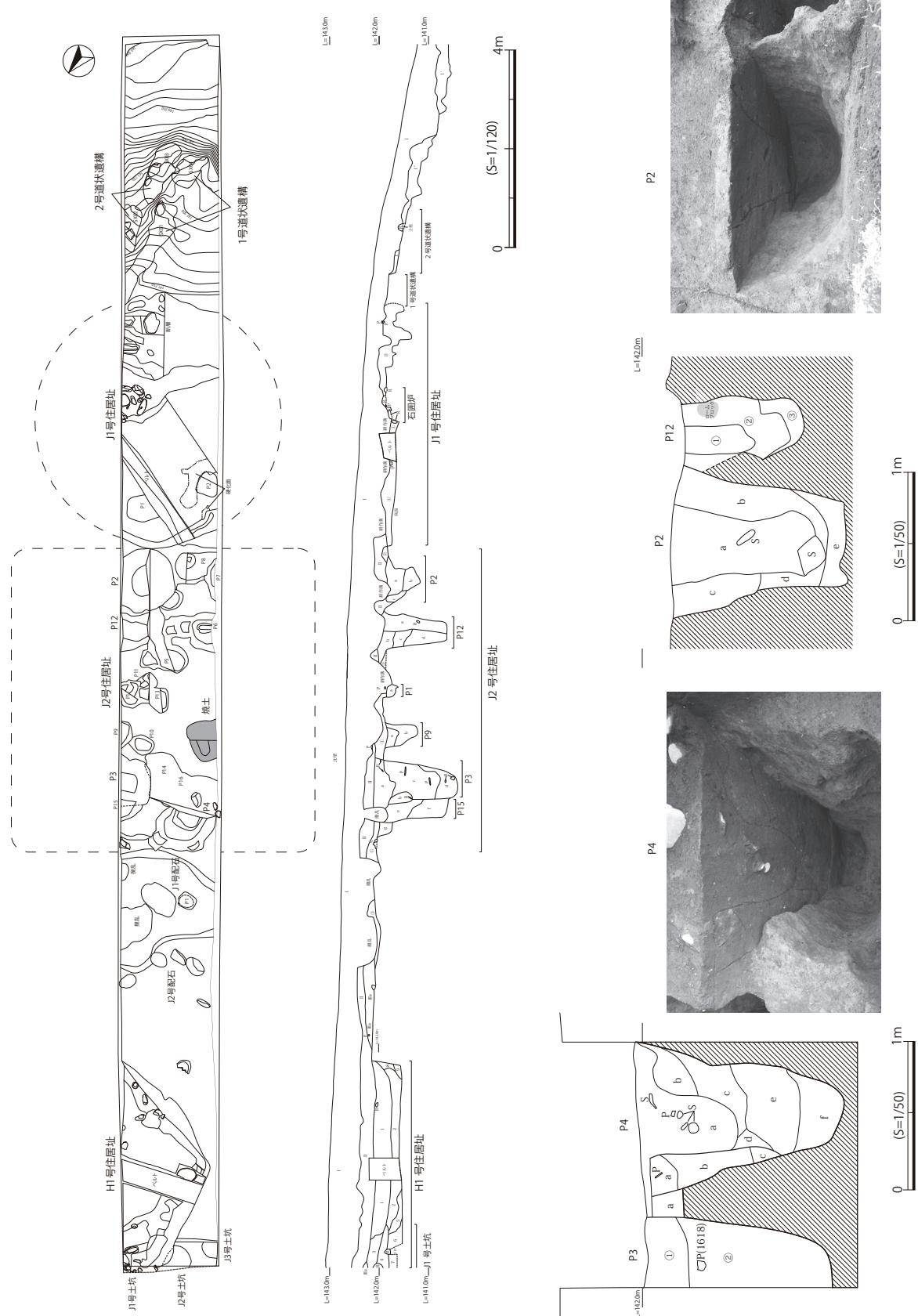
表土層直下にⅢ層以下の自然堆積層が確認され、Ⅲ層の遺物包含層からは後期前葉～中葉を主体としつつも晚期が僅かに含まれており、晚期終末の浮線網状文系土器も出土しました。ただし、焼獸骨は粉末化した1点のみの出土しかなく、土層の堆積や遺物包含層の内容からみても、後・晚期の中央窪地の外側に位置するものとみられます。

IV層上面で遺構の確認ができなかったため、トレーニング東端で一部深掘りを行い、土層の堆積と遺構の分布状況の確認を行いました。その結果、縄文時代の土坑4基、ピット1基が発見されました。土坑はいずれも橢円形を呈し、南北方向に長軸を向いています（写真1）。J1号土坑は擂鉢状の掘り込みで、覆土中から加曾利B2式の粗製深鉢が出土したため、後期中葉の土坑群とみられます。

調査区No.40

南東方向に設定したトレーニングの北西部は、表土層直下に古代相当のⅡ層が確認され、その下にⅢ層が堆積した後、現地表下95cmでローム層に至ります（第3図）。調査区No.30と同様に、Ⅲ層中には焼獸骨の碎片を包含し、縄文時代中期以前のIV層の堆積が認められないことから、人為的な削平を伴っていたと考えられます。トレーニング南東側では現地表下55cmでローム層の堆積となっており、急激な傾斜によって土層が流失しているとみられます。

調査区No.40からは縄文時代の住居址2軒と、配



第4図 調査区 No.40 遺構配置及び J 2号住居址柱穴断面図

石遺構2基、土坑3基のほか、平安時代の竪穴住居址1軒、近世以降の土坑1基、時期不明の道状遺構2条が確認されました（第4図）。注目すべき遺構としては、長径85cm×短径55cm×厚さ約50cmの巨礫を伴う配石遺構（写真3）とそれに隣接して分布する晩期のJ2号住居址（写真4・5）の発見です。

J2号住居址は、配石遺構とJ1号住居址（中期後葉）の間で検出されました。住居址の全容はよくわかりませんが、調査区内で確認した大きさは約6mとやや大型の住居です。調査区南壁沿いには地床炉とみられる焼土が確認され、住居範囲の西側に寄ります。住居址を最も特徴づけるのは大型の柱穴を伴い、これらが多数検出されて重複している点です。この場所で何度も建て替えを繰り返していたことが窺えます。2号柱穴（P2）は、径1.26m×深さ1.66mの大形の土坑のような柱穴で、土層の堆積状況は真ん中に柱痕がみられ、周りはロームブロック混じりの土で埋められていました（第4図）。4号柱穴（P4）は径0.95m×深さ1.77mを測り、2号柱穴と同様の大形の土坑状の柱穴です。

住居内の覆土にはロームブロックを混入し、焼獸骨の碎片を多量に伴います。ドットで点上げしたものだけでも220点を数えます。多くは1cmにも満たない碎片ですが、鑑定したところ、イノシシやシカとみられるものが含まれていました。出土遺物は晩期中葉の安行3c式～3d式を主体としており、住居址もその時期に帰属すると考えられます。特殊な遺物としては、晩期に特徴的な滑車形を含んだ土製耳飾や石刀、石冠が出土しています。

4.まとめ

人為的な削平行行為によって中央窪地が形成された後・晩期集落である横浜市華蔵台遺跡や千葉県流山市三輪野山貝塚では、窪地内に焼獸骨の分布が確認されています。川尻石器時代遺跡において

時期		年代 (calBP)	川尻縄文集落
中期	前葉	5,470～5,380年前	環状集落
	中葉	5,380～4,900年前	
	後葉	4,900～4,520年前	
	末葉	4,520～4,420年前	
後期	初頭	4,420～4,250年前	敷石住居
	前葉	4,240～3,820年前	
	中葉	3,820～3,470年前	
晩期	後葉	3,470～3,220年前	配石集落
	前葉	3,220～2,950年前	
	中葉	2,950～2,730年前	
	終末	2,730～2,350年前	中央窪地型集落

※年代は小林謙一 2008「縄文時代の暦年代」参照

第5図 川尻石器時代遺跡の縄文集落変遷

も、土層の削平が認められずに標準的な堆積状況であった西側の調査区No.39では、焼獸骨も分布しませんでした。一方、東側の調査区No.40では焼獸骨を含有する後・晩期遺物包含層直下でローム層に至る状況から、人為的な削平を伴う窪地の形成が想定されます。今回の調査によって、中央窪地の広がりを確認することができ、その大きさは径60m程とみられます。

また、今回の調査で大きな成果として挙げられるのは、後・晩期の中央窪地の南東縁において、配石遺構とともに晩期中葉の住居址が検出されたことです。晩期の住居址の発見は一時的な断絶はあったにせよ、中期から始まる長期的な拠点的集落の変遷において、後・晩期における中央窪地型集落として新たに位置づけることができます（第5図）。学術的にも重要な縄文集落であることを再認識させられるとともに、昭和初期の調査によって史跡として面的な保護がされた意義を、きちんと評価していくなければなりません。

【参考文献】

石野 瑛 1931「相模國谷ヶ原石器時代住居跡群」

『史跡名勝天然紀念物』6

中川真人ほか 2015『国指定史跡川尻石器時代遺跡Ⅱ』

相模原市教育委員会

三上次男ほか 1988「史跡「川尻石器時代遺跡」の調査報告」

『青山考古』6



写真1 調査区 No.39 土坑群（後期中葉）



写真2 調査区 No.40 トレンチ全景



写真3 調査区 No.40 J 1・2号配石遺構（晩期）

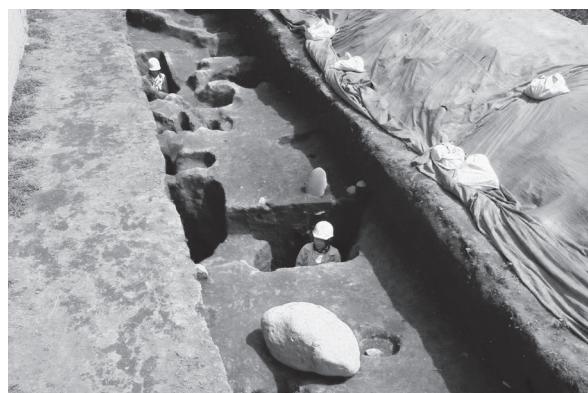


写真4 調査区 No.40 J 2号住居址（後期中葉）



写真5 調査区 No.40 J 2号住居址柱穴群（後期中葉）

平塚市 竹之内遺跡第5地点・北金目塚越遺跡第18地点
—初の勾玉出土—

やまうち あつし いちかわ やすひろ
山内 淳司・市川 康弘

所在 地	平塚市北金目三丁目 11 番地 平塚市真田二丁目 1 番地 2・9
調査機関	大成エンジニアリング株式会社
調査担当	山内淳司・小宮山友康
調査原因	宅地造成
調査期間	2015 年 8 月 19 日～9 月 25 日
調査面積	竹之内 : 264 m ² 、塚越 : 173 m ²

1. 遺跡の立地

本跡が立地する北金目台地は、市北西部を流れる金目川と大根川に挟まれた半島状の台地で、西から東にかけて緩やかに傾斜する。台地の標高は20.0～50.0 m程で、沖積低地との比高差は3.0m～10.0 mを測る。台地の北～東縁辺部には多く支谷が形成され、台地を樹枝状に開析している。このような谷地形により、台地上の平坦部は細いやせ尾根状を呈する。で周辺は田畠や河川などの自然環境に富み、湧水が絶えない状況である。

両遺跡が立地する台地上には複数の遺跡が纏まっており、寺尾遺跡（No48）、真田城跡（No50）、北金目塚越遺跡（No237）、塚越古墳（No8）、大久保遺跡（No233）、竹之内遺跡（No235）、北金目古墳（No44）、王子ノ台遺跡（No236）、入谷戸遺跡（No238）の9遺跡を併せて、真田・北金目遺跡群として呼称されている。同遺跡群は平成7年から土地区画事業整備に伴って、継続的に大規模な発掘調査が実施されてきており、旧石器時代から近世に至るまで連绵と続く遺跡群本跡周辺の遺跡分布は極めて濃密で、平成7年9月1日から開始された「平塚市都市計画事業真田・



第1図 遺跡位置図

「北金目特定土地区画整理事業」による大規模調査によって多くの知見が得られている。

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、宅地造成工事に伴い、竹之内遺跡と北金目塚越遺跡が事業計画地内に含まれております。竹之内遺跡は試掘調査が2015年6月19日に平塚市教育委員会によって実施され、その結果を受け、北金目塚越遺跡は隣接地の調査成果を受けて、本調査を実施したものである。

調査は竹之内遺跡が2015年8月19日から、北金目塚越遺跡が8月25日から開始した。調査の結果、竹之内遺跡からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、小穴、中・近世の溝状遺構、道路状遺構、土坑が確認された。調査面積は264m²である。北金目塚越遺跡からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、土坑、

小穴、中・近世の小穴が確認された。調査面積は173 m²である。

主な出土遺物は、両遺跡共に弥生時代から古墳時代の土器（壺、甕、高杯、鉢）が大半を占めており、これまで確認されている成果に加えて、今回は勾玉の出土が際立つ。

3. 調査の概要

竹之内遺跡第5地点

(1) 弥生時代後期～古墳時代前期

主体を占めるのは弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡（平面：橢円形ないし隅丸方形）であり、総数11軒が部分的に切り合いながら分布し、それらをさらに掘り込むように古墳時代前期の竪穴住居跡2軒（平面：方形）が東西に切り合いを持たず、概ね同規模で構築されている状況が確認された。その内1軒からは竹之内遺跡内では初となる勾玉が底面付近から出土した。出土遺物から古墳時代前期の住居跡（SI10）と考えられる。また、住居跡を掘り込む掘立柱建物跡1棟（SB01）は、北側柱列に所謂、溝もちの状況を呈していた。この他に住居跡に切られる土坑が2基、小穴が34本確認されています。

(2) 中・近世

中世と考えられる溝状遺構1条、近世以降と考えられる道路状遺構1条と土坑1基である。溝状遺構（SD02）は本調査区周囲に広がりが確認される赤褐色の硬質の土層（以後、硬化層）を切り、その以北からは硬化層が検出されなかった。硬化層の形成時期や過程を考える上でSD02との切り合いとその位置関係は非常に興味深い。

北金目塚越遺跡第18地点

主体を占めるのは弥生時代後期～古墳時代前期の遺構で、該期の遺構として、竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構5基、土坑4基、小穴15本が確認されました。東西幅約6.3m、南北長約27.5mの細長い調査区内に、竪穴住居

跡及び竪穴状遺構が水平方向並びに垂直方向に著しく重複しており、個々の竪穴住居跡の残存状況は決して良好でなかったが、SI14は長軸約9.3m、短軸約8.5mと、本遺跡群で確認された弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡の中で最大級の規模を誇り、床面付近から市内では初の出土例となる翡翠製勾玉2点、碧玉製管玉2点が出土した。またSI13の床面上からはほぼ完形に復元される土器6個体が意図的に遺棄されたかのような状態で出土した。

4.まとめ

竹之内遺跡第5地点

SI10より出土した勾玉は、蛇紋岩製で底面付近から出土した。表面は良く研磨され、整形も比較的丁寧である。製作年代は形状と技法の特徴から古墳時代前期後半から中期前半と推定され、出土土器とほぼ齟齬はみられない。周囲の住居跡は既調査地点で確認されている住居跡の中では僅かながら規模は大きく、本住居跡の位置付けが今後の課題となろう。

北金目塚越遺跡第18地点

SI14から出土した勾玉・管玉は計4点とやや多い。特に勾玉は翡翠製で、時期は前後するが本遺跡群が立地する金目川水系の首長墓と位置付けられる塚越古墳の副葬品からも認められておらず、当時としても貴重と考えられる。本集落の居住者集団と方形周溝墓の被葬者集団の関係性を物語る上で貴重な資料と言える。また、SI14出土の勾玉・管玉の製作年代は形状と技法の特徴から弥生時代中期後半と推定され、出土土器に比してやや古く、これらの玉類は、本調査区の北東方向に展開していた弥生時代中期の集落から移り住む際に伝世した品である可能性も考えられる。



第2図 竹之内遺跡 各時代遺構全体図 (S=1/300)



写真1 竹之内遺跡 調査区全景

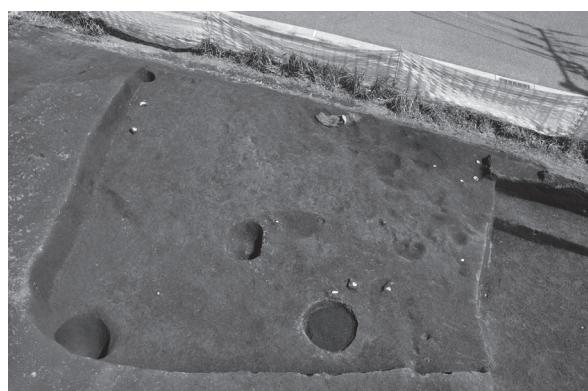


写真2 竹之内遺跡 壇穴住居跡 (SI10)



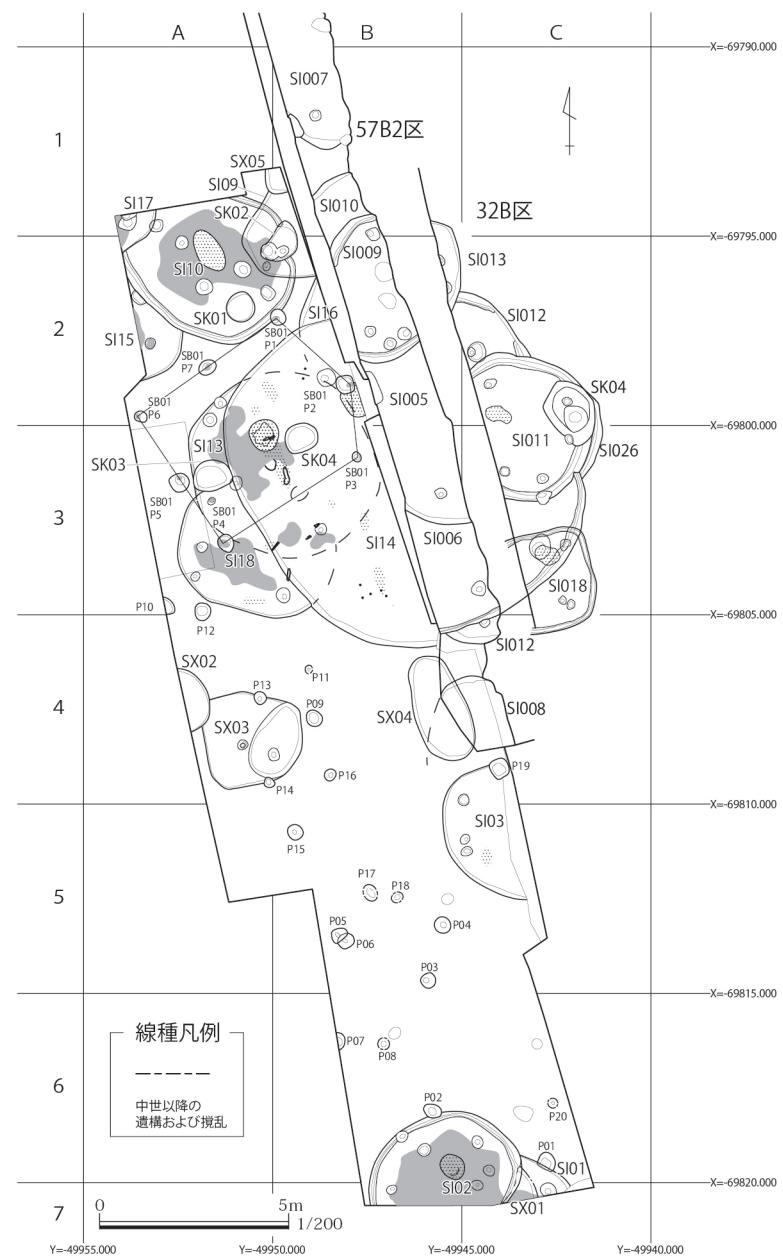
写真3 竹之内遺跡 SI10 勾玉出土状況



写真4 竹之内遺跡 主な出土土器



写真5 竹之内遺跡 硬化層北部 SD02 検出状況



第3図 北金目塚越遺跡 遺構全体図 (S=1/200)



写真6 北金目塚越遺跡 調査区全景



写真7 北金目塚越遺跡 積穴住居跡 (SI14)



写真8 北金目塚越遺跡 SI14 出土勾玉・管玉



写真9 北金目塚越遺跡 積穴住居跡 (SI13) 遺物出土状況



写真10 北金目塚越遺跡 SI13 出土遺物

横浜市 下飯田林 遺跡第2地点
— 弥生時代後期後半の集落跡 —

にし の よしのり
西野 吉論

所在地 横浜市泉区下飯田町 859 番7外 23 筆
調査機関 株式会社玉川文化財研究所
調査担当 小林晴生
調査原因 泉ゆめが丘地区土地区画整理事業埋蔵文化財本調査業務
調査期間 2016年1月4日～2016年3月25日
調査面積 地区西 321.03 m²
地区南 2065.60 m²
合 計 2386.63 m²



第1図 遺跡位置図 (1/10,000)

1. 遺跡の立地

調査地点は2地点に分かれており、地区西が相鉄線ゆめが丘駅の北西約150m、地区南が横浜市営地下鉄下飯田駅の南西約50mに位置している。地勢的には、横浜市域南西端の多摩丘陵から西側に連なる中位段丘面に立地し、西に境川、東にはその支流である和泉川がそれぞれ南流する。遺跡の標高は約36mを測り、沖積地との比高差は約15～20mを測る。

本遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地、横浜市泉区No.65遺跡（神奈川県No.40遺跡）の範囲に含まれている。同遺跡内での本格調査には、今回調査した地区南に隣接する横浜市営地下鉄敷設に伴って行われた下飯田林遺跡（第1地点）がある。弥生時代後期後半の竪穴住居址21軒、土坑1基、ピット群、古代～中世の円形土坑1基が発見されており、地区南で調査された弥生時代の住居群と同一集落と考えられる。そのほか周辺の遺跡は、境川左岸に中ノ宮遺跡、草木遺跡、泉警察署遺跡が知られている。

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、泉ゆめが丘地区土地区画整理事業に伴う本格調査である。

地区西

地区西の調査は平成28年1月4日から開始した。Ⅲa層上面で古代の溝状遺構1条（1号溝）、中世～近世の溝状遺構1条（2号溝）、中世・近世のピット88基を検出し、中テンバコ1箱分の遺物が出土した。また、1号溝状遺構を完掘したところ、縄文時代の陥し穴を1基検出した。なお、2号溝状遺構は事業区域内で試掘したところ、北側に延長することが確認できた。

地区南

地区南の調査は、平成28年1月9日から開始した。Ⅲa層上面で弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居址23軒、土坑3基、ピット7基、近世以降の溝状遺構2条を検出し、中テンバコ11箱分の遺物が出土した。

なお、整理作業および報告書作成業務は次年度

以降の現地調査業務がすべて完了した後に一括して行われる予定である。

3. 調査の概要

地区西

調査区は、西側を南流する境川に向かう緩斜面に近い台地縁辺部に立地する。地区西では、縄文時代の陥し穴1基、古代の溝状遺構1条と中世～近世にかけての溝状遺構1条、および中世以降のピット群を検出した。

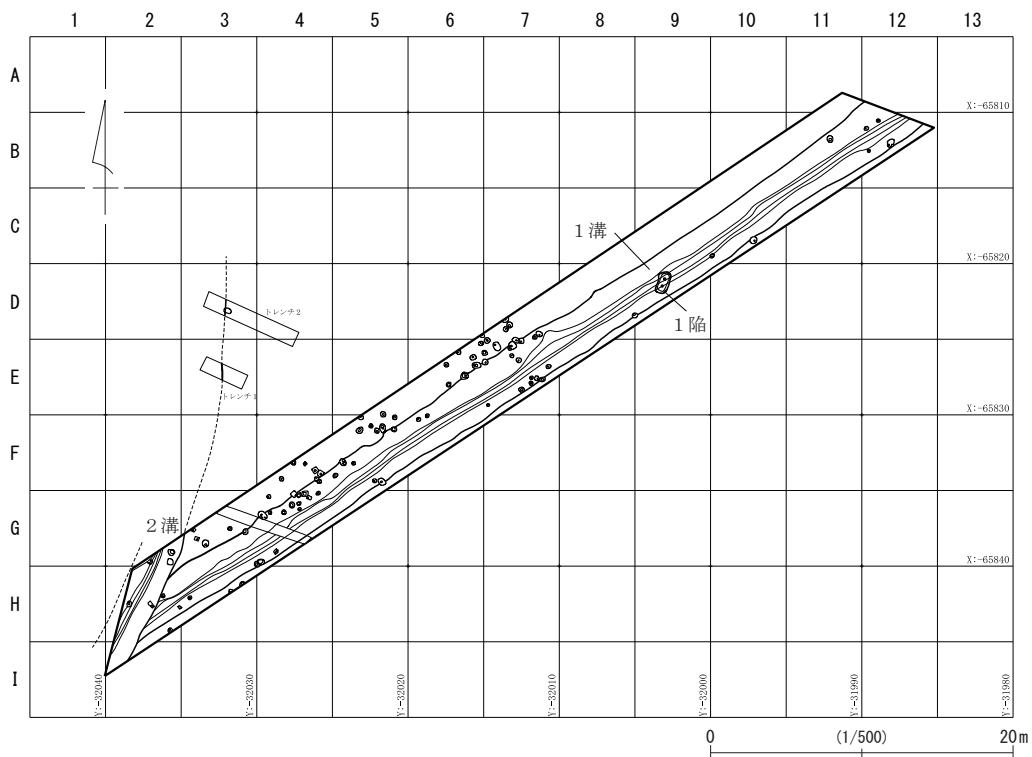
1号陥し穴はD-9グリッドに位置している。底部に2基の小ピットをもつ。

1号溝状遺構は調査区中央に位置し、北東～南西方向に延び、両方向とも調査区外に続く。北西側壁が南西壁側に比べやや緩やかに立ち上がる。断面形は薬研状を呈するが、底面の幅はやや広く、部分的に段差をもち、掘り直しが行われていると考えられる。覆土上層から土師器壺、底面付近か



写真1 地区西1号溝状遺構全景（北東から）

ら須恵器甕が出土した。2号溝状遺構は調査区南西端で検出した。北北東～南南西方向に延び、調査区外に続く。調査区外での試掘調査の結果、北



第2図 下飯田林遺跡第2地点 地区西遺構配置図 (1/500)

方向に向きを変えながら続くことが確認できた。断面形は薬研状を呈している。2号溝状遺構は遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、1号溝状遺構を切ることや覆土の観察から中世～近世にかけての所産と考えられる。

ピットは88基あり大きく3群に分けることができるが、いずれも建物になるような配置はみられない。覆土の観察から、中世・近世以降に属するものと考えられる。

地区南

調査区は境川左岸の台地縁辺部に立地する。東側は小支谷に向かう斜面となり、西側は境川との間に南北に延びる台地平坦部となる。地区南では、弥生時代後期後半を主体とする竪穴住居址23軒、土坑3基、ピット7基、近世以降の溝状遺構2条を検出した。

各遺構の概略について、まず住居址の様相を述べていく。平面形をみてみると、胴張隅丸方形が5軒、隅丸方形が16軒、方形が3軒である。主軸長は、胴張隅丸方形の住居址は21号住を除き4m台で、隅丸方形の住居址は3.5m～5.4mとバリエーションに富む。方形の住居址は3.4m～4.4mでやや小さいものが多い。

検出面から床面までの深さは、1号住が20cm程と浅いそのほかは相対的に深く、40～50cmの範囲に6軒、50～65cmの範囲に10軒、70～80cmの範囲に7軒である。主軸長が5mを超える6・7・21号住は60cm以上の深さで、4m前半までの住居は60cm未満が多い。

床面は貼り床をもつものがほとんどで、掘り方がローム層まで達している住居址では、黒褐

色土とローム土を混ぜて作られている。主柱穴を床面で4本確認できたのは4軒、掘り方で確認できたのは1軒である。

炉址は2号住と調査区内で確認できなかった住居を除き、全て地床炉で奥壁側に偏在する。火床面に用いられている石英などの鉱物を含有する黄白色砂質シルトと同様の土が、6・7・10・14・15・19・21号住の北東側コーナー付近の床面上に堆積しており、住居内に保管していたと考えられる。

貯蔵穴は6・7・9・14・16・17b・18・19・21号住にあり、出入口ピットに隣接して位置している。6・14号住以外の7軒には、貯蔵穴の周囲にローム土を固めて作られた弧状の周堤を持つ。21号住は貯蔵穴を3基もち、その一つは床面とほぼ同一レベルの北東壁に横穴を穿ち作られている。

出入口部は1・12・14・18号住と20号住の新段階を除くと全て南東方向である。12・14・18・20号住は出入口部が北東方向にある。そのほか、8・10号住は横長タイプの住居で、15・16・17a・21号住は焼失家屋である。また、

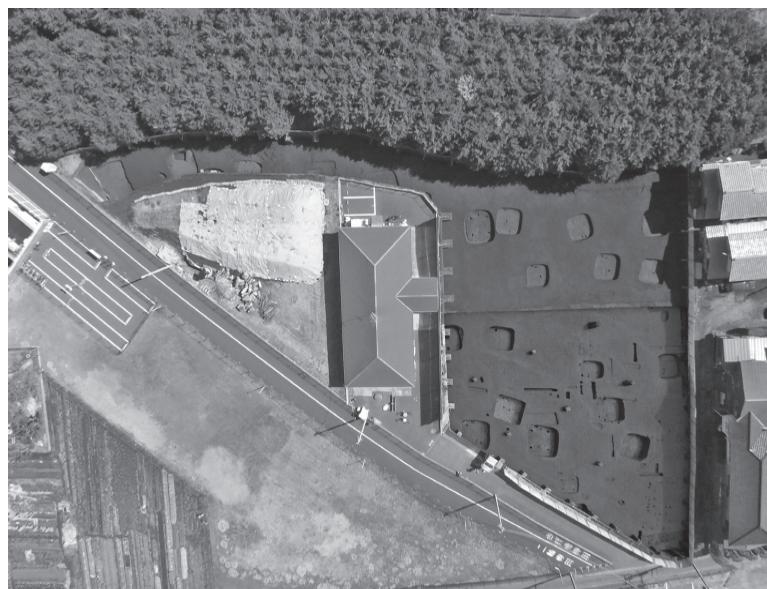
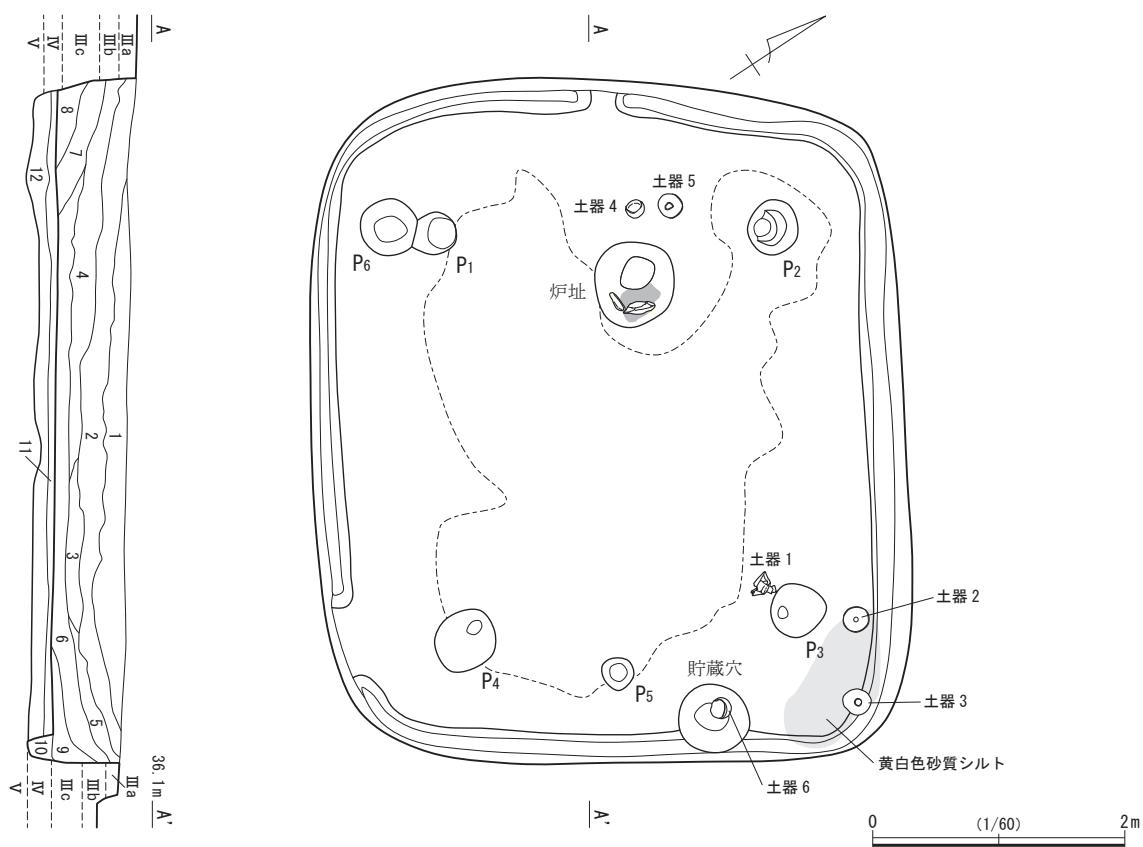


写真2 下飯田林遺跡第2地点地区南（上空から、上が南東）



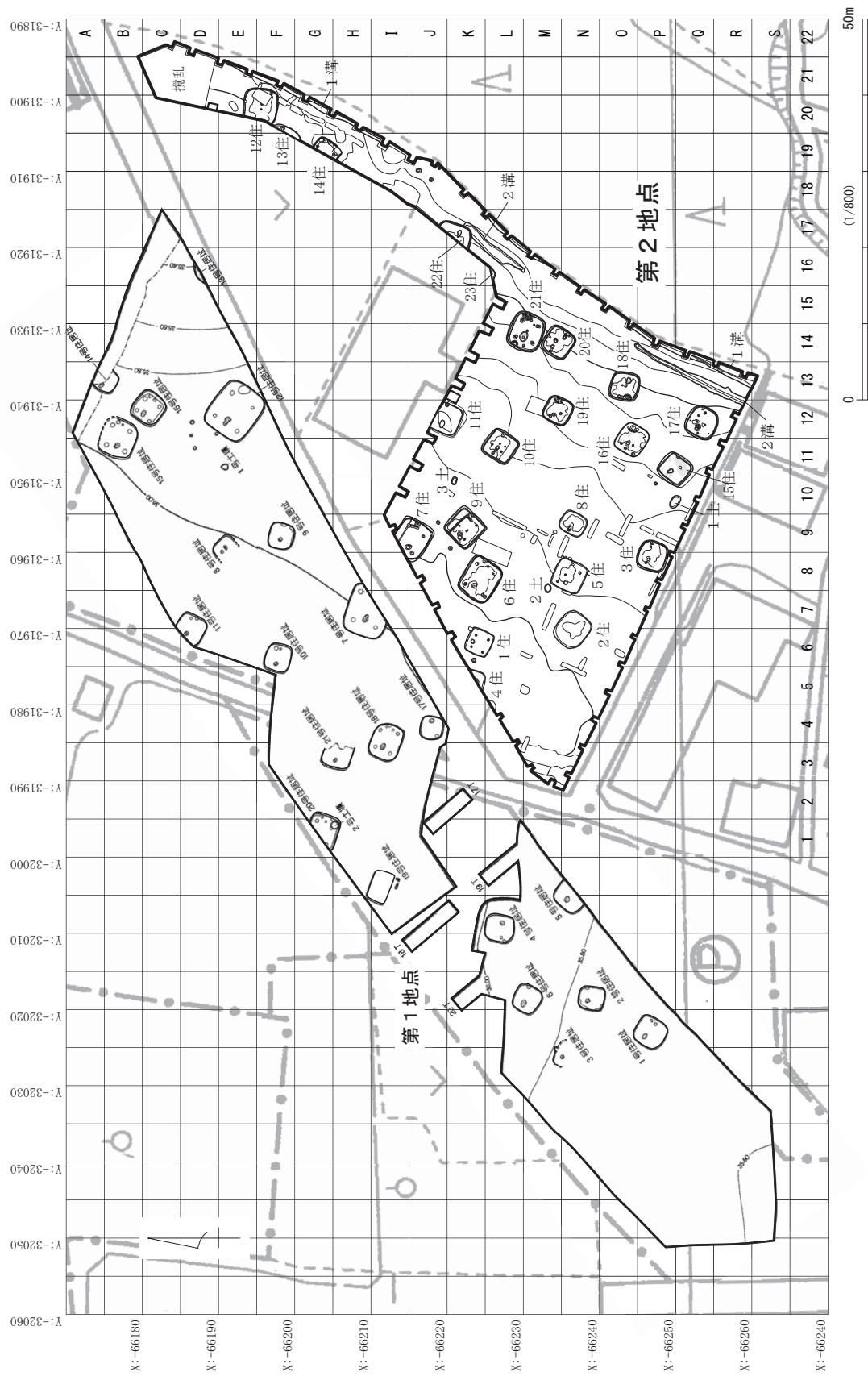
第3図 下飯田林遺跡第2地点 地区南6号住居址



写真3 地区南6号住居址炉址・遺物出土状況
(南西から)



写真4 地区南6号住居址遺物出土状況および
黄白色砂質シルト堆積状況 (南西から)



第4図 下飯田林遺跡第2地点 地区南遺構配置図および第1地点合わせ図

17号住居址は同一の規模・平面形態で、検出面から57cmと78cmの深さに床面が作られていた。拡張や縮小を行わず、床の高さのみを上げて建て替えを行っている。

遺物は、東京湾岸系の1段輪積み甕、ナデ甕、相模湾系のハケ甕、東海地方西部系のハケ甕、欠山式の高坏、元屋敷式の高坏などが出土した。

土坑は3基検出した。遺物は出土しなかったため、詳細な時期や用途は不明であるが、覆土から住居址と同時期と考えられる。ピットは7基検出した。ピット4～6は掘立柱建物と想定される。

溝状遺構は調査区の東壁に沿って2条検出された。1号溝状遺構は調査区東壁に沿って部分的に調査することができた。調査範囲での規模は、未調査部分も含めると約82mで、南北方向にさらに延びる。断面形は薬研状を呈する。遺物は出土していないが、宝永火山灰を含むIb層を切り込んで作られていることから、近世後半以降の所産であろう。2号溝状遺構は1号溝状遺構に併行しており、北北東—南南西方向に延びている。断面形は南側がV字状を呈する。遺物は出土していないが、覆土から、中世後半～近世前半に属すると考えられる。

4.まとめ

地区西

地区西で検出した溝状遺構はいずれも調査区外に伸びている。そのうち、1号溝状遺構の延伸部分については平成28年度に調査を行い、さらに南西に伸びていくことが判明した。この調査では、他にも中世の墓地を検出した。

2号溝状遺構は、遺物が出土していないが、重複関係と覆土から中世以降と考えられる。

地区南

地区南では、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の集落を検出した。本調査区の北西側には同時期の住居址群が検出された下飯田林遺跡第1

地点が隣接しており、同一集落を形成していたと考えられる。ここでは、そこで検出された住居址の様相と比較・検討しながらまとめてみる。

まず、住居址の特徴についてみると、第1地点では小型で浅い住居址と、比較的大型で深い掘り込みをもつ住居址に二分されている。今回の住居址群では、主軸長が5m以上は3軒、4～5mは8軒、4m未満は10軒であった。しかし、明確に分類することはできず様々な規模が存在し、3～4m代の住居址が主体的であることが確認できた。また、主軸方位はN-40°～80°-Wを指し、ほぼすべての住居址の出入口が南東側にある。

次に、住居址の分布状況をみると、重複がなく整然とした住居址配置を示していた。近接する例があることから、すべてが同時期に存在していたとは考えにくいが、第1地点と本調査の合計5,035m²の範囲に、44軒の住居址が重複なく存在していたことは、集落の形態を見る中で一つの典型例を示すものであり、住居の造営に際し一定の間隔をもって企画的に配置されていたこと、そしておそらく同一集団が営続した集落であったことなどが推測されるのである。

集落の営続期間について詳細な時期は今後の本格的な整理を待たねばならないが、第1地点調査では住居址群の分布状況から比較的短期間の集落であった可能性が指摘されている。今回の調査では、住居址同士が近接する例や、床面を嵩上げして建て替える例などがあるが、重複は見られず、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半のある限られた時間幅に収まるものと思われる。

集落の規模についてみると、まず第1地点の調査で西限が捉えられており、東側には谷が入り込んでいることから、本調査において集落の東限を検出した可能性が高い。その結果、集落の範囲は、東西約130m、南北90m以上の1万平米を超える面積をもっていたと推定できる。

鎌倉市 宝積寺跡・天神山下城遺跡

— 山頂から一括廃棄状況を示す瓦塔の出土 —

かなもり ひろあき
金森 弘晃

所在地 鎌倉市山崎字富士塚 794 番外

調査機関 武相文化財研究所

調査担当 金森弘晃・境 雅仁

調査原因 特別養護老人ホームの建設

調査期間 2014年9月16日～10月10日

2015年4月6日～11月11日

調査面積 5,038 m²



1. 遺跡の立地

宝積寺跡・天神山下城遺跡（鎌倉市 No.240・358 遺跡）は、北北東約 1.8km に JR 大船駅、南南西約 0.25km に湘南モノレールの湘南町屋駅が位置する。鎌倉市北西部にある天神山（標高 63m）の南 350m の丘陵頂上部のわずかな平坦面上（標高 46m）から南東斜面上に遺跡が存在する。本遺跡から天神山に続く南北方向稜線の両側は柏尾川低地に向かう急傾斜地になっている。遺跡のある丘陵上の平坦面には立川ローム層と黒色土層が堆積しており、主に東側斜面の地滑り群によって変位している。

2. 調査に至る経緯と調査成果

当該地に特別養護老人ホーム建設に伴う開発事業計画の話が鎌倉市教育委員会文化財課に寄せられ、事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地（鎌倉市 No.240・358）に該当することから、事前の試掘調査が必要と判断された。試掘調査は新設道路部分及び老人ホーム建設予定地・その他にも合計 5ヶ所のトレンチを設定し、市教委によって平成 26 年 6 月 31 日に行われた。その結果、弥

第1図 調査位置図 (1/25,000)

生時代後期から古墳時代前期及び、中世遺構・遺物が検出された。後日試掘範囲を広げ、再度試掘調査が平成 26 年 7 月 1 日に行われ、その結果前回と同時期の遺構・遺物が検出された。本調査は試掘調査の結果を受けて 5038 m² の調査区域を設定した。

発掘調査は平成 26 年 9 月 16 日から 10 月 10 日まで実施され、一旦中断した後、平成 27 年 4 月 6 日から 11 月 11 日まで実施された。想定以上の遺構の検出と、地形的な悪条件により、当初の計画から調査期間を 2 ヶ月延長して調査を行った。発掘調査は大きく 3 ブロックに分け、新設道路部分から調査を行い、次に頂上部へと移行し、最後に斜面地の調査を行った。調査区内で発生した残土は場内で処理する事となり、多量の残土移動が調査活動の妨げとなつた。

3. 調査概要

調査の結果、弥生時代・古墳時代・古代の竪穴建物址 77軒、土坑 16基、土壙墓 20基、掘立柱建物址 5軒、畠状遺構 1基、井戸 3基、段切り遺構 6面、横穴状遺構 9基、土壙状遺構 1基、柵列 1基、溝状遺構 19条などを検出した。

(1) 弥生時代～古墳時代

弥生時代～古墳時代にかけての竪穴建物址 70軒が検出された。

頂上部の平坦面から斜面地の段切り面 6面のすべての面から竪穴建物址が確認された。竪穴建物の大半は重複し、山側の壁を残し、谷側の壁面が後世に行われた段切り事業によって削平されていることが判明した。

中段面で検出された第 15 号竪穴建物址床面上からは硬質緑色凝灰岩の原石・剥片・チップ・砥石が出土した。未製品の出土はないが、玉作り公房址を想定される遺物の出土状況である。

(2) 古代

古代に相当する竪穴建物址は頂上から最下段面まで点在し、特徴的な遺構・遺物として瓦塔片の出土と、粘土貼付掘立柱遺構がある。瓦塔は頂上北西崖沿いで 38 点が出土した。瓦塔片は全て細片で、基壇部・屋蓋部・隅棟部・軸部の部位が出土している。屋蓋部の傾斜角の違いから多層塔と推定される。

(3) 中・近世

中段北端の平坦面から五輪塔の各部位が総数 35 点出土した。元位置を留める物もあるが、広範囲に点在し、土壙の中からも出土している。20 基検出された土壙墓は、人骨も検出され、火葬の痕跡も 3ヶ所で確認された。

近世では、畠状の畝跡が 1 面確認され、宝永火山灰が多量に混入した人為的に攪拌されて、宝永スコリアの軽石が混ざった耕作土の堆積も確認された。耕作土中からはメノウ製の火打石も出土

している。

4. まとめ

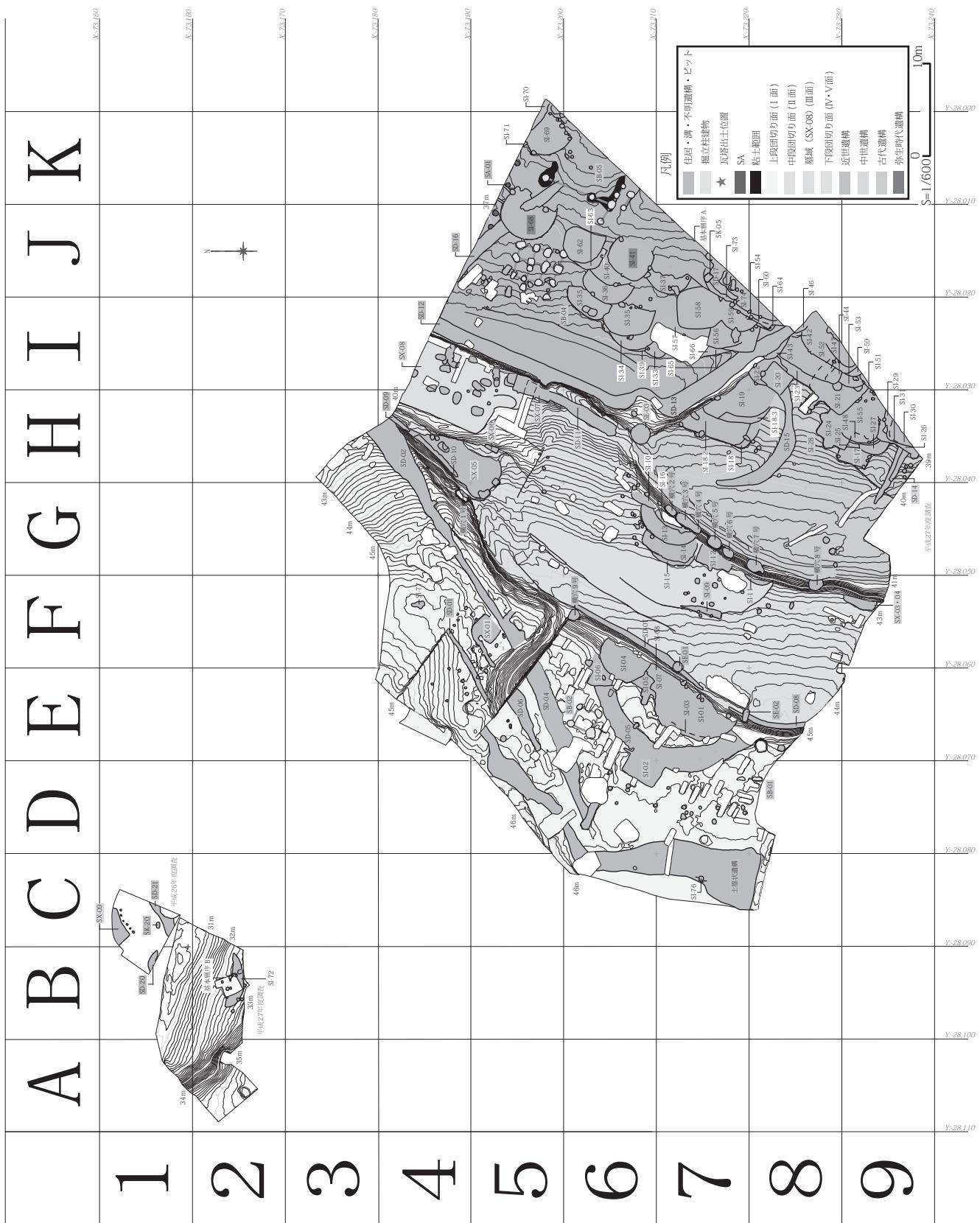
調査区最下段では 40m × 30m の範囲内に弥生時代～古墳時代の竪穴建物址が 27 軒重複して検出された。中世末～江戸時代初頭にかけて行われた段切り造成地業によって、多数の竪穴建物址が消滅したと考えられる。また縄文時代以前と江戸時代に大きな地震の痕跡も確認された。古墳時代の竪穴建物址床面には地割れの痕跡が残り、割れ口から五輪塔とかわらけが出土している。興味深い事例である。



写真1 瓦塔



写真2 五輪塔



第2図 遺跡全体図 (S =1/600)



写真4 宝積寺跡・天神山下城遺跡 下段完掘状況（北東）



写真5 瓦塔片検出 作業風景（南東）



写真6 五輪塔 出土状況（東）

川崎市 橘樹郡衙跡 [千年伊勢山台遺跡] 第16~20次調査

— 平成27年度橘樹官衙遺跡群確認調査事業の成果 —

栗田 一生

所在 地 川崎市高津区千年字蟻山・伊勢山台・
うえはらしゆく
上原宿

調査機関 川崎市教育委員会

調査担当 栗田一生・館 祐樹

調査原因 試掘調査・内容確認調査

調査期間 [第16次] 2015年6月17日~7月14日

[第17次] 2015年8月31日~9月18日

[第18次] 2016年1月14・15日、
2月15~17日

[第19次] 2016年2月15・16日

[第20次] 2016年3月10日~23日

調査面積 [第16次] 約79.4m²

[第17次] 約226.4m²

[第18次] 約140m²

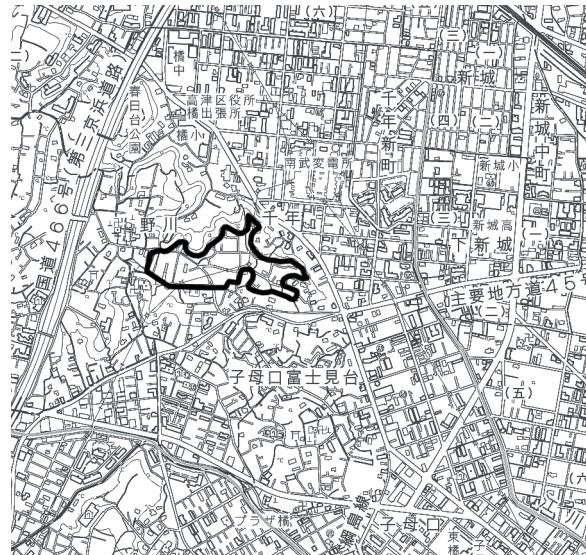
[第19次] 約19.4m²

[第20次] 約39.6m²

1. 遺跡の立地

橘樹郡衙跡〔千年伊勢山台遺跡〕(以下、「橘樹郡衙跡」という。)は、神奈川県東部に位置する川崎市のほぼ中央、川崎市高津区千年に所在し、多摩川右岸から約2.6kmの距離を隔てた多摩丘陵の頂部、通称「伊勢山台」と呼称される平坦面に立地しています。「伊勢山台」は標高40~42mの平坦面で、東西に広がり、北側及び東側に広がる沖積低地とは約30mの比高差があります。

遺跡は、縄文時代から中世までの複合遺跡ですが、古代武藏国21郡の1つである橘樹郡の役所跡が発見されたことから、橘樹郡衙跡と呼ばれています。橘樹郡衙跡は、平成27年3月10日、

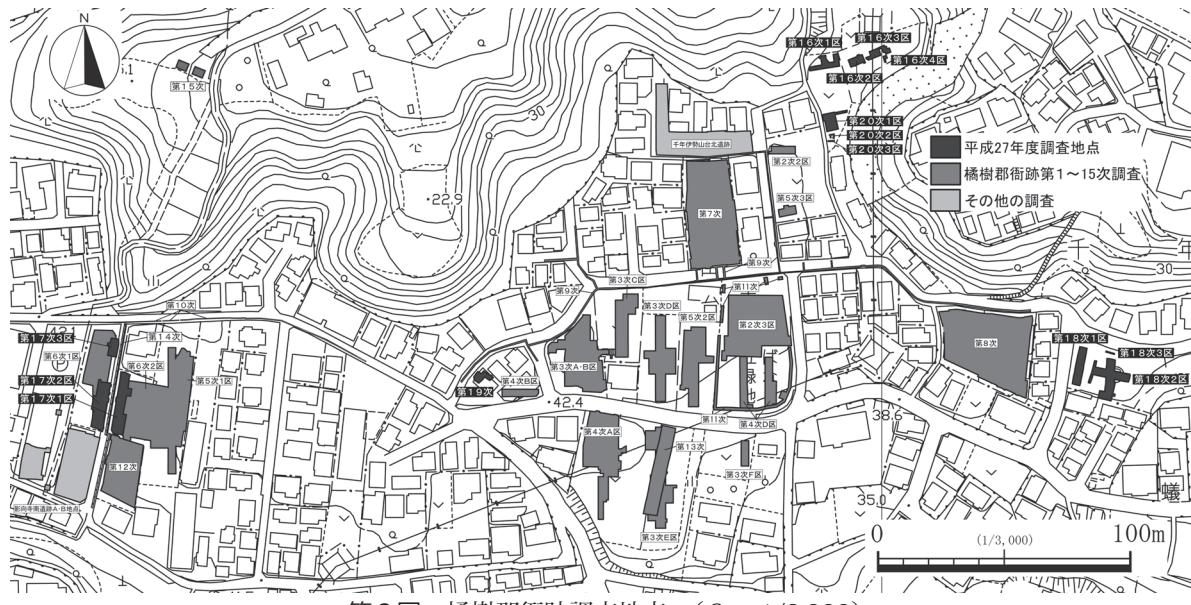


第1図 橘樹郡衙跡〔千年伊勢山台遺跡〕位置図
(S = 1/25,000)

西側に隣接する古代寺院跡の影向寺遺跡とともに、その一部が橘樹官衙遺跡群として国史跡に指定されました。

2. 調査に至る経緯と調査経過

橘樹郡衙跡は、郡衙の主要施設である正倉院は確認されているものの、郡庁等、ほかの主要施設が未だ確定していないことから、川崎市教育委員会は平成25年度から橘樹官衙遺跡群確認調査事業として確認調査を実施しています。平成27年度は、①正倉院北側における郡衙関連遺構の広がりの把握、②平成25年度に橘樹郡衙跡上原宿地区で検出した南北建物の詳細把握、を目的に2回の調査(第16・17次調査)を予定していましたが、想定外の開発計画に伴う調査(第18・19次調査)と第16次調査の追加調査(第20次調査)が加わり合計5ヶ所の調査となりました(第2図)。



第2図 橘樹郡衙跡調査地点 (S = 1/3,000)

(1) 第16次調査(第3図)

郡衙関連遺構の広がりを把握するため、正倉院北東側に4ヶ所調査区を設定し、調査を実施しました。その結果、1区から幅約6mを測る溝状遺構を検出するとともに、3・4区でこれまで確認されたことのなかった10～11世紀の竪穴建物1軒等を検出しました。

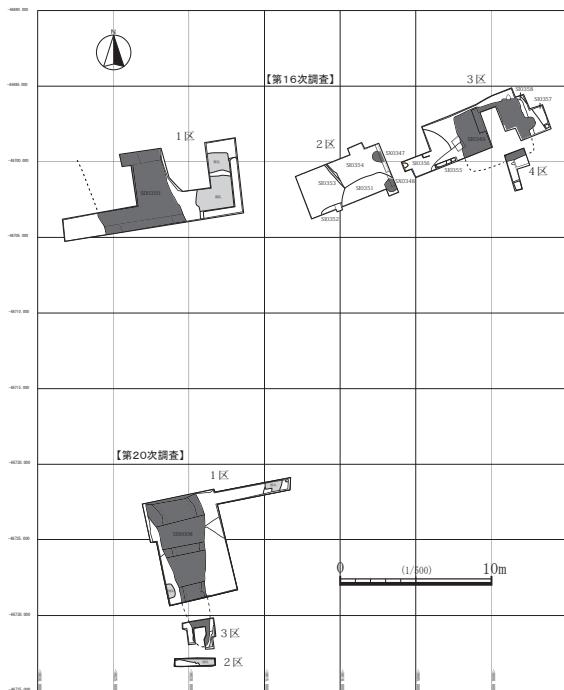
第12次調査で確認した掘立柱建物の内容を把握するため、影向寺に近い上原宿地区で3ヶ所調査区を設定し、調査を実施しました。その結果、第12次調査で検出した建物跡が、南北6間×東西3間の大型建物であることが判明するとともに、ほぼ同一場所で建替えられていることも確認できました。また、建物跡北側でも柱掘方を数基検出しました。

(3) 第 18 次調查

蟻山地区で正倉が検出された第8次調査区よりもさらに東側の、橘樹郡衙跡が立地する丘陵東端部で宅地開発計画が出されたことから、事前の試掘調査を実施し、3ヶ所の調査区を設定しました。その結果、2・3区から南北に延びる溝状遺構を検出しました。

(4) 第 19 次調查

第18次調査の調整中、伊勢山台地区の国史跡指定地西側近接地で個人住宅建設設計画が出されたことから、事前の確認掘調査を実施しました。その結果、攪乱が多く見られたものの、東西に並ぶ柱掘方を検出しました。



第3図 第16・20次調査 ($S = 1/500$)

(5) 第20次調査(第3図)

第16次調査1区で検出した溝状遺構は丘陵北側斜面を下るとともに、南側へも続くことが推測されたため、南側の状況確認を行うよう橘樹郡衙遺跡群調査整備委員会の指導を受けたことから、第16次調査南側に3ヶ所の調査区を設定し、調査を実施しました。その結果、第16次調査で確認した溝状遺構が南側に続く状況は把握できなかったものの、千年伊勢山台北遺跡で検出された正倉院北側を区画する溝の東側延長部分と想定される溝状遺構を検出しました。

3. 調査の成果からの考察

橘樹郡衙跡第16～20次調査を実施した結果、橘樹郡衙の新しい知見が得られるとともに、今後の課題も出てきました。

(1) 正倉院の規模と構造(第4図)

平成27年度の調査での大きな成果の1つが、第18次調査で正倉院東側の区画と想定される溝状遺構を検出するとともに、第20次調査で正倉院北東側の区画溝も検出し、正倉院の規模が概ね明らかになったことです。

これまでの調査で正倉院の北側・西側・南側については区画の一部が発見されており、今回東側の区画を確認したことで、正倉院の規模が東西約210mであることが判明しました。当時の唐尺(約30cm)で換算すると、概ね700尺になることから、正倉院がある程度計画性をもって造営されたことを示すものと言えます。

また、正倉院北側の区画溝が第20次調査地点でほぼ直角に南へと向きを変え、しかも途中までしか見られないことも確認できました。これは、丘陵平坦面に北東から入り込む小さな谷を意識したものと考えられることから、正倉院が立地する丘陵平坦面がほぼ現在と同じ広さであったことの証拠といえ、古代の景観復元に貴重な所見を与えてくれました。



正倉院は、南側の区画東側がほとんど明らかになっていますが、確認された区画溝と北東側の谷によって概ね北側、西側、東側、中央部の4地区に分けることが可能となりました。北地区は総柱建物である正倉が南北2列、東西に5棟以上、整然と並んでいた地区で、西地区は大型総柱建物である法倉が設置された地区、東地区は北地区同様、総柱建物である正倉が設置された地区、中央部はほとんど建物が確認されていない広場的空間と考えられます。

(2) 上原宿地区の建物群(第5図)

橘樹郡衙跡上原宿地区で実施した第17次調査では、第12次調査で検出していた大型建物2棟(SB0338・0339)の北側部分を検出しました。その結果、SB0338が5間×3間、SB0339が6間×3間の南北棟であることが判明しました。SB0339は推定床面積は約97m²を測り、正倉院法倉に次ぐ、橘樹郡衙跡でこれまでに確認した2番目に規模の大きい建物跡となります。

両建物は、ほぼ同一場所で建替えられており、SB0339→SB0338という新旧関係が把握できました。柱掘方から、建物時期を判別できる資料が



第5図 上原宿地区建物群 (S = 1 / 1,000)

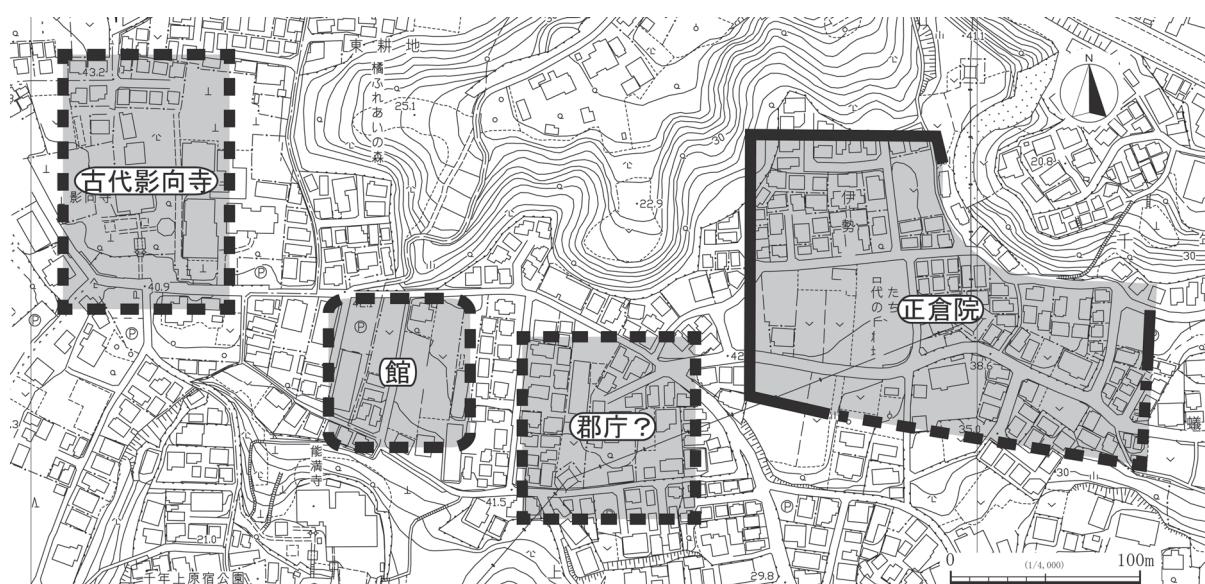
ほとんど出土しませんでしたが、SB0338の柱抜取穴から9世紀中葉～10世紀の土師器が出土していることから、それに先行するSB0339は8世紀～9世紀前葉と想定されます。両建物の柱掘方は大規模なもので、耕作による攪乱を抜いて確認したところ、掘方は一辺1～1.5m、深さ約1.2m程ありました。

また上原宿地区では、SB0338・0339の北東側で大型の掘立柱建物跡(SB0114)等の複数の建物が確認されています。これまで発見されている橘樹郡衙跡の建物主軸方位が、7世紀後葉

～8世紀初頭は西に傾いてるものが、8世紀前葉～後葉以降はほぼ正方位になる特徴が見られます。上原宿地区の建物群は、やや東に建物主軸方位が傾いています。これが時期差なのか、建物の性格の違いなのかは不明ですが、上原宿地区の建物群は同じ性格の施設を構成していたと考えられます。ではその施設とは何かを考えてみると、SB0339という大型建物が存在する等、郡衙の中の主要施設である可能性が高いと想定されます。郡衙主要施設のうち、正倉院は確認されているので、残る施設(郡庁、館、厨家)で検討してみると、郡庁の特徴である規則的な建物配置は取らず、厨家で見られる竈を有する建物もないことから、消去法ではありますが、館である可能性が最も高いと考えられます。

(3) 橘樹郡衙主要建物の想定(第6図)

第17次調査で検出した大型建物跡等から、上原宿地区の建物群が館であると推測しています。このことから考えると、郡衙が立地する通称「伊勢山台」・「影向寺台」と呼ばれる丘陵東端に正倉院、西端に古代影向寺が所在し、今回影向寺寄りの上原宿地区に館が所在するとなれば、自ずと正倉院と館の間に広がる幅約120mの空間に郡庁



第6図 橘樹官衙遺跡群主要施設想定図 (S = 1 / 4,000)

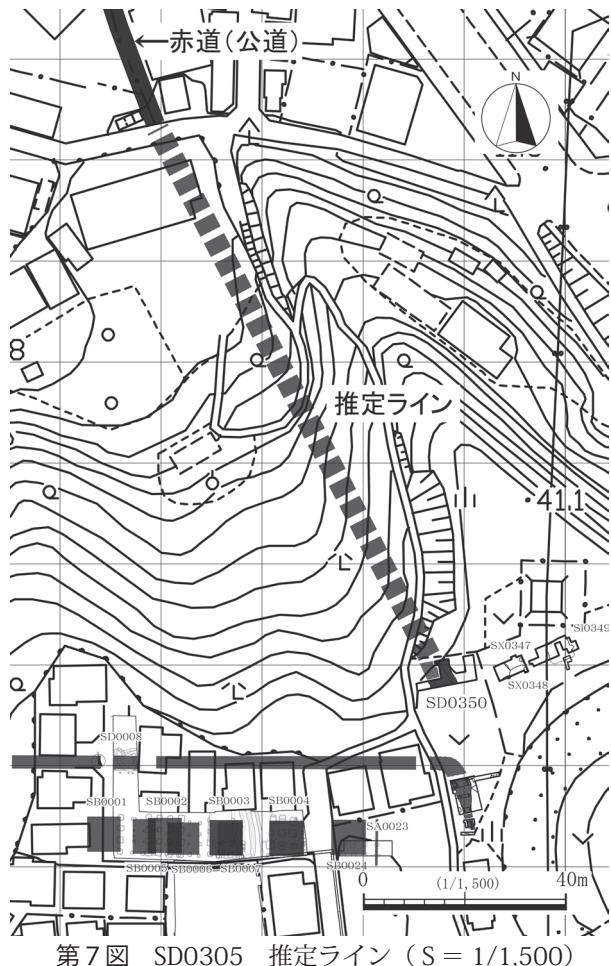
が眠っている可能性が高いと推定されます。厨房施設を有する厨家は、水場との関係性が強いと考えられることから、湧水が見られる郡衙跡北側の谷戸に近い辺りではないかと推測していますが、現状では場所は不明です。

(4) 新たな遺構の発見（第7図）

これまで平成27年度に実施した調査成果から、橘樹郡衙跡の主要施設等について話をしてきましたが、平成27年度の調査では初めて発見された遺構がありました。それが第16次調査の溝状遺構（SD0350）です。

SD0350は、正倉院北東区画外側の丘陵先端部に位置し、南東から北西へと丘陵斜面を下る様が見られました。調査区の関係で、急峻な斜面に入る手前までしか確認できませんでしたが、溝の規模等からそのまま斜面を下っていく可能性は高いと考えられました。SD0350の構築時期は、溝の覆土中層付近で板碑が出土していることから、溝の構築時期は中世以前である想定されますが、古代まで遡るものかどうかは不明です。ただし、SD0350は遺構確認面で幅約6m、底面約3mを測る大型の溝であり、こうした大規模土木工事等を実施できる状況としては、橘樹郡衙の関係が最も考えられることから、古代の溝である可能性は高いと言えます。

また、SD0350を丘陵斜面方向にまっすぐ伸ばしていくと、ある場所にあたります。ある場所とは、現在は家と家の隙間でほとんど道としては使われていない赤道（あかみち・公道）です。赤道は近世以前からの道であることが多いので、この赤道とSD0350の延長線が合うということは、かつて丘陵下から丘陵上まで道があった可能性も推測されます。逆に赤道を北へ進むと「北浦」という地名が残っていることから、古代には北浦付近に津があり、そこまで運んだ荷を赤道→SD0350の道を通って丘陵上の正倉院へと運んだ、そうし



第7図 SD0350 推定ライン (S = 1/1,500)

た郡衙の搬入路である可能性も検討していかねばと考えています。

4.まとめ

平成27年度に実施した5回の調査（第16～20次調査）では、橘樹郡衙跡の新たな知見が多く得られ、影向寺遺跡を含む橘樹官衙遺跡群の価値をさらに高めることになりました。

しかし、平成27年度調査の原因にもありました。最近橘樹官衙遺跡群及びその周辺では、戸建住宅の改築や宅地開発工事が非常に多く発生しており、市民や関係者の協力を得ながら遺跡を保存できるよう調整していますが、その保存が危ぶまれている場所も一部あります。現在、橘樹官衙遺跡群の歴史的価値をしっかりと確認しつつ、将来にわたり貴重な文化財として守り伝えていくよう、保存活用計画の策定に取組んでいますが、

その検討とともに、橘樹官衙遺跡群の全容解明を目指して今後も継続的に調査を実施するとともに、

市民が広く関心をもってもらえるよう公開・活用をしっかりと行っていきたいと考えています。



写真1 SD0350（第16次調査）



写真2 SB0338・0339 検出状況第17次調査



写真3 正倉院東側区画溝（SD0395：第18次調査）

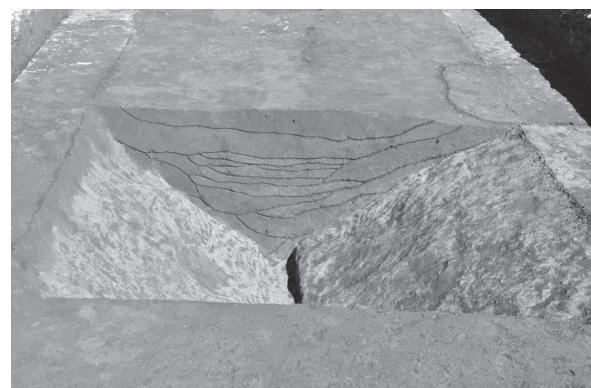


写真4 SD0395 断面（第18次調査）



写真5 正倉院北東側区画溝（SD0008：第20次調査）



写真6 遺跡見学会（第17次調査）

伊勢原市 かみかす や 上粕屋・秋山上遺跡第2次調査、あきやまうえ 上粕屋・秋山遺跡
 — 繩文時代後期前半の集落と中世～近世の遺構群 —

むらまつ あつし
村松 篤

所在地 伊勢原市上粕屋地内
 調査機関 公益財団法人かながわ考古学財団
 調査担当 村松 篤、砂田佳弘、池田 治、
 後藤喜八郎、田村良照、曾根博明、
 渋谷正信、塚田順正
 調査原因 新東名高速道路建設
 調査期間 2015年4月1日
 ～2016年11月終了予定
 調査面積 6,819 m²



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

1. 遺跡の立地

両遺跡が所在する伊勢原市は、北は丹沢山地の一部である大山東麓の扇状地から南の平塚市へと広がる平野部に至る山地・丘陵・台地・平野からなる表情豊かな地形をなしている。遺跡は伊勢原市の中央部、小田急小田原線の伊勢原駅より北へ約2kmに位置し、上粕屋扇状地の渋田川支流に囲まれた標高60mほどの南北約1.7km、東西約0.6kmの一支台に立地している。台地の周縁は比高差10mほどの崖線で囲まれ、平坦な台地頂部は西から東に向い、緩やかに傾斜している。本調査区はこの台地の北縁沿いで「くの字」に屈曲する縁辺に位置し、平坦面から北斜面にかけて遺構が検出されている。上粕屋・神成松遺跡などの縄文時代から中世、近世に渡る遺跡が周辺に分布する。また、同じ支台上には、上杉定正の居館跡と伝わる糟屋館跡があると伝わり、西側の御伊勢森遺跡の大学建設に先立つ発掘調査では、中世の建物跡と断面V字状の大溝と土壙が確認された。上粕屋・秋山遺跡の範囲内には糟屋館跡「大門跡」の石碑が地元で建立され、南500mには太田道

灌の墓所がある洞昌院が位置している。

2. 調査に至る経緯と調査経過

上粕屋・秋山上遺跡と上粕屋・秋山遺跡の発掘調査は、中日本高速道路株式会社が進める新東名高速道路建設事業の調査である。伊勢原市域での新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査は、中日本高速道路株式会社東京支社厚木工事事務所・神奈川県教育委員会・公益財団法人かながわ考古学財団の三者で、締結された「第二東名高速道路建設事業に伴う伊勢原市域埋蔵文化財に関する協定」に基づき、実施している。両遺跡の発掘調査は、平成27年4月1日から20区及び21区の調査から開始した。当初、糟屋館跡として届け出ていたが、平成28年度になって、上粕屋・秋山上遺跡と上粕屋・秋山遺跡として名称が定まった。なお、上粕屋・秋山上遺跡は第2次調査となる。ただし、両遺跡は連続する同一遺跡であり、遺跡の単位で考えれば、20区西の埋没谷から東に広がる平坦面から北斜面にかけての遺構群を一括して捉える必要がある。

3. 調査の概要

(1) 旧石器時代

旧石器時代の調査は、20区を中心に11個所の $2 \times 2\text{ m}$ の試掘グリッドを設定して調査を行い、試掘グリッド3個所でB B 1層から剥片が出土し、それぞれ拡張し調査を行った。2号石器集中は、ナイフ形石器を主体とし、1,000点を超す剥片類が出土した。下部からは2基の礫群、1基の配石が検出された。

(2) 縄文時代

縄文時代の遺構は、後期前半が主体で、竪穴住居跡10軒、配石遺構9基、埋没谷などが検出された。

20区西に位置する縄文時代の谷は、最も深いところで10m以上あり、底面は南から北に向かい緩やかに傾斜している。谷底からは15,000点を超す縄文土器片や石器・礫が分布し、台地の上の集落跡と連動して、遺跡が形成されていたことが推定できる。また、21区北からも遺物が密集する縄文時代後期の埋没谷が発見され平坦に見えるこの扇状地も小支谷によって複雑に開析されていたことが推定される。この深い谷を望む台地上に、敷石住居を中心とする9軒の住居跡が発見された。そのうちの2軒はいわゆる環礫方形配石遺構で、大型の竪穴住居に二重の環礫が巡らされている。そのうちの1軒で外帶と内帶が交差する部分が確認され、環礫にも新旧があることがわかった。また、入口部分には周堤礫と呼ばれる大形礫を壁状に組んだ遺構が発見されている。

21区南の平坦地から縄文時代後期の配石遺構が径30mの範囲から9基検出され、大型の石皿や立石・石棒を起立させた配石遺構が発見された。無頭の石棒は、近くから出土した頭部が接合し復元された。周辺には竪穴住居等の遺構や遺物包含層が見つかず、集落内の特殊な領域として想定できる。

(3) 古墳時代～奈良平安時代の遺構群

古墳時代の遺構としては、20区の谷際に位置する住居跡と22区北で同軸の3軒の後期の竪穴

住居跡が検出された。

奈良・平安時代では、20区で台地上から竪穴住居跡が検出され、谷の中からは水場遺構が発見された。水場遺構は木杭で板類を組み、谷の上流からの水量を堰き止めるために作られている。下面から木枠で囲われた井戸枠が検出された。21区南では、奈良・平安時代の竪穴住居4軒と掘立柱建物から構成される集落が発見され、プロック的に集落が点在する様子がうかがえる。

(4) 中世～近世の遺構群

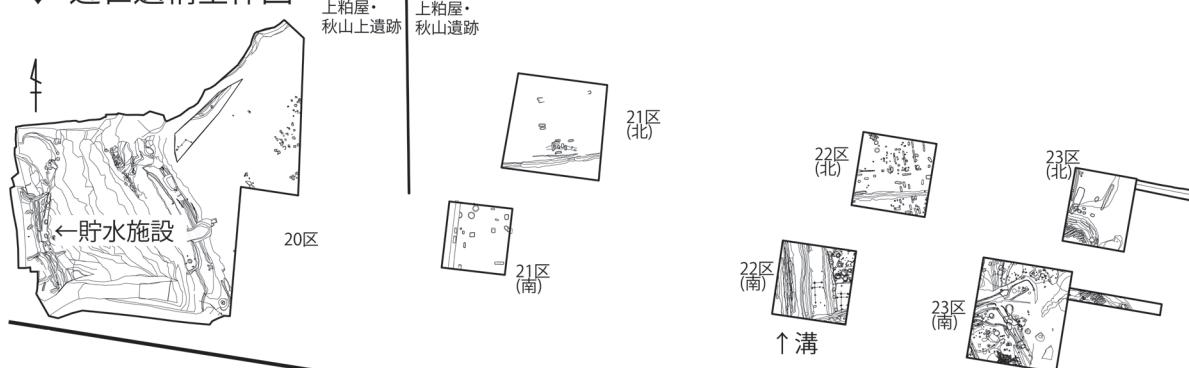
今回の調査区では、中世から近世にかけての遺構は調査区全体にわたって発見され、斜面地に平場を造成しながら土地利用を行っている。

20区では、埋没谷に面する東側の緩斜面を大きく平場造成を行い、そこに中世～近世の掘立柱建物が確認された。また、埋没谷の西側の斜面を利用して掘られた近世の溝の途中に、胴木を渡しそこに礫を積んだ水をためる貯水施設と考えられる遺構が発見された。他に茶臼が検出された井戸や台地の周辺を区画する堀も発見された。21区北からは中世後半に位置づけられる幅3m、深さ1mの溝が確認され、22区では、近世前半の深い溝が確認され、中世まで遡る掘立柱建物も検出されている。

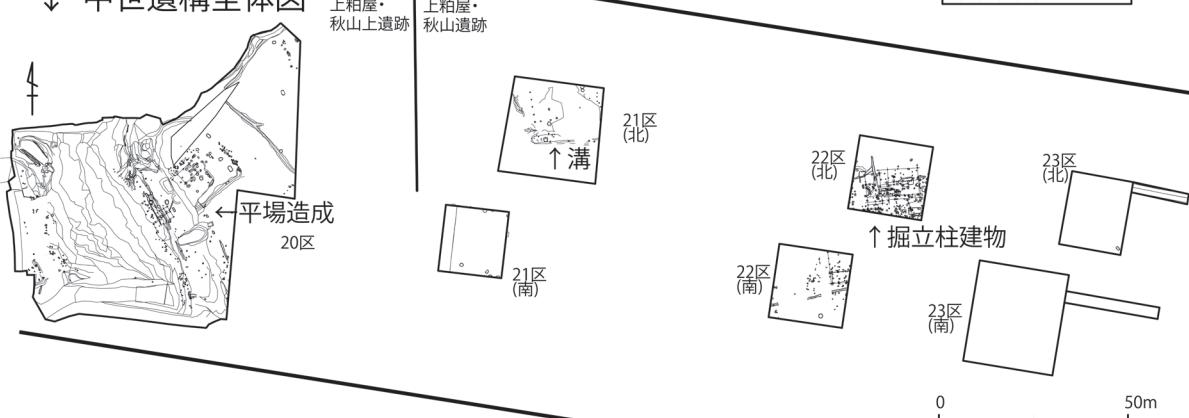
4. まとめ

本遺跡の調査では、旧石器時代から近世に渡る遺構が発見された。縄文時代後期の集落は、台地平坦面の配石遺構、斜面地の集落跡、縄文時代の深い谷が連動するように発見されたことは、この地域の縄文時代景観を復元するための重要な発見といえる。また、奈良・平安時代の集落も低地部の水場遺構との関係を考えられ興味深い。中世以降では、堀と推定される溝や土坑墓などが見つかり、いまだ位置が確定しない糟屋館跡発見の糸口となることも期待される。両遺跡の近世前半の遺構群も特徴的で、中世から近世に移り変わる上粕屋周辺の姿を考える上で、今後も続く周辺の調査成果が注目される。

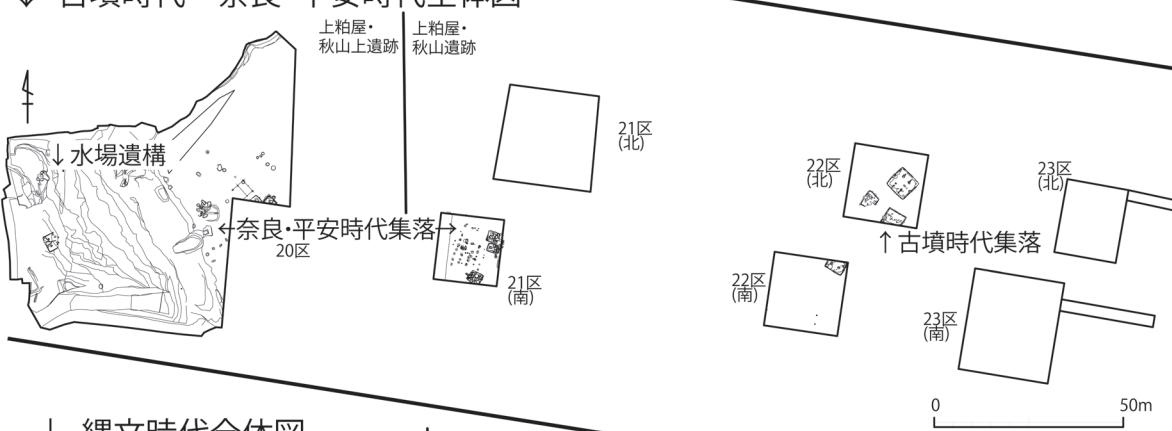
↓ 近世遺構全体図



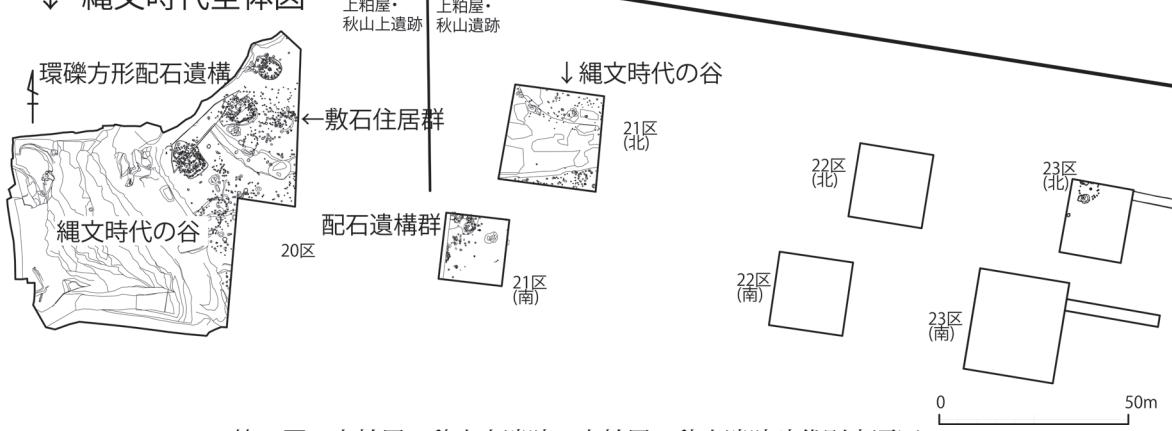
↓ 中世遺構全体図



↓ 古墳時代～奈良・平安時代全体図



↓ 繩文時代全体図



第2図 上粕屋・秋山上遺跡、上粕屋・秋山遺跡時代別変遷図

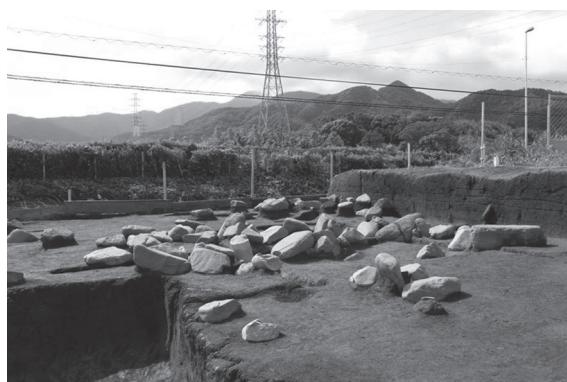


写真1 配石遺構（21区南）



写真2 J 7号住居（20区）



写真3 縄文時代の谷（20区）



写真4 古代、井戸枠（20区）



写真5 近世、貯水施設（20区）



写真6 近世、井戸・茶臼出土（20区）



写真7 中世、溝（21区北）

秦野市 横野山王原遺跡

—秦野地方の富士山宝永大噴火の被害と復興—

あまのけんいち
天野賢一

所在地 秦野市横野 216-1 外

調査機関 公益財団法人かながわ考古学財団

調査担当 天野賢一・畠中俊明・三瓶裕司・

岡 稔・諏訪間直子・柏谷 隆・

瀧谷正信・山田仁和・瀬田哲夫・

塚田順正

調査原因 新東名高速道路建設事業

調査期間 2015年4月1日～2016年3月31日

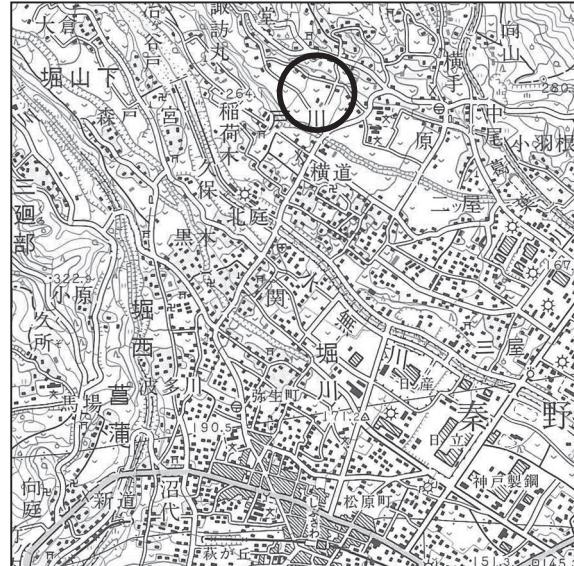
調査面積 13,953 m²

1. 遺跡の立地

遺跡は、小田急線渋沢駅の北3kmの秦野盆地縁辺部に所在し、丹沢山地裾部にあたる。調査地点は、北側を葛葉川支流の唐沢川、南側は矢坪沢に挟まれた、北西から南東に長く延びる台地の幅は約200mで、調査地点の標高は230～250mの緩斜面となっている。これまで本格的な発掘調査の少ない地域で周辺部の様相は明らかでなかったが、近隣の遺跡では秦野盆地中央部を流れる水無川左岸の段丘上に所在する稻荷木遺跡の調査で、縄文中期末葉の敷石住居跡が発見されている。

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、中日本高速道路株式会社による新東名高速道路建設事業に伴うものである。秦野市内では寺山中丸遺跡、蓑毛小林遺跡、寺山角ヶ谷戸遺跡、秦野市No.125遺跡、柳川竹上遺跡とともに実施されている一連の発掘調査である。横野山王原遺跡は、秦野サービスエリア建設事業部分にあたり、発掘調査は2014年10月から着手している。



第1図 遺跡位置図

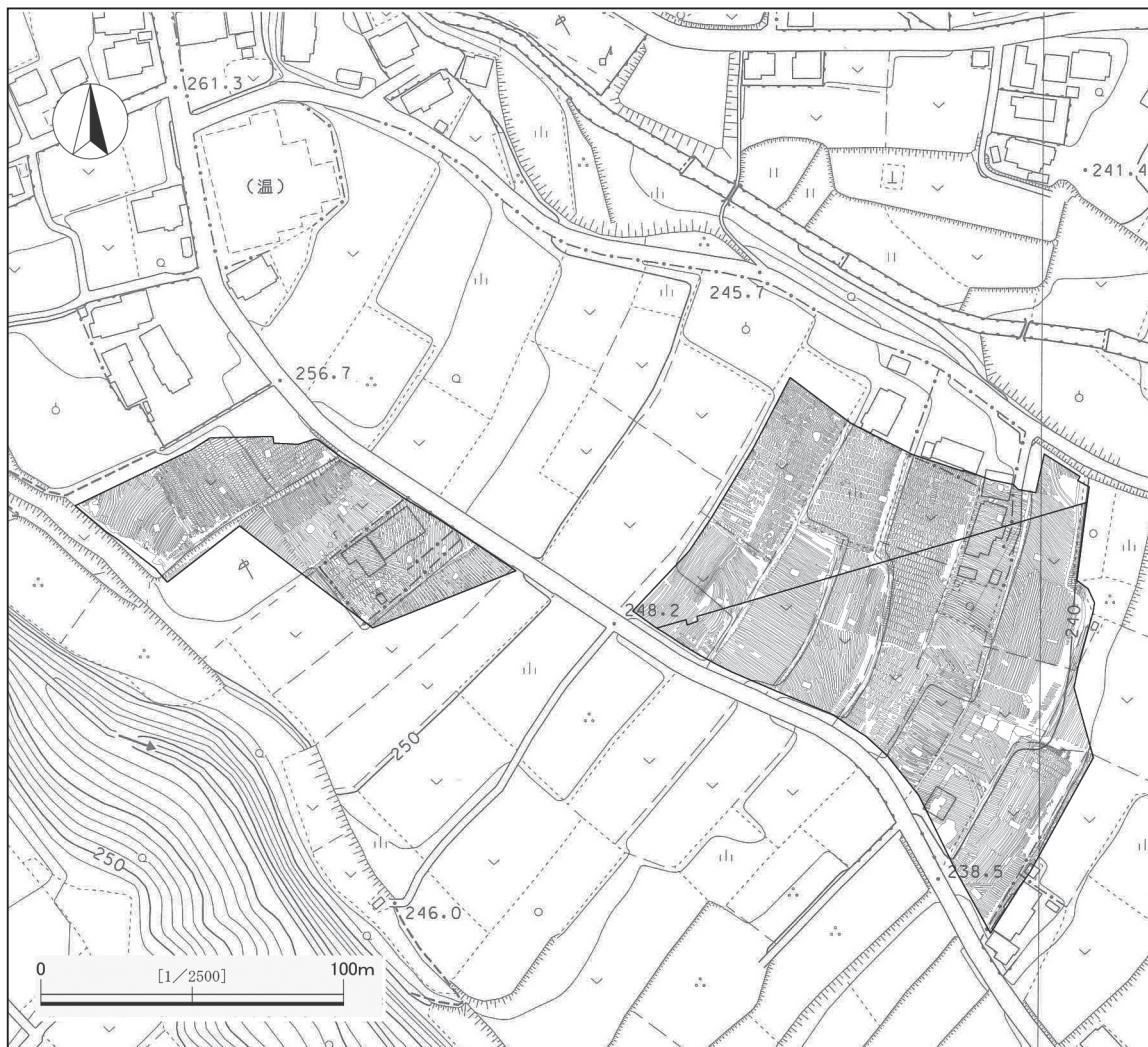
3. 調査の成果からの考察

これまでに縄文時代後期の竪穴住居1基・集石62基・土坑44基、弥生時代の土坑27基、奈良・平安時代の溝2条・道4条・土坑171基などが発見されている。

縄文時代では、早期条痕文系土器がまとまって分布している。野島式土器のほか、東海系の絡状体圧痕文を有する土器が主体を占めていることが特筆される。

弥生時代では、深さ1.5～1.9mで、底面が長方形となる深い掘り込みを有する土坑が発見されている。特徴から落とし穴と考えられるもので、覆土上部には、弥生時代の黄褐色スコリア層が堆積していることから、時期の詳細は明らかではないが、弥生時代の所産であると考えられる。

奈良・平安時代では、耕作に伴うと考えられる円形土坑が発見され、尾根部を横断するように道などが発見されている。以降、近世に至るまで連



第2図 横野山王原遺跡全体図（近世宝永火山灰廃棄遺構）

綿と耕作地として利用されていたと考えられる。

近世の調査では、宝永火山灰の廃棄遺構が調査区全体で発見されていることが特筆される。本遺跡で発見された宝永火山灰の廃棄遺構は、幅0.5m前後の溝状を呈し、併走して連続する。長さは2m前後から、20mを超えるものまで長短があり、直線的に並ぶものが主体であるが、曲線的に掘られているものなど、多様な形態が見られる。これらは連続する廃棄の単位と捉えられ、地割り毎に同じ形態のものがまとまっている。また、現在の地表面で見られる雛壇状の土地区画は、この廃棄の単位と一致しており、江戸期の地割りがほぼ踏襲されている。

出土遺物は、遺構の性格から極めて少ないが、18世紀前半の陶器(摺絵皿)・煙管・砥石が出土している。

富士段宝永大噴火

1707(宝永4)年の噴火は、当時「砂降り」と呼ばれ、降灰により静岡県駿東郡から神奈川県西部に極めて甚大な被害を及ぼし、南関東のほぼ全域にその影響を与えていた。

宝永噴火の4年前にあたる1703(元禄16)年に起きた巨大地震により関東地方では多くの災害が発生している。さらに1707(宝永4)年の10月には東海道沖から南海道沖を震源域とする巨大地震を受け、連続する二つの大地震と沿岸を襲つ



写真1 横野山王原遺跡 空中写真（南東から）



写真2 出土遺物（陶器）



写真3 出土遺物（煙管）



写真4 出土遺物（砥石）



写真5 出土遺物（砥石）

た大津波、さらにその49日後に起こった宝永大噴火と江戸時代屈指の自然災害が連続している。富士山の宝永大噴火では、富士山裾野にあたる静岡県駿東郡及び御殿場市周辺の御厨地方では、大量の火山灰により集落とともに耕作地が壊滅し、「亡所（荒廃地）やむなし」とされた。

また、富士山の東麓部を流れる鮎沢川、神奈川県西部の西丹沢を流れる河内川が合流する酒匂川下流域では、降灰地域から流入した火山灰の影響で酒匂川の氾濫が繰り返し起き、大規模で長期的な二次災害が続いた。

秦野地方の被害

神奈川県西部にあたる秦野地方においても宝永噴火に関する文献史料は多数残されている。秦野市内の文献では、「一尺四・五寸降積、田畠野山一面砂場罷成」と記載され、一帯は約45cmの降灰により火山灰に覆われた状況が把握できる。噴火の翌年にあたる「宝永五年閏一月砂降りに付き横野村訴え」（史料1・2）では、1703年の元禄大地震、日照り、水害、嵐など立て続けに見舞われた自然災害により生活が困窮している中での宝永噴火によりさらなる被害の窮状が表現されている。

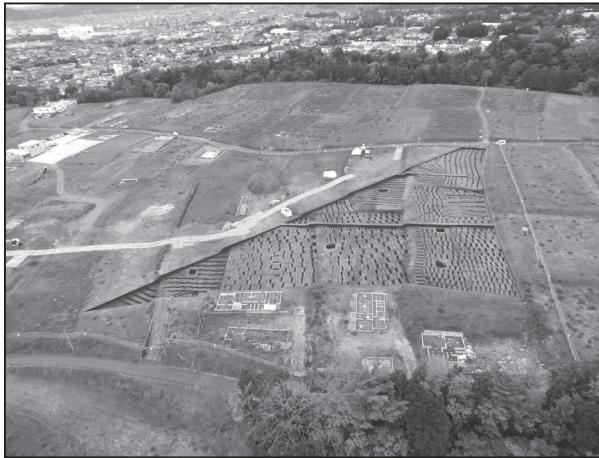


写真6 横野山王原遺跡 空中写真（北東から）



写真7 宝永火山灰廃棄遺構調査状況

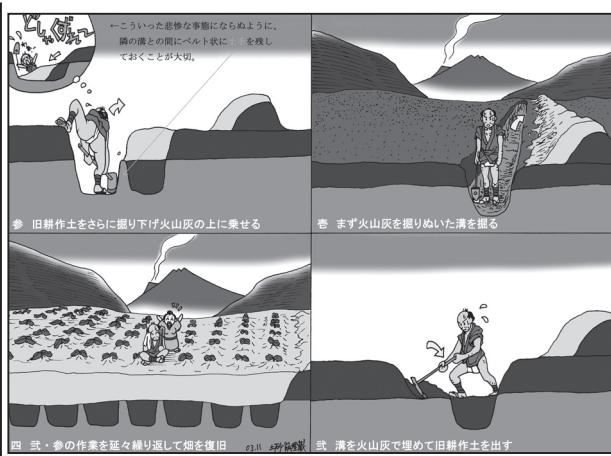


写真8 宝永火山灰廃棄遺構土層断面図

さらに「宝永五年閏月一月横野村砂除け書上げ」(史料3・4)では、田は全て埋まり、畑地も壊滅状態であるが、「砂うなへくるミ又はほりうつミ」=(砂を鋤き包み又は掘り埋め)により秋作を仕付けるとあり、田畠をいち早く復旧していく様子が記載されている。

横野山王原遺跡の調査で確認された宝永火山灰廃棄遺構は、文献に記載された土壤改良・天地返しの方法の一つである「ほりうつミ」であると捉えられる。

また、横野山王原遺跡の西方1.5kmにあたる秦野市三廻部地区^{みくるべ}所在の秦野市No.125遺跡での土層堆積では、宝永火山灰と耕作土が3~4層にわたって互層となっている状況が確認されている。これは鋤などの工具により土壤を攪拌してい



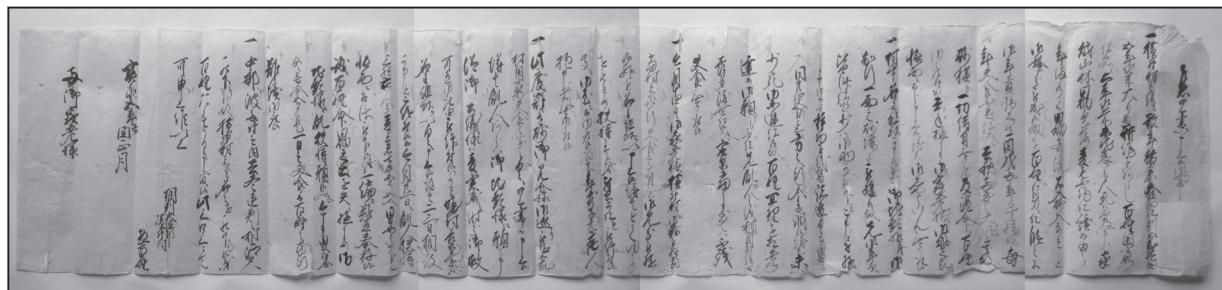
第3図 天地返しの方法 (イラスト 土砂崩埋蔵)

る状況を示し、前述の文献で鋤き包みと表現された「うなへくるミ」にあたると考えられる。

「宝永七年四月菖蒲・八沢・三廻部・柳川四か村田畠開発願い」(秦野市 1982)では、噴火3年目を経過した三廻部村においても田畠の復旧が遅れ、現状はまだ半分のみにとどまっていること、そして「うないくるみ」によって復旧した耕作地では、仕付けた麦作も砂地であるため地力がないため育ちが悪く、救済を訴えていることも把握できる。

4.まとめ

横野山王原遺跡で発見された宝永火山灰廃棄遺構は、これまでにも県西部の各遺跡を主体に同様のものが調査されているが、1万m²を超える規模での発見は特筆される。その様子は台地一面に広



史料1 宝永五年閏一月砂降りにつき横野村訴え（所蔵 横野自治会）

宝永五年閏一月砂降りにつき横野村訴え	
乍レ忽口上書以申上候御事	
一 横野村之儀ハ、數年猪鹿発行仕、別て武拾四、五年以來大分出耕作をあらし、百姓窮仕候處ニ、六年以前未地震ニも人死ハ不及申、家財山林田畠欠落、麥	砂入なぞと御檢分被成候畑を百姓自力ニ仕、段々に御
稻種一斗保有候事無く、每年夫食不足仕	年貢指上ゲ候。（宝永二年八千損仕、毎年夫食不足仕
處ニ、去秋兩度之大風、其故砂積リ、一切借用無御	一村中名主・組頭被申し候は、御地頭様も御知行一面之
座、及渴命三百姓御座候故、去年極月御家老様御越	砂場ニ被申候故、先御年貢皆済仕候ハ、少々御助可レ被レ
之節、帳面ニ申上候得共、御シヤツイニ御座候。	下と被申付、極月十四日より種物を代替、諸道具
年貢指上ゲ候。酉・戌兩年八千損仕、毎年夫食不足仕	を質二八、同廿四、五日迄方々行、金子調候得共、未少宛御未進仕候故、百姓宣理を参考、達て御願も不
一 村中名主・組頭被申し候は、御地頭様も御知行一面之	仕、先飢人之儀村内相談ニ、養身渡世仕候處ニ、最早当月至てハ、不レ残夫食無御座候。
砂場ニ被申候故、先御年貢皆済仕候ハ、少々御助可レ被レ	一 月十四日御家老様横野村へ御越被遊候節、當村之
下と被申付、極月十四日より種物を代替、諸道具	家行夫食之有無御見分被遊候様ニト、名主・組頭ヲ
を質二八、同廿四、五日迄方々行、金子調候得共、未少宛御未進仕候故、百姓宣理を参考、達て御願も不	以申上候得ば、とかくゆかりをもとめ、扶持にても奉
仕、先飢人之儀村内相談ニ、養身渡世仕候處ニ、最早当月至てハ、不レ残夫食無御座候。	公可レ仕と被仰付候處、御尤ニテ御座候得共、年寄・
子供・病人抱申者無御座候。	此度難レ有砂御見分様御巡り被遊候節、村困窮夫食之
一 月十四日御家老様横野村へ御越被遊候節、當村之	工具二口上書て申上候得ば、飢人あらバ御地頭様え願
家行夫食之有無御見分被遊候様ニト、名主・組頭ヲ	可レ申、從御公儀様ハ麦実成時分御救可レ有御座
由被仰付候ニヨリ、堀村善右衛門殿方へ名主・組頭	一升五合男女高下之帳面ニ相添、被レ候儀、一偏ニ難レ
ヲ以呈三申上候得ば、二、三日相改可レ申と被仰付	有奉レ存候。誠百姓命田畠之土を失、極月より御地
候て、今月廿一日二飢人扶持三拾六人分麦壳石七斗五	頭様え飢扶持願候處ニ、今月男二式合、女二壹合五勺、
升五合男女高下之帳面ニ相添、被レ候儀、一偏ニ難レ	是二日之夫食ミ、百姓之家行難統御座候。
有奉レ存候。誠百姓命田畠之土を失、極月より御地	一中郡波多野之内去冬判理之村々江戸へ罷下り候故、
頭様え飢扶持願候處ニ、今月男二式合、女二壹合五勺、	野村ニモ名主を罷下し候義ハ、百姓たすかり申度候。
是二日之夫食ミ、百姓之家行難統御座候。	此口上三て可申上候。以上
一中郡波多野之内去冬判理之村々江戸へ罷下り候故、	宝永五年子ノ 閏正月 相州大住郡
野村ニモ名主を罷下し候義ハ、百姓たすかり申度候。	横野村
此口上三て可申上候。以上	（所蔵 横野自治会）

史料2 宝永五月閏一月砂降りにつき横野村訴え（秦野市史 第二巻 近世資料編I）

宝永五年閏一月横野村砂除け書き上げ	
（所蔵 横野自治会）	
一 戸田庄右衛門知行所	相州大住郡
一 田畠六拾五町拾歩内	壱反四畝拾歩
一 御朱印地	横野村
一 内販武町	砂うなぐるミ又ハボリうつミ仕、當
一 三反五畝武拾五歩	可レ申候。
一 六拾四町五反五歩	以上
一 残て五拾武町五反五歩	百姓自力ニ難成奉レ存候。
一 右之通り御見分以前砂取られ并只今より段々砂取られ候て、當烟削仕付可レ申候。御尋ニ付如レ此ニ御座候。	以上
一 宝永五年子閏正月	相州大住郡横野村
一 名主 市郎右衛門	年寄 五郎兵衛
一 同 理右衛門	（所蔵 横野自治会）

史料4 宝永五年閏一月横野村砂除け書き上げ
(秦野市史 第二巻 近世資料編I)

がりを持っており、広大な面積の耕作地を、膨大な労力をかけて復旧している様子が明らかとなつた。さらに横野村の文献など各史料によって、それが裏付けられたことも大きな成果であると言える。

耕作地の「天地返し」は河川氾濫による水田などの復旧に土壤改良として用いられている手法で、岡山県備前地方や河内平野などで調査事例が

ある。また水害だけでなく、火山灰の降灰では浅間山噴火による火山灰の降灰にも用いられている事例がある。

宝永の噴火による火山灰が厚く堆積した地域では、砂置き場を設けているが、耕地面積が減少するため、その一部に土を盛り畑地を復旧する「島畑」という手法もとられている。これら「天地返し」

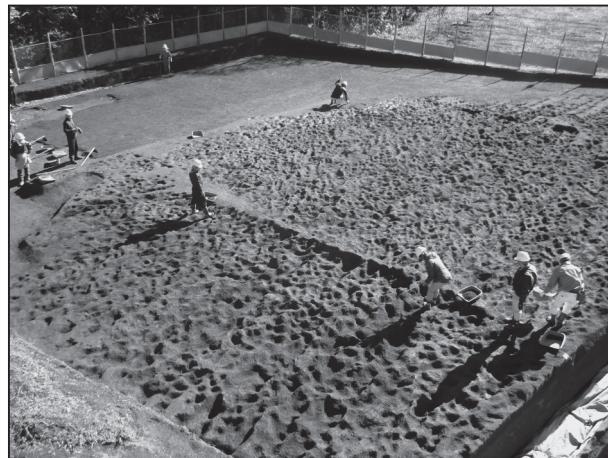


写真9 秦野市No.125遺跡 近世調査状況



写真10 秦野市No.125遺跡 近世土層堆積状況

や災害復旧の痕跡は、その起源や広域的な確認事例は少なく、今後の研究課題であると言える。

引用・参考文献

小山町史 1991「小山町史」第二巻 近世資料編 I

小山町

小山町史 1991「小山町史」第七巻 近世通史編 I

小山町

神奈川県立博物館 2006「富士山大噴火

—宝永の『砂降り』と神奈川—

北原糸子・松浦律子・木村玲欧編 2012

「日本歴史災害事典」吉川弘文館

北原糸子 2016「日本震災史 復旧から復興への歩み」

ちくま書房

御殿場市 1974「御殿場市史」1

古代中世・近世史料編 御殿場市役所

御殿場市 1982「御殿場市史」別巻 I 考古・民俗編

御殿場市役所

御殿場市 1982「御殿場市史」8 通史編上

御殿場市役所

永原慶二 2015「富士山宝永大爆発」吉川弘文館

秦野市 1996「図説秦野の歴史」秦野市

秦野市 1982「秦野市史」第二巻 近世資料 1

秦野市

神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表遺跡一覧（第1～40回）

調査・研究発表会担当

第1回 1977年6月26日 横浜市開港記念会館

1	1 横浜市	亀谷狐穴遺跡	江藤 昭
2	2 横浜市	池辺第14遺跡	坂上克弘
3	3 厚木市	林天神遺跡	杉山博久・山本守男
4	4 横浜市	殿ヶ谷遺跡	柳原松司
5	5 藤沢市	川名新林左遺跡・川名新林右遺跡	寺田兼方・中嶋 登
6	6 川崎市	下作延福ノ円横穴古墳	東原信行
7	7 横浜市	矢崎山遺跡	坂本 彰
8	8 横須賀市	鴨居養護学校遺跡	小出義治・秋元佑恭
9	9 川崎市	新作池谷遺跡	竹石健一・藤巻正信
10	10 泰野市	尾尻遺跡第II地点	柳川清彦
11	11 海老名市	本郷遺跡 SOE-II 地区	吉田草一郎・合田芳正
12	12 川崎市	影向寺遺跡（2次）	久保常晴・伊東秀吉
13	13 鎌倉市	中世遺構について	大三輪龍彦
14	14 小田原市	小田原城香沼屋敷址	金子皓彦・青木 豊
付		昭和51年1月～52年3月 神奈川県内遺跡調査概要	

第2回 1978年6月25日 横浜市開港記念会館

15	1 綾瀬市	寺尾遺跡	鈴木次郎・白石浩之
16	2 横浜市	花見山遺跡	鈴木重信・坂本 彰
17	3 藤沢市	石川山田A地点遺跡	寺田兼方・中嶋 登
18	4 横浜市	勝田第6・16遺跡	今井康博
19	5 横浜市	新羽大竹遺跡	上田 薫
20	6 横浜市	仏向町遺跡	江藤 昭
21	7 平塚市	十七ノ谷遺跡	小島弘義・明石 新
22	8 横須賀市	なたぎり遺跡C地点	小出義治・滝澤 亮
23	9 泰野市	根島島遺跡	曾根博明・福田敏一
24	10 海老名市	本郷遺跡（8次）	本郷遺跡調査団（村田正憲）
25	11 平塚市	神明久保遺跡	日野一郎・石井克己
26	12 鎌倉市	中世遺構について（若宮大路・二ノ鳥居）	齋木秀雄
27	13 小田原市	小田原城銅門跡	金子皓彦
28	14 川崎市	馬綱古墳	小川裕久・村田文夫

第3回 1979年7月1日 横浜市開港記念会館

29	1 大和市	上和田城山遺跡	中村喜代重
30	2 厚木市	下荻野子合頭遺跡	江藤 昭
31	3 横浜市	紅取遺跡	神澤勇一
32	4 横浜市	二ノ丸遺跡（チ3）	高木富士雄
33	5 横浜市	清水ヶ丘遺跡（仮称）	横浜市埋蔵文化財調査団（石井 寛）
34	6 横須賀市	鴨居上ノ台遺跡	塙田順正
35	7 横須賀市	長井小学校校庭内遺跡B地点	小出義治・滝澤 亮
36	8 横浜市	三保松沢遺跡	大川 清・四本和行
37	9 川崎市	下作延日向横穴墓群	伊東秀吉・大坪宣雄
38	10 平塚市	向原遺跡	中田 英
39	11 鎌倉市	材木座小谷	齋木秀雄

第4回 1980年6月29日 横浜市開港記念会館

40	1 大和市	一般国道246号大和・厚木バイパス地域内遺跡	中村喜代重
41	2 川崎市	菅生水沢遺跡	野中和夫・竹石健一
42	3 横浜市	神隱丸山遺跡（レ1・2）	伊藤 郎・坂本 彰
43	4 相模原市	下溝縄石遺跡	江藤 昭
44	5 相模原市	王子台遺跡	近藤英夫・望月幹夫
45	6 横浜市	折本西原遺跡	石井 寛
46	7 藤沢市	石名坂遺跡	寺田兼方・中嶋 登
47	8 横須賀市	蓼原遺跡	神明地区埋蔵文化財調査団（大塚真弘）
48	9 横浜市	富士塚遺跡群	大川 清・水野順敏
49	10 平塚市	諏訪前遺跡	日野一郎・杉山博久・井上洋一・大村浩司
50	11 横浜市	東耕地遺跡	山口暉久・柳川清彦
51	12 川崎市	新作小高台遺跡III区	増子章二
52	13 鎌倉市	極楽寺旧境内	玉林美男
53	14 小田原市	小田原城評定所曲輪跡	金子皓彦

第5回 1981年7月5日 川崎市中原市民館

54	1 大和市	一般国道246号大和・厚木バイパス地域・上草柳第3地点遺跡	中村喜代重
55	2 綾瀬市	早川天神森遺跡	岡本孝之
56	3 泰野市	平沢光明遺跡	杉山博久・松浦有一郎・設楽博己
57	4 横浜市	綱崎山遺跡	山口隆夫
58	5 特別講演	古人骨と遺跡調査	森本岩太郎
59	6 横浜市	市道高速2号線N o. 6 遺跡	桜井清彦・岡本威夫・藤井和夫
60	7 横須賀市	内原遺跡	大塚真弘
61	8 小田原市	久野下馬下遺跡	杉山博久・栗原一也・加藤成一
62	9 海老名市	久里西前田横穴墓群	野中和夫・竹石健一
63	10 平塚市	向原遺跡	後藤喜八郎
64	11 横浜市	富士塚地区遺跡群長者原遺跡	中田 英
65	12 鎌倉市	雪ノ下・南御門遺跡	大川 清・水野順敏
66	13 平塚市	四之宮下郷・上郷	河野眞知郎

第6回 1982年7月11日 川崎市中原市民館

67	1 座間市	栗原中丸遺跡	大上周三・鈴木次郎・上田 薫・服部実喜
68	2 大和市	繩文草創期遺跡（上野遺跡）	戸田哲也・曾根博明
69	3 横浜市	師岡貝塚	神澤勇一
70	4 横須賀市	久里浜伝福寺裏遺跡	赤星直忠・大塚真弘
71	5 川崎市	考古学と造形保存	森山哲和
72	6 横浜市	金程向原遺跡	竹石健二・野中和夫
73	7 横浜市	受地だいやま遺跡	奥田直栄・菊池誠一
74	8 横浜市	大原遺跡（新吉田第7）	坂本 彰・鈴木重信
75	9 横浜市	福荷前16号墳	甘粕 健・山口隆夫
76	10 小田原市	虚空藏山遺跡	大川 清・近藤真佐夫・水野順敏・斎藤啓子
77	11 平塚市	諏訪の原古墳群総世寺裏古墳	柳川清彦
78	12 鎌倉市	四之宮高林寺遺跡	小島弘義
79	13 平塚市	裏八幡西谷遺跡	山本暉久・服部実喜
80	14 鎌倉市	千葉地遺跡	手塚直樹

第7回 1983年10月30日 横浜市開港記念会館

80	1 海老名市	柏ヶ谷長ツサ遺跡	中村喜代重・諏訪間順
81	2 相模原市	橋本遺跡	青木 豊・金山喜昭・土井永好
82	3 横浜市	三の丸遺跡	伊藤 郎・今井康博・坂上克弘・倉沢和子

第1～40回 発表遺跡一覧

83	4 横浜市 特別講演	帷子峯遺跡 遺跡出土の動物遺体	鶴原靖彦・土井義行・百瀬忠幸 金子浩昌
84	5 座間市	中原・加知久保遺跡	金子浩彦・浅野 寛 大川 清・水野順敏・渡辺 務
85	6 横浜市	黒須田・大場第1地区遺跡群	河野嘉蔵 浅川利一・相原俊夫
86	7 横浜市	山王山遺跡	吉田章一郎・今津篠生
87	8 横浜市	八千代田遺跡	寺田兼方・澤田大多郎
88	9 藤沢市	大源太遺跡	伊東秀吉・竹石健二・野中和夫
89	10 藤沢市	片瀬大源太遺跡	小川裕久・玉林美男・服部実喜
90	11 川崎市	影向寺址	國平健三
91	12 鎌倉市	藏屋敷遺跡	
92	13 總額市	宮久保遺跡	
第8回 1984年7月1日 藤沢市民会館ホール			
93	1 大和市	長堀南遺跡	戸田哲也・小林義典・麻生順司
94	2 藤沢市	代官山遺跡	上田 薫・砂田佳弘
95	3 横浜市	北川貝塚	坂本 彰・鈴木重信
96	4 横浜市	能見堂遺跡	小宮恒雄・山口隆夫・石井 寛
97	5 厚木市	下依知大久根遺跡	江藤 昭・北川吉明・大塚靖夫 滝澤 亮・坂口滋皓
98	6 伊勢原市	比々多第一地区遺跡群	服部清道
99	特別講演	歴史考古学の現状私見	久保哲三・後藤喜八郎
99	7 伊勢原市	小金塚古墳	滝澤 亮・長谷川厚
100	8 横須賀市	なたきり遺跡C地点・D地点	海外海蝕洞穴
101	9 三浦市	海外海蝕洞穴	海外海蝕洞穴
102	10 總額市	宮久保遺跡	國平健三
103	11 茅ヶ崎市	西久保上町遺跡	富永富士雄・大村浩司
第9回 1985年6月2日 大和市中央文化会館ホール			
104	1 川崎市	山口台遺跡群上台遺跡	大川 清・北原實徳・地福 勉
105	2 横浜市	上行寺東やぐら群	戸田哲也・小林義典・田代郁夫
106	3 横浜市	古梅谷遺跡	小宮恒雄・伊藤 郷・坂本 彰・石井 寛
107	4 横浜市	上恩田遺跡群杉山神社遺跡	大川 清・水野順敏・近藤真佐夫・宮重俊一
108	特別講演	火山灰と考古学	町田 洋
108	5 横浜市	殿屋敷遺跡群C地区	戸田哲也・河合英夫・田村良照
109	6 鎌倉市	手広八尺遺跡	吉田章一郎・永井正憲
110	7 横須賀市	満尾遺跡	小出義治・福村 繁
111	8 藤沢市	大庭城址公園内遺跡	寺田兼方・加藤信夫・山上英蕃
112	9 大和市	月見野遺跡群上野遺跡第1地点	相田 薫
113	10 平塚市	四之宮・真土地区における最近の考古学的成果と墨書き土器	小島弘義
114	11 小田原市	小田原城二の丸中堀	塙田順正・諫訪問順
115	12 小田原市	国府津三ツ俣遺跡	市川正史
第10回 1981年7月6日 横須賀市文化会館			
116	特別記念講演	私と考古学の思い出	赤星直忠
116	1 相模原市	中村遺跡	小出義治・中川昇・伊藤恒彦
117	2 川崎市	岡上小学校遺跡	竹石健二・野中和夫・野崎欽五・澤田大多郎
118	3 横須賀市	泉遺跡	軽部 伸・中村 勉
119	4 逗子市	沼間3丁目遺跡	小出義治・大坪宣雄
120	5 鎌倉市	長谷小路南遺跡	大三輪龍彦・齋木秀雄
121	6 横浜市	金台町・星川遺跡	滝澤 亮・高木宏和
122	7 伊勢原市	坪の内久門寺遺跡	中村喜代重
123	8 海老名市	本郷遺跡G I N - E地区	江島秀木
124	9 秦野市	草山遺跡	大上周三
125	10 松田町	かわさわ古窯址群	吉田章一郎・清水信行
126	11 藤沢市	南鎌倉山遺跡	寺田兼方・中嶋 登
127	12 鎌倉市	今小路周辺遺跡(御成小学校内)	吉田章一郎・河野眞知郎
第11回 1982年8月16日 大和市中央文化会館			
128	1 鹿間市	中丸遺跡	金子浩彦・浅野 寛
129	2 横浜市	西之谷大谷遺跡	滝澤 亮・林原利明・加藤久美
130	3 横浜市	西ノ谷貝塚	坂本 彰
131	4 横浜市	三枚町遺跡	田村良照
132	5 秦野市	桜土手古墳群	日野一郎・久保哲三・吉田章一郎・小出義治・山本守男
133	6 相模原市	矢掛・久保遺跡	柳谷 博
134	7 鎌倉市	由比ヶ浜中世集団墓地遺跡	大三輪龍彦・大河内勉
135	8 小田原市	小田原城二の丸(大蓮寺排水路)	諫訪間順
136	9 松田町	松田城址	杉山幾一・安藤文一・大森則明
137	10 鎌倉市	山王堂遺跡	齋木秀雄
138	11 横浜市	赤田地区遺跡群N o. 7・9遺跡	大川 清・青木健二・吉田好孝・渡辺 務
139	12 松田町	松田町・からざわ横穴墓群	清水信行・村上 始
140	13 横須賀市	横須賀市・ひる畠遺跡	浅川利一・河合英夫
141	14 秦野市	秦野市・砂田台遺跡	宍戸信悟
142	15 横浜市	北側表の上遺跡(ル14)	倉沢和子・坂上克弘・坂本 彰・鈴木重信
第12回 1983年9月4日 平塚市中央公民館			
143	1 平塚市	権現堂遺跡	日野一郎・小島弘義・青地俊朗
144	2 中郡二宮町	倉上横穴墓群	栗原一也・矢納健志・上原正人・井辺一徳
145	3 小田原市	小田原城下・欄干橋遺跡(外郎邸)	諫訪間順
146	4 厚木市	吾妻坂古墳	江藤 昭・吉田 寿
147	5 厚木市	宮の里遺跡	浅川利一・河合英夫・田村良照・迫 和幸
148	6 海老名市	本郷遺跡第20次(K E地区)	稲生典太郎・合田芳正
149	7 藤沢市	高倉溝ノ上遺跡	寺田兼方
150	8 鎌倉市	玉綱城遺跡	大河内勉
151	9 横浜市	金沢文庫遺跡	山本暉久・服部実喜
152	10 横浜市	上台の山遺跡	坂上克弘
153	11 大和市	長塙北遺跡	滝澤 亮・小池 啓
154	12 相模原市	下溝遺跡	岡本 勇・三ツ橋和正
155	13 茅ヶ崎市	居村(B)低湿地遺跡	富永富士雄・大村浩司
第13回 1984年9月3日 川崎市市民ミュージアム			
156	1 藤沢市	慶應義塾藤沢校地内遺跡	小林謙一・関根唯光・五十嵐彰
157	2 川崎市	黒川地区遺跡群・宮添遺跡・他の遺跡	玉口時雄・大坪宣雄・碓井三子
158	3 藤沢市	ナデッ原遺跡	戸田哲也
159	4 寒川町	県営団地内遺跡	戸田哲也・小林義典・迫 和幸
160	5 伊勢原市	三ノ官・官ノ前遺跡	難波 明・諫訪間伸
161	特別講演	考古学調査と物理探査	坂山利彦
161	6 横浜市	大柳杉山神社遺跡	伊藤 郷・石井 寛
162	7 厚木市	及川遺跡	日野一郎・江藤 昭・吉田 寿
163	8 横浜市	上の山遺跡	坂上克弘・小宮恒雄
164	9 小田原市	三ツ保遺跡(F地点)	山本暉久・谷口 肇
165	10 海老名市	大谷向原遺跡(B地区)	滝澤 亮・加藤久美
166	11 鎌倉市	二階堂国指定永福寺跡	福田 誠
167	12 小田原市	史跡小田原城二の丸中堀	塙田順正・大島慎一
第14回 1990年9月30日 相模原市民ホール			
168	1 清川村	宮ヶ瀬遺跡群の先史時代遺跡	鈴木次郎・砂田佳弘
169	2 相模原市	勝坂遺跡	青木 豊・内川隆志
170	3 秦野市	寺山遺跡	安藤文一・及川一茂
171	4 平塚市	王子ノ台遺跡(西区)	常木 聰・秋田かな子・田尾誠敏
172	5 藤沢市	慶應義塾藤沢校地内遺跡	五十嵐彰・菅沼圭介
173	6 逗子市	池子遺跡群	山本暉久
174	7 横浜市	權田原遺跡	鈴木重信・倉沢和子・小宮恒雄・坂上克弘・坂本 彰
175	8 茅ヶ崎市	石神遺跡	富永富士雄・小竹実佳子
176	9 大磯町	北中尾横穴墓群	鈴木一男・国見 徹
177	10 海老名市	相模国分尼寺跡	滝澤 亮・林原利明
178	11 平塚市	新町遺跡	日野一郎・明石 新・青地俊朗・若林勝司
179	12 鎌倉市	下馬周辺遺跡	大河内勉
180	13 小田原市	小田原城三の丸閑連遺跡	戸田哲也・小林義典

第15回 1991年9月29日 横浜市教育文化ホール

特別講演	港北二ユータンの調査と遺跡群研究	岡本 勇
181 1 清川市	宮ヶ瀬遺跡群北原（N o. 9）遺跡長福寺址	市川正史・長谷川正
182 2 箕輪町	元箱根石仏・石塔群	伊藤 潤
183 3 鎌倉市	由比ヶ浜中世集団墓地遺跡	原 広志
184 4 芊ヶ崎市	浜之郷石原B遺跡	大村浩司・宮下秀之
185 5 川崎市	県史跡馬絹古墳	服部隆博
186 6 横浜市	上矢部町富士山古墳	佐藤安平・伊藤 郎
187 7 綾瀬市	神崎遺跡	小瀧 勉・村上吉正
188 8 湘南原市	池子遺跡群N o. 1~A地点弥生時代旧河道	山本暉久
189 9 相模原市	田名塩原遺跡群	瀧澤 亮・小池 聰
190 10 横浜市	柄沢遺跡群1~E・F地点（縄文時代草創期）	戸田哲也
191 11 綾瀬市	上土棚遺跡第3次	中村喜代重

第16回 1992年9月27日 横浜市開港記念会館

192 1 厚木市	東町遺跡	平本元一
193 2 鎌倉市	今小路西遺跡（御成小学校内）	河野眞知郎
194 3 山北町	河村城跡	石丸 熙・閑 恒久・安藤文一
195 4 鎌倉市	大倉幕府周辺遺跡群	馬淵和雄
196 5 海老名市	相模国分寺跡 相模国分尼寺	瀧澤 亮・須田 誠
197 6 湘南原市	池子遺跡群N o. 4 地点	長谷川厚・山本暉久
記念講演	金海市大成洞古墳の調査	申 敏澈
198 7 伊勢原市	石田・細屋遺跡	中村喜代重
199 8 寒川市	倉見日本鉄業（株）新ひかり社宅内遺跡	木村 勇・田村良照
200 9 泰野市	東開戸遺跡	安藤文一
201 10 小田原市	小田原市内における関東ローム層の調査	山口剛志・諫訪間順・戸田哲也・小林義典
202 11 綾瀬市	吉岡遺跡群	白石浩之・砂田佳弘

第17回 1993年9月19日 秦野市文化会館

203 1 篠津市	南葛野遺跡	須田英一
204 2 大井町	第一東海自動車道N o. 35遺跡	西川修一・天野賢一・伊藤宏憲
205 3 小田原市	久野2号墳	山内昭二・野崎欽五・西山博章
206 4 秦野市	太岳院遺跡	大倉 潤
記念講演	中世城館遺跡について	石丸 熙
207 5 海老名市	相模国分寺跡	須田 誠
208 6 三浦市	新井城跡	武藤康弘
209 7 平塚市	山王A遺跡	日野一郎・上原正人
210 8 横浜市	觀福寺北遺跡（関耕地区）	浅川利一・田村良照
211 9 横須賀市	小荷谷遺跡	中三川昇
212 10 清川村	宮ヶ瀬遺跡群表の屋遺跡	近野正幸・岩崎 修
213 11 横浜市	網崎山横穴墓群	鹿島保宏・鈴木重信

第18回 1994年9月25日 横浜市開港記念会館

214 1 大和市	月見野遺跡群上野遺跡第5・6地点	瀧澤 亮・小池 聰
215 2 伊勢原市	第一東海自動車道N o. 14（三ノ宮・下谷戸）遺跡	宍戸信悟・立川直之・松田光太郎・三瓶裕司
216 3 南足柄市	塚田遺跡	安藤文一
217 4 平塚市	原口遺跡	長谷川厚・長岡文紀
218 5 横須賀市	大塚古墳群（吉井・池田地区遺跡群）	玉口時雄・大坪宣雄・北爪一行
219 6 横浜市	大場横穴墓群F・G・H横穴墓群	大川 清・吉田好孝・渡邉 务
記念講演	南閨東テラコカラ見た天変地異期	上杉 陽
220 7 川崎市	下原古墳群	北原實徳
221 8 海老名市	国分尼寺北方遺跡	伊東秀吉・大坪宣雄・荻上由美子・小林克利
222 9 芊ヶ崎市	居村B・前ノ田遺跡	富永富士雄
223 10 鎌倉市	若宮大路周辺遺跡群	田代都夫・原 広志・佐藤仁彦
224 11 小田原市	本町・小田原城三の丸堀	戸田哲也・小林義典

第19回 1995年9月23日 川崎市中原市民館

225 1 相模原市	横山5丁目遺跡	大坪宣雄・長澤邦夫
226 2 清川村	宮ヶ瀬遺跡群 北原（N o. 10・11北）遺跡	市川正史・能嶋政義・恩田 勇・富永樹之
227 3 横浜市	阿久和宮腰遺跡	戸田哲也・中山 良
228 4 三浦市	油壺遺跡	須田英一
229 5 篠津市	若尾山遺跡	織 実
230 6 伊勢原市	第一東海自動車道N o. 14（三ノ宮・下谷戸）遺跡	宍戸信悟・飯田純友・宮坂淳一・櫻井真貴・三瓶裕司・畠中俊明
記念講演	神奈川県の「地震考古学」	上杉進二
231 7 川崎市	久本横穴墓群	後藤喜八郎
232 8 平塚市	構之内遺跡	日野一郎・上原正人
233 9 鎌倉市	国指定永福寺跡	福田 誠
234 10 山北町	河村城関連遺跡	安藤文一
235 11 小田原市	三の丸小学校内遺跡（小田原城三の丸・藩校集成館跡）	戸田哲也・小林義典・香川達郎・中村哲也

第20回 1996年9月23日 茅ヶ崎市市民文化会館

236 1 芊ヶ崎市	西久保遺跡群	富永富士雄・大村浩司・宮下秀之・藤井秀男
237 2 小田原市	小田原城下・櫛橋町遺跡第IV地点	山口剛志
238 3 海老名市	N o. 1 遺跡	瀬田哲夫
239 4 鎌倉市	北条小町痕跡（泰時・時頼邸）	馬淵和雄
記念講演	古代文字資料の現状について 古代の相模を中心として	平川 南
240 5 横浜市	藪根不動原遺跡	横山太郎
241 6 平塚市	沢狭遺跡	戸田哲也・小林義典・香川達郎
242 7 小田原市	羽根尾横穴墓群	田村良照
243 8 三浦市	赤坂遺跡	中村 勉
244 9 津久井町	青根馬渡遺跡群N o. 4 遺跡	河野喜英・池田 治
245 10 横須賀市	大塚東遺跡	大坪宣雄・北爪一行
246 11 芊ヶ崎市	白久保A遺跡	松田光太郎・田村裕司・井辺一徳・阿部友寿

第21回 1997年9月14日 小田原市中央公民館

247 1 篠津市	用田バイパス関連遺跡群	栗原伸好
248 2 相模原市	田名向原N o. 4 遺跡	麻生順司
249 3 小田原市	御組長屋（N o. 101）遺跡第II地点	戸田哲也・小林義典
250 4 三浦市	松輪間口東海飢渴洞穴遺跡	朝持輝久
251 5 小田原市	千代仲の町遺跡第IV地点	諫訪間順・手島咲子
記念講演	戦国史研究と考古学の成果 NHK大河ドラマ「秀吉」の時代考証の経験から	小和田哲男
252 6 厚木市	船子・宮の前遺跡	中村喜代重
253 7 川崎市	久地西前田横穴墓群	竹石健二・澤田大多郎・野崎欽五・野中和夫
254 8 川崎市	橘橋御衙門遺跡	河合英夫
255 9 鎌倉市	由比ガ浜南遺跡	齋木秀雄
256 10 小田原市	史跡小田原城跡二の丸住吉堀	塙田順正・大島慎一
257 11 平塚市	高間原遺跡	秋田かな子・田尾誠敏・嶺岸維津子・宮田明子
258 12 小田原市	小田原城下町遺跡 誌上発表	小林竜一・上石統子・諫訪間順
259 13 海老名市	史跡相模国分寺跡僧房跡 誌上発表	須田 誠

第22回 1998年11月15日 鎌倉芸術館

260 1 大和市	大和市（佐）酢水池内遺跡	麻生順司
261 2 城山町	新小倉橋関連遺跡	櫻井真貴・畠中俊明
262 3 川崎市	多摩区N o. 61遺跡	吳地英夫
263 4 南足柄市	五反畠遺跡	安藤文一
264 5 鎌倉市	史跡東勝寺跡	菊川英政
記念講演	東勝寺跡によせて 遺跡が呼び覚ます太平記の世界	永井路子
265 6 二宮町	天神谷戸遺跡	中田 英・高村公行・峰 治・村上吉正

第1～40回 発表遺跡一覧

266	7	鎌倉市	若宮大路周辺遺跡群	宮田 真
267	8	小田原市	小田原城三ノ丸東堀跡	諫訪間順
268	9	鎌倉市	中世鎌倉における発掘調査の現状と課題	齋木秀雄
269	10	小田原市	久野下馬下遺跡第IV地点 誌上発表	小林義典
270	11	鎌倉市	宇津宮辻子幕府跡 誌上発表	原 廣志

第23回 1999年9月12日 伊勢原市市民文化会館

271	1	綾瀬市	上土棚筆山遺跡 相模野第III期の遺跡群と小規模遺跡	矢島國雄・小滝 勉
272	2	伊勢原市	田中・万代遺跡 水辺に営まれた縄文時代・古墳時代の集落	恩田 勇・井辺一徳
273	3	小田原市	中里遺跡第I地点 関東最古の弥生農耕集落	戸田哲也
274	4	逗子市	池子桙敷戸遺跡 15基の方形周溝墓群を検出	若松美智子
		講演	伊勢原市の古墳 長柄・桜山第1・第2号墳	間根孝夫
275	5	葉山市・逗子市	神奈川県最大級の前方後円墳	樹洞規影
276	6	厚木市	ホウダイヤマ遺跡 全長65mの前方後円墳と大型壺形土器	平本元一
277	7	平塚市	広川・公所遺跡群 小銅鐸を出土した内沢遺跡を主体に	大川 清・渡辺 務・宮重俊一・増田 誠
278	8	平塚市	真田・北金目遺跡群 弥生時代後期～平安時代の水場遺構を検出	若林勝司
279	9	伊勢原市	成瀬第二地区遺跡群 古墳時代前期の拠点集落と中世城郭の調査	香川達郎
280	10	津久井町	津久井城址御屋敷跡 戦国居館と近世屋敷の調査	近藤英夫・小柳美樹・野口浩司・伊藤梨香・野坂優介・山根 航
281	11	箱根町	箱根旧街道宿一里塚 近世の街道に関する遺跡の整備	伊藤 潤

第24回 2000年10月1日 鶴見大学会館

			神奈川県考古学会設立10周年記念大会	
282	1	藤沢市	N o. 106遺跡 縄文時代初頭の古環境と河川利用	桜井准也・増渕和夫・松葉礼子
283	2	大和市	上草柳第3地点南遺跡 先史時代における人と火の関わり	折笠 昭・曾田信行・上小澤桂一
		記念講演	神奈川県下の貝塚調査の思い出	江坂輝彌
284	3	小田原市	羽根尾貝塚	戸田哲也・舩 弘子
285	4	綾瀬市	道場遺跡 地蔵山遺跡群	矢島國雄・小滝 勉
286	5	逗子市	逗子市No. 118遺跡を主体として 高田遺跡	土屋浩美
287	6	寒川市	方形周溝墓について	中村喜代重
288	7	平塚市	真田・北金目遺跡群 平成11年度の調査成果と炭化米	上原正人・川端清倫
289	8	厚木市	登山古墳群	平本元一
290	9	秦野市	西大竹尾尻遺跡群	霜出俊浩・須田弥生
291	10	茅ヶ崎市	香川・下寺尾遺跡群下寺尾地区	中村哲也
292	11	鎌倉市	北条小町邸	森 孝子
293	12	箱根町	大芝遺跡 箱根神社における考古学的調査	伊藤 潤・谷口 肇
294	13	逗子市・葉山町	長柄・桜山第1・第2号墳 範明確認調査について	柏木善治
295	14	川崎市	千年伊勢山古墳 武藏国橘樹郡衙推定地の確認調査	河合英夫

第25回 2001年10月13日 平塚市立中央公民館

296	1	横須賀市	打木原遺跡 始良In火山灰降灰以前の土坑群の調査	佐藤明生
297	2	藤沢市	N o. 211遺跡 旧石器時代の石器石材採取・選別地	桜井准也・松山敬一朗・鈴木啓介・中川真人
298	3	横浜市	稲荷山貝塚 縄文時代後期の貝塚と集落	松田光太郎
299	4	横浜市	杉田貝塚 縄文時代中期～晩期にわたる貝層	山田仁和
300	5	平塚市	真田・北金目遺跡群 平成12年度の調査成果と前方後円型周溝墓	中嶋由紀子・渡辺清史
		記念講演	卑弥呼は何處で眠っているか 磐墓古墳の墳丘側面観察を踏まえて	苅谷俊介
301	6	海老名市	秋葉山古墳群第1～3号墳 関東地方最古級の古墳群・第1号～3号墳の発掘調査	押方みはる・山口正憲
302	7	葉山町	三ヶ岡遺跡 砂丘に構築された古墳時代集落と平安時代の製塙遺構	(財)かながわ考古学財団(長谷川厚)
303	8	小田原市	永塚下り畠遺跡 道路遺構を中心	齋木秀雄・降矢順子
304	9	秦野市	東田原中丸遺跡 中世の波多野氏居館跡と考えられる建物群	霜出俊浩
305	10	鎌倉市	鎌倉大仏開拓 大仏殿遺構を確認	福田 誠
306	11	横須賀市	向井狩監正方夫妻の墓 構之内遺跡第4地点	中三川昇
307	12	平塚市	古代の道路状遺構 史跡建長寺境内	大野 悟
308	13	鎌倉市	客殿建設用地 平塚市の遺跡概要	宮田 真
309	14	平塚市	平塚市の地形と遺跡 平塚の地形と遺跡	平塚市教育委員会

第26回 2002年11月24日 横須賀市文化会館

		記念講演	赤星直忠 假ばれる研究者の姿正	川上久夫
310	1	綾瀬市	上土棚南遺跡 遺物廢棄帯を伴う縄文時代後期集落	矢島國雄・小滝 勉
311	2	横須賀市	佐島の丘遺跡群高原・高原北遺跡 弥生時代後期から古墳時代初頭の大規模集落	横山太郎
312	3	中井町	比奈羅中屢數横穴墓群 急傾斜崩壊対策工事に伴う調査	三瓶裕司
313	4	寒川市	宮山中里遺跡 自然堤防上で確認された後期古墳群	市川正史・井澤 純・吉田政行・渡辺 外
314	5	逗子市	延命寺遺跡 9世紀代の大型掘立柱建物址	松山敬一朗
315	6	茅ヶ崎市	国指定史跡旧相模川橋脚 史跡称名寺境内旧伽藍跡	大村浩司
316	7	横浜市	平成12・13年度の確認調査	(財)横浜市ふるさと歴史財団
317	8	津久井町	津久井城跡 戦国居館と近世屋敷の調査	野口浩史・近藤英夫

318	9	小田原市	小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡 元禄期前後の武家屋敷の調査	木村吉行・井関文明
319	10	小田原市	小田原城縦構伝張寺西第I地点 城下きつての障子堀	山口剛志
320	11	横須賀市	猿島遺跡群 近代の土木技術を伝える洋式砲台の調査	野内秀明
321	12	秦野市	稻荷木遺跡 縄文時代中期夫婦の柄鏡（数石）住居跡	天野賢一
第27回 2003年10月19日 横浜市開港記念会館				
322	1	藤沢市	遠藤山崎遺跡 縄文時代草創期前半に属す遺物群の集中出土	戸田哲也
323	2	川崎市	万福寺遺跡群No.1遺跡 草創期前半隆起縄文期の遺物集中区	北原實徳・今泉克己
324	3	横浜市	茅ヶ崎・西ノ谷貝塚 古鶴見湾岸の縄文前期貝塚	坂本 彰
325	4	平塚市	真田・北金目遺跡群 縄文時代後期の水場遺構	上原正人
326	5	川崎市	大蔵地区遺跡群元石川I-1遺跡 弥生時代後期朝光寺原式土器出土の小規模な環濠集落を確認	宮重俊一
記念講演 AMS14C年代測定を利用した縄文時代研究の新展開				
327	6	茅ヶ崎市	下寺尾西方A遺跡 弥生時代中期の環濠集落と高座郡衙の発見	宍戸信悟・村上吉正
328	7	厚木市	飯山久保古墳群 上久保第1号墳・第2号墳・第3号墳の調査	平本元一・中村喜代重
329	8	鎌倉市	無量寺跡 鎌倉時代末期の鎌倉式庭園構築	森 孝子
330	9	鎌倉市	五合桥遺跡（伝法寺跡）	福田 誠
331	10	小田原市	史跡小田原城跡馬屋曲輪	大島慎一
332	11	三浦市	ヤキバの塚遺跡 近現代考古学の可能性	藤山龍造・渡辺直哉・朽木 量・須田英一・櫻井準也
333	12	厚木市	神の山古墳 誌上発表	北條芳隆
第28回 2004年10月3日 横浜市開港記念会館				
334	1	厚木市	芹沢久保C遺跡・D遺跡 縄文時代中期の集落	高橋 和
335	2	横浜市	矢崎山西遺跡 縄文時代中期・弥生～古墳時代の環濠集落・古代	武部善充
336	3	茅ヶ崎市	小出川閑連遺跡 茅ヶ崎市七堂伽藍・寒川町No.76遺跡	小川岳人
337	4	鎌倉市	大倉幕府周辺遺跡群 弥生時代集落と大倉幕府跡	齋木秀雄
338	5	横須賀市	かろうと山古墳 切石組合せ箱式石棺を主体部とする終末期古墳の調査	稻村 繁
339	6	厚木市	中依知遺跡 桜樹古墳群と横穴墓、中世地下式坑の調査	植山英史・加藤久美
340	7	海老名市	社家宇治山遺跡 中世の居館及び古墳時代前期の玉造り工房・方形周溝墓群	柏木善治・村上吉正・渡辺清史
341	8	平塚市	湘南新道閑連遺跡 六ノ城遺跡における平安時代の連房式鍛冶工房を中心として	柏木善治
342	9	山北町	河村城跡 県内最大である中世山城の整備調査	安藤文一
343	10	小田原市	小田原城下本町遺跡第III地点 小田原城最古の障子堀	諫訪問順・北条ゆうこ
344	11	横浜市	第二代横浜駅 短命に終わった大正期の煉瓦造駅舎	青木祐介
345	12	城山町	川尻石器時代遺跡 縄文時代中期～後期の石造遺構	中川真人
346	13	海老名市	秋葉山古墳群第4号墳 平成15年の確認調査から	向原崇英
第29回 2005年10月23日 横浜市歴史博物館				
347	1	秦野市	平沢同明遺跡 0404地点・0405地点	戸田哲也
348	2	横浜市	北門1号墳 古墳時代後期古墳群	滝澤 亮・滝澤友子
記念講演 横浜市大塚最勝土遺跡の調査研究・保存について				
349	3	厚木市	吾妻坂古墳 相模川水系の古墳時代像をめぐって	西川修一
350	4	海老名市	相模国分寺跡 推定鐘楼跡・寺院地北辺部の調査	須田 勉
351	5	川崎市	推定樹籬館（千年伊勢山台）遺跡 8次にわたり範囲確認調査の成果	河合英夫
352	6	平塚市	湘南新道閑連遺跡 坪ノ内遺跡における中世土壙群・奈良時代の庭付大型掘立柱建物を中心として	柏木善治
353	7	鎌倉市	北条義時法華堂跡 鎌倉幕府第二代執権北条義時の墓堂跡	松尾宣方
354	8	津久井町	津久井城跡 戦国時代居館と江戸時代初期屋敷地の虎口調査	近藤英夫・野口浩史・佐藤昌彦・米山あかね
355	9	小田原市	三の丸元藤堀 吉田浩明	
第30回 2006年11月19日 横浜市開港記念会館				
356	1	平塚市	万田貝殻坂貝塚 縄文時代前期の貝塚	戸田哲也・中村哲也
357	2	小田原市	千代南原遺跡 前期古墳の周溝と古代寺院の基壇の調査	渡邊千尋
358	3	鎌倉市	若宮大路周辺遺跡群 鎌倉市小町一丁目27番18・22・38地点	宮田 真
記念講演 テーマ発表				
第30回 神奈川県遺跡調査研究発表会を迎えて 神奈川の遺跡調査をめぐる30年				
近代 近代遺跡の調査事例と今後の課題				
近世 近世考古学の幕開けと発展				
中世 中世の遺跡と調査の歩み				
古代 官衙・国分寺・集落の調査成果と課題				
古墳時代 代表的な高塚古墳の調査成果と位置づけ				
弥生時代 神奈川県西部地域を中心とした弥生時代後期の土器研究				
縄文時代 貝塚からの情報				
旧石器時代 石器の遺跡間接合と住居状遺構の発見				

第1～40回 発表遺跡一覧

359	4	三浦市	がんだ畠遺跡 旧石器時代の土坑と縄文時代後期集落の調査	誌上発表	山田仁和
360	5	横浜市	下総東貝塚 縄文時代前期の貝塚	誌上発表	戸田哲也・迫 和幸
361	6	横浜市	元町貝塚 縄文時代前期末葉～中期初頭の貝塚を中心として	誌上発表	橋本昌幸
362	7	平塚市	湘南新道関連遺跡 廟の付された大型掘立柱建物と連房式鍛冶工房を中心として	誌上発表	柏木善治
363	8	茅ヶ崎市	小出川河川改修関連遺跡群 古代と弥生時代の河道跡	誌上発表	小川岳人
364	9	川崎市	上麻生日光台遺跡 古代の大型掘立柱建物跡群	誌上発表	渡辺 務・宮重俊一
365	10	小田原市	(仮)早川石切丁場跡 近世初頭、江戸城築城の石垣用材生産遺跡の調査	誌上発表	三瓶裕司・依田亮一・新開基史・永井 淳
第31回 2008年1月20日 横浜市歴史博物館					
366	1	横浜市	觀音松古墳 前期大形前方後円墳の外部施設の調査		安藤広道
367	2	逗子市・葉山町	史跡長柄桜山古墳群第1号墳 史跡整備に伴う発掘調査		山口正憲・佐藤仁彦
368	3	横須賀市	大津古墳群 埴輪を伴い、横穴式石室を主体部とする前方後円墳		稻村 繁
369	4	伊勢原市	日向・洗水遺跡 古墳時代後期の横穴式石室と銀象嵌大刀		立花 実
370	5	相模原市	津久井城跡(馬込地区) 旧石器時代の石器製作跡		島中俊明
371	6	秦野市	太岳院遺跡 縄文時代後期・晩期の墓域と集落		近江屋成陽
372	7	海老名市	河原口坊中遺跡(相模川河川改修事業) 相模川自然堤防上の弥生時代の遺跡		宮井 香
373	8	小田原市	愛宕山遺跡 第II地点 大型掘立柱建物址の調査		浅賀貴広
374	9	鎌倉市	今小路西遺跡 武家屋敷跡と古代以降の調査		菊川英政
375	10	小田原市	大久保弥六郎跡第III地点 小田原城内の武家屋敷		小山裕之
376	11	厚木市	小野公所遺跡第3地点・A地区 玉川上流域における後期古墳関連構造の調査	誌上発表	林原利明
377	12	高座郡寒川町	岡田西湖内遺跡 岡田古墳群の調査	誌上発表	小林克利
378	13	横浜市	(仮称)元町水屋敷遺跡 近代の埋設管確認調査	誌上発表	青木祐介・鈴木重信
第32回 2008年10月25日 横浜市歴史博物館					
379	1	横浜市	山下居留地遺跡 近代の外国商館跡と街路		天野賢一
380	2	横浜市	神奈川台場 確認調査2件 表海面西側と西取渡り道の調査		鈴木重信・山田光洋
381	3	藤沢市	東海道藤沢宿(藤沢市No.78遺跡) 近世・近代の宿場町		宮田 真
382	4	相模原市	国指定史跡川尻石器時代遺跡 縄文時代後期後半の中央窪地型集落の形成		中川真人
383	5	海老名市	河原口坊中遺跡 相模川左岸の低地遺跡		加藤久美
384	6	川崎市	野川神明社南遺跡 弥生時代の大型住居群		小池 聰・浅賀貴広
385	7	伊勢原市	沼目・玉王原遺跡第XI地点 古墳時代後期から平安時代の大規模集落		中村哲也
386	8	横須賀市	乗越遺跡 奈良時代の瓦・須恵器窯跡		中三川昇
387	9	伊勢原市	下柳屋・丸山遺跡 中世城郭の調査		香川達郎・渡辺 外・諫訪間伸
388	10	秦野市	寺山遺跡2007-01地点 宝永地震の痕跡		霜出俊浩
第33回 2009年10月17日 横浜市歴史博物館					
小特集：神奈川の歴史を守る～保存目的の調査～					
389	1	綾瀬市	神崎遺跡 国指定史跡に向けて20年ぶりの発掘調査		井上洋一
390	2	鎌倉市	大町积迦堂口遺跡 中世における谷戸の土地利用		永田史子
391	3	山北町	河村城跡 小田原本北条氏の山城から発見された障子堀		加藤拓也
392	4	横浜市	日吉台地下壕 軍令部第三部地下壕出入口施設の発掘調査		安藤広道・大坪宣雄・山田仁和
393	5	伊勢原市	西富岡・向畑(伊勢原市No.160)遺跡 類例のない縄文時代の「帯状粘土列」		新開基史
394	6	川崎市	早野上ノ原遺跡 縄文時代中期を中心とした集落		大坪宣雄・山田仁和
395	7	小田原市	小田原城跡八幡山遺構群(第4次調査) 中世小田原城最大級の障子堀		吉田智哉
396	8	横浜市	神奈川台場(第2次調査) 西取渡り道の遺存状況と内部構造		山田光洋
第34回 2010年11月21日 横浜市歴史博物館					
神奈川県考古学会設立20周年記念講演					
397	1	横浜市	三ツ沢貝塚 沢渡55番80号地点の調査		安井千栄子・今泉克己・柴田英行
398	2	川崎市	野川神明社南遺跡第2次調査 弥生時代の大型住居群・古代の掘立柱建物群		浅賀貴広
399	3	秦野市	神奈川県指定史跡 二子塚古墳 鏡装大刀を副葬する前方後円墳		霜出俊浩
400	4	小田原市	小田原城下筋違橋町遺跡 第V地点 町屋の土水施設と旧東海道の調査		渡辺千尋
		記念講演	神奈川県考古学会の発足前夜と今後への期待		村田文夫
		記念講演	神奈川県考古学会と埋蔵文化財 新たな遺跡保護と活用を目指して		大村浩司
		記念講演	神奈川県考古学会の未来へ向けて 講演を受けて		中村若枝
第35回 2011年11月26日 川崎市市民ミュージアム					
401	1	大和市	月見野遺跡群 上野遺跡第14地点 旧石器時代槍先形尖頭器製作址の調査		小池 聰
402	2	相模原市	津久井城跡 荒久地区 縄文時代早期後半の集落址と中世城館の調査		鯉淵義紀
403	3	横浜市	仏向貝塚・仏向遺跡・仏向町遺跡		阿部友寿
404	4	伊勢原市	西富岡・向畑遺跡 谷底に作られた縄文時代の「水さらし場」		新山保和
405	5	南足柄市	五反畑遺跡 縄文時代後期～晩期の火山灰の分析		杉山浩平・金子隆之

406	6	川崎市	下原遺跡 第2地点の調査	大坪宣雄
407	7	海老名市	河原口坊中遺跡 相模川河川改修事業・さがみグリーンライン事業（自転車道整備事業）に伴う発掘調査	池田 治
408	8	鎌倉市	下馬周辺遺跡 鎌倉警察署建設地点の調査	植山英史
409	9	小田原市	小田原城八幡山古郭東曲輪第II地点 中世小田原城の石積みと階段状道路遺構の調査	渡辺千尋
410	10	横浜市	三溪園旧松風閣 明治時代の煉瓦造建築 原三溪の養父原善三郎の別邸跡	青木祐介・鈴木重信
第36回 2012年11月17日 横浜市歴史博物館				
411	1	相模原市	小倉橋西遺跡 旧石器時代ナイフ形石器製作址の調査	渡辺 外
412	2	寒川市	岡田西河内遺跡 弥生時代の集落跡	小林克利・横山太郎・杉本靖子
413	3	伊勢原市	高森・富ノ越遺跡第3地点 弥生時代中期から古墳時代前期集落跡の調査	小池 聰
414	4	横須賀市	八幡神社遺跡 古墳時代の石棺墓と土坑墓群	中三川昇
415	5	小田原市	永塚北畠遺跡第XI地点 美濃国刻印須恵器が関東地方で初めて出土	土屋了介
416	6	鎌倉市	大倉幕府周辺遺跡 古代から中世初頭の莊柄地域の様相	齋木秀雄
417	7	川崎市	下作延巳ノ谷遺跡第8次調査 古墳時代後期から平安時代にかけての集落遺跡と中世建物跡	大坪宣雄
418	8	伊勢原市	上粕谷・石倉中遺跡 大山道周辺の柵掘調査	天野賢一
419	9	小田原市	小田原城三の丸幸田口跡第VII地点 江戸中後期遺構群および江戸時代前期石垣付堀と戦国期障子堀の調査	太田雅晃
420	10	横須賀市	小原台堡壘跡 近代軍事施設の調査	齊藤真一
421	11	相模原市	小倉橋西遺跡 相模川上流部の細石刃石器群 誌上発表	中川真人
422	12	川崎市	上麻日光台遺跡第IV地区 縄文時代中期の環状集落の一部と古代の大型特殊遺構の調査 誌上発表	浅賀貴広
第37回 2013年10月12日 横浜市歴史博物館				
中世小特集				
423	1	横浜市	新羽浅間神社遺跡 弥生時代前期末～中期初頭の土器棺墓の調査	小西絵美
424	2	横浜市	星川桜ヶ丘遺跡 帷子川流域の古墳と集落	滝澤 亮
425	3	横浜市	馬場綿内谷遺跡 縄文時代前期の集落址と古墳時代後期の集落址	小川岳人
426	4	茅ヶ崎市	本村居村B遺跡第4次調査 平安時代の水田跡と出土木簡	押木弘己
427	5	伊勢原市	国指定重要文化財 宝城坊本堂下の調査 現本堂以前の建物痕跡の有無、造成事業の確認調査	井出智之
428	6	相模原市	津久井城跡荒久地区 中世戦国山城の外縁部の調査	鯉渕義紀
429	7	伊勢原市	子易・大坪遺跡 大山山麓に展開する中世の大型建物跡の調査	井辺一徳
430	8	小田原市	史跡小田原城跡 御用米曲輪 戦国期小田原城の礎石建物と庭状遺構の発見	佐々木健策
431	9	相模原市	津久井城跡城坂曲輪群 市民協働による測量・発掘調査	中川真人・江川真澄
第38回 2014年10月26日 横浜市歴史博物館				
432	1	相模原市	川尻中村遺跡第5地点 縄文時代中期環状集落址居住域の調査	大川康裕・青木雄大
433	2	横須賀市	船久保遺跡 縄文時代早期前葉の陥し穴群と弥生時代住居跡の調査	戸田哲也
434	3	寒川市	宮山中里遺跡 相模川東岸下流域に展開する弥生時代の環濠集落	井関文明
435	4	横須賀市	矢ノ津坂遺跡 戦略的要所に位置する集落	田村良照
436	5	三浦市	雨崎洞穴 三浦半島の弥生黎明期を告げる洞穴遺跡の調査	中村 勉
437	6	三浦市	勝谷遺跡 砂丘につくられた墳丘を持たない墳墓群	
438	7	伊勢原市	伊勢原市No.163遺跡 大山山麓で発見された石敷道路状遺構の調査	井辺一徳
439	8	鎌倉市	若宮大路周辺遺跡 検出された道路を中心とした調査	三ツ橋正夫・齋木秀雄
440	9	伊勢原市	伊勢原市No.71遺跡 要羅地区的調査で発見された古石器時代、古墳時代～中世の遺構	木村吉行
441	10	小田原市	小田原城三の丸・元藏跡第II地点・元蔵堀第II地点 中世戦国期の障子堀を改修した玉石積石垣を伴う堀	太田雅晃
442	11	横須賀市	矢ノ津坂遺跡 東京内湾を望む弥生～古墳時代の高台遺跡 誌上発表	新開基史
第39回 2015年11月15日 横浜市歴史博物館				
中世特集				
443	1	川崎市	塚越古墳 生出塚窓塗埴輪の出土	栗田一生
444	2	伊勢原市	上粕谷・和田内遺跡 中世の熊野神社・極楽寺の関連遺構検出	脇本博康・土 任隆
445	3	鎌倉市	大倉幕府跡 六浦道と思しき道路跡	宮田 真
特別講演				
446	4	伊勢原市	鎌倉の寺院遺跡について 子易・中川原遺跡 子易・大坪遺跡 大山山麓における発掘調査の成果	玉林義男
447	5	伊勢原市	浄業寺跡・三ノ宮・上竹ノ内遺跡 土地造成と出土した中世瓦	井辺一徳
448	6	伊勢原市	神成遺跡第6地点 谷底の土地開拓とその運営の変遷	早田利宏
449	7	横浜市	北仲通一丁目遺跡 横浜日本人街初の調査事例	土本 医
第40回 2016年11月13日 横浜市歴史博物館				
40回記念				
450	1	秦野市	蓑毛小林遺跡 天神山遺跡 第III地点	吉澤 健
451	2	小田原市	国史跡川尻石器時代遺跡	戸田哲也
452	3	相模原市	竹ノ内遺跡 第5地点 北金目塚越遺跡 第18地点	中川真人
453	4	平塚市	下飯田林遺跡 第2地点	山内謹司・市川康弘
454	5	横浜市	宝積寺跡・天神山下城遺跡	西野吉論
455	6	鎌倉市	橘樹郡衙跡「千年伊勢山台遺跡」 第16～20次調査	金森弘晃
456	7	川崎市	上柏屋・秋山上遺跡 第2次調査 上柏屋・秋山遺跡	栗田一生
457	8	伊勢原市	横野山王原遺跡	村松 篤
459	9	秦野市	天野賢一	

第40回 神奈川県遺跡調査・研究発表会

発表会担当役員 渡辺昭一・齊藤真一・◎浅賀貴広

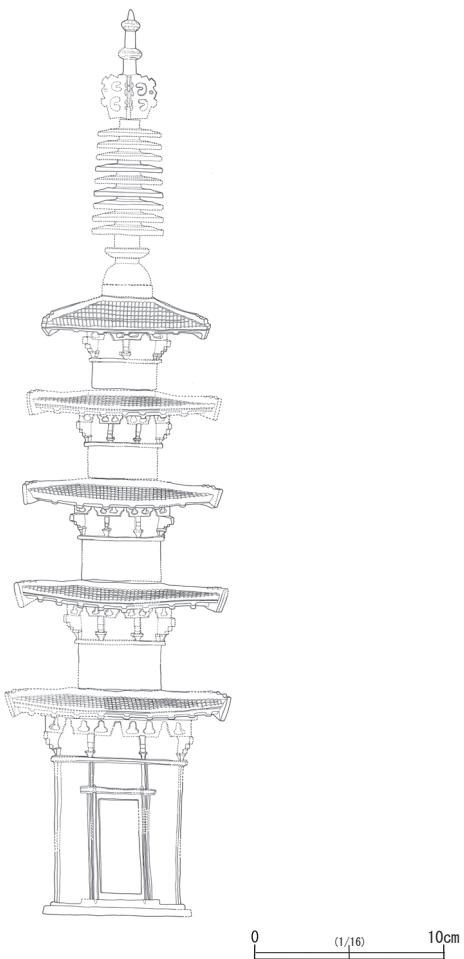
第40回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨

編 集 第40回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表会担当

発 行 神奈川県考古学会

発行日 2016（平成28）年11月13日

印 刷 有限会社 平電子印刷所 TEL. 0246-23-9051



東京都東村山市多摩湖町(宅部山遺跡)出土瓦塔